

# 長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選

(五)

2 0 1 5

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

## 序 文

『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』は、当センターが昭和57年に設立されて以来、30年を超える歩みのなかで蓄積された膨大な資料から、これまで充分に成果報告ができていなかった重要資料を掲載し、広くご活用頂くために刊行しているものです。

長岡京市内には、旧石器時代から江戸時代に至る遺跡が重複し、密集しています。そのため1ヶ所の調査で検出される遺構は複数の時期となり、調査の遺跡名も「長岡京跡」のほかに集落遺跡名や、場所によっては古墳名、城館名などが併記されることが珍しくありません。そこで調査名は「長岡京跡」の調査次数で代表させて表記しております。

5冊目となる本書には7ヶ所での調査を収録し、内容は弥生時代の雲宮遺跡、今里北ノ町遺跡、古墳時代の今里遺跡、長岡京跡、平安時代の開田遺跡などの成果を掲載しています。これらの資料はいずれも地域史の解明に欠かせない重要な資料であり、今後の研究に大きく役立つものと期待しております。

最後になりましたが、当センターの各種事業にご指導・ご協力頂きました皆さまに厚くお礼申し上げます。当センターでは今後とも埋蔵文化財の資料化、普及啓発活動事業などに積極的に取り組んで参ります。より一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 荏 田 富 男

## 例　　言

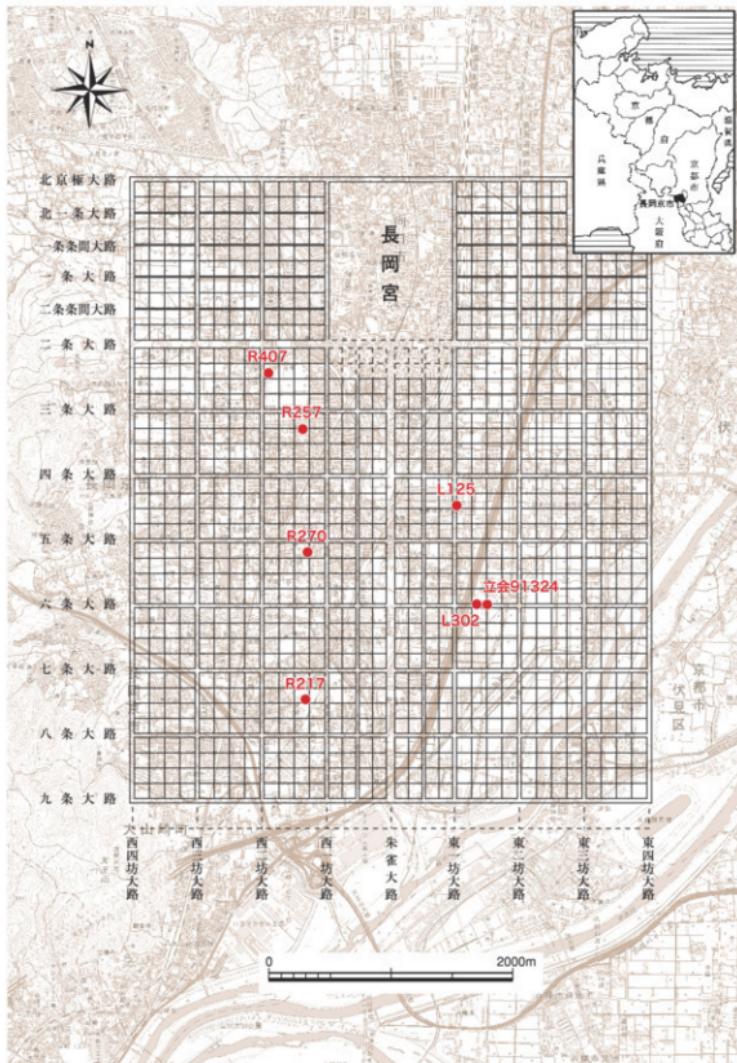
1. 本書は、公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターがこれまでに実施した発掘調査、立会調査から、充分な成果報告がなされていなかった重要資料をまとめたものである。
2. 本書収録の調査には、長岡京跡とその他の遺跡の調査がある。各遺跡の推定範囲は、『長岡市遺跡地図』第5版（2006年）によった。調査次数は各遺跡の調査回数を示し、長岡京跡では右京城と左京城に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。また、立会調査は、最初の2桁が調査年度の西暦表記、後半が年度内の通算立会調査次数を示す。
3. 長岡京跡の条坊名称は、山中章『古代条坊制論』『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従った。
4. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り『長岡市域地形分類図』『長岡市史』資料編一（1991年）によった。
5. 本文の参考文献、（注）に示した報告書のうち、使用頻度の高いものについては以下のように略記した。
  - ・京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』○ → 『京都府概報』○
  - ・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第○冊  
→ 『京都府センター概報』第○冊
  - ・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告集』第○冊  
→ 『京都府センター報告集』第○冊
  - ・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第○冊  
→ 『京都府センター報告書』第○冊
  - ・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第○号  
→ 『京都府センター情報』第○号
  - ・長岡市『長岡市史』○○編○ → 『長岡市史』○○編○
  - ・長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第○冊 → 『長岡市報告書』第○冊
  - ・公益財団法人長岡市埋蔵文化財センター『長岡市埋蔵文化財センターレポート』平成○年度  
→ 『長岡市センター年報』平成○年度
  - ・公益財団法人長岡市埋蔵文化財センター『長岡市埋蔵文化財調査報告書』第○集  
→ 『長岡市センター報告書』第○集
  - ・公益財団法人長岡市埋蔵文化財センター『長岡市埋蔵文化財発掘調査資料選』(○)  
→ 『長岡市センター資料選』(○)

- ・財團法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査概要』平成〇年度  
→『京都市研究所概要』平成〇年度
  - ・財團法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第〇冊  
→『京都市研究所報告』第〇冊
  - ・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第〇集 →『向日市報告書』第〇集
  - ・公益財團法人向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書』第〇集  
→『向日市報告書』第〇集
  - ・公益財團法人向日市埋蔵文化財センター『年報 都城』○ →『向日市センター年報』○
  - ・大山崎町教育委員会『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第〇集  
→『大山崎町報告書』第〇集
  - ・大山崎町教育委員会『大山崎町文化財年報』平成〇年度 →『大山崎町年報』平成〇年度
  - ・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第〇集  
→『長岡京跡研究所報告書』第〇集
  - ・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京跡発掘調査研究所ニュース 長岡京』第〇号  
→『長岡京ニュース』第〇号
6. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、報告によっては煩雑さを避けるため調査次数を略している。「S D 01」などの場合は、調査次数を冠した「S D〇〇〇〇 01」が正式な番号である。
7. 本書の挿図写真番号・付表番号は、各資料項目ごとに番号を付した。番号の重複を避けるために、まず、資料項目の順番を付し、次いで資料項目内での番号を記した。「1. 第 91324 次立会調査-2」に掲載した第1図の場合は、「第1-1図」と表記する。
8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。
9. 現地調査は、小田桐淳、山本輝雄、木村泰彦、中島皆夫が担当した。
10. 遺物写真是、第3-14図を除き、(公財)京都市埋蔵文化財調査研究所に撮影を委託した。
11. 本書の執筆は、基本的に調査担当者が分担し、文末に氏名を記した。
12. 本書の編集は、技術補佐員・整理員の協力のもとに中島皆夫が行った。

# 目 次

序 文		i
例 言		iii
1. 第 91324 次立会調査-2		1
～弥生時代 雲宮遺跡、溝群出土資料～		
2. 長岡京跡右京第 257 次調査		11
～弥生時代・長岡京期 今里北ノ町遺跡・長岡京跡、河道・溝等出土資料～		
3. 長岡京跡右京第 407 次調査		33
～古墳時代 今里遺跡、流路出土資料～		
4. 長岡京跡右京第 217 次調査		49
～長岡京期、甕掘え付け建物出土資料～		
5. 長岡京跡左京第 125 次調査		63
～長岡京期、条坊側溝等出土資料～		
6. 長岡京跡左京第 302 次調査		85
～長岡京期、条坊側溝等出土資料～		
7. 長岡京跡右京第 270 次調査		107
～長岡京期・平安時代 長岡京跡・開田遺跡、溝・掘立柱建物等出土資料～		

\* 表紙カット 左京第 302 次調査 条坊側溝出土の土師器椀 A (漆付着)



長岡京と調査地の位置 (1/40000)

## I. 第91324次立会調査-2 ～弥生時代 雲宮遺跡、溝群出土資料～

調査地	長岡市神足拾式5-1	地区名	2LKMJN 地区
調査期間	1992(平成4)年3月2日～3月27日	調査面積	106m <sup>2</sup>
時期	弥生時代前期	出土遺物	30 箱
立地	小畠川のつくった扇状地 標高 11.0 m		
参考文献	「第91324次調査」『長岡市センター年報』平成3年度 1993年 「I. 第91324次立会調査」『長岡市センター資料選』(一) 2012年		

### 調査の概要

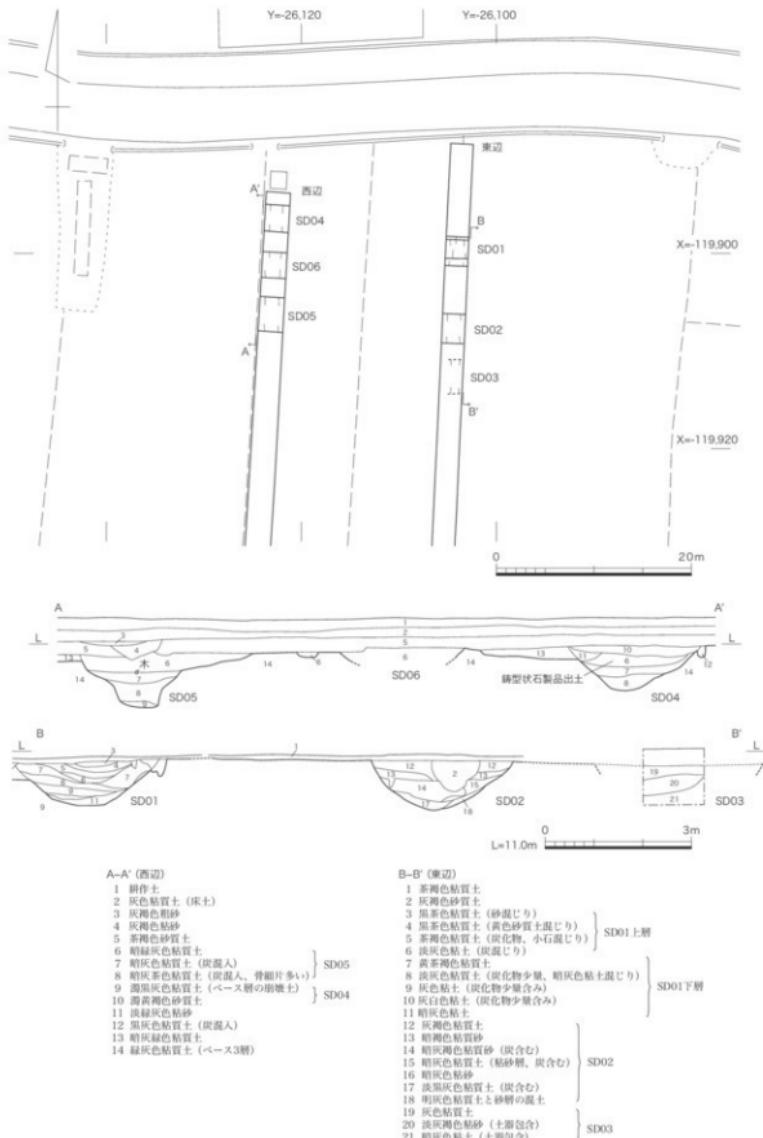
本報調査は、神足拾式において1枚の水田区画を造成するための擁護壁工事に伴って実施した立会調査に関するものである。

当地の北方には弥生時代前期の遺跡として注目された雲宮遺跡が所在し、これまで数次の調査で遺構・遺物が確認されてきた。特に左京第216次調査では弧を描く南北方向の環濠が発見され、前期雲宮遺跡が環濠を伴う集落遺跡として東側に展開することが判明している。本調査では左京第216次調査の環濠に繋がると考えられる東西方向の環濠が確認されたが、複数条検出されているため、時期差によるものであるかどうかを含めて、集落の変遷が問題となっている。

### 出土遺物

調査の概要及び主な出土遺物についてはすでに報告しているが、ここでは出土遺物で報告しき





第1-2図 検出遺構図 (1/500・1/100)

れていなかったものを追加で報告する。

土器類では、1～5・14～17・20～29は壺類である。1は口縁端部の内外面に赤色顔料が塗布されたものである。同様のものでは20・25も外面に塗布されている。2の頸部には竹管文が施されている。4・5はミニチュア壺である。20～29の体部片は重弧文、山形文、格子文などが認められるものである。

8～12は壺で、頸部のヘラ描沈線は2条から5条認められる。口縁端部には刻み目が施される。9はヘラ描沈線の間に刻み目を施すもの、10・14～17は竹管文を施すものである。

13の鉢と18の大型鉢は、口縁部に削り出し突帯がつくものである。

6は壺蓋と考えられる破片で、つまみ部中央には穿孔が認められる。19は手づくねの椀状の器形で、器壁は分厚い作りとなっている。ミニチュア土器と思われる。

7は高杯と考えられるものである。口縁端部に拡張された円盤部には1ヶ所穿孔が認められる。また円盤部の付け根には竹管文が施されている。この土器は弥生時代中期と考えられ、調査の際の混入であろう。

石器類では、サヌカイト製のものでは30～38がある。このうち30～37が打製石鐵で、凹基式の石鐵である。38は石錐である。磨製石器には39の石包丁が出土している。粘板岩製である。40・41は砂岩製の砥石である。

ほかに42の鹿角が出土している。角の基部と枝角は途中で切断されている。

これらの遺物の他に、2～6cm角の焼土塊が複数出土している。淡黄白色から淡赤灰色を呈するきめ細かな胎土で、赤色は火を受けているためと考えられる。これらの焼土塊は炉壁の一部である可能性が考えられる。

## 小 結

調査は工事立会という制約の中で行われたため、弥生時代前期の溝の調査に限定し、遺物の採集と遺構の記録に努めた。古墳時代の遺物なども若干採集されているが、遺構は確認できていない。

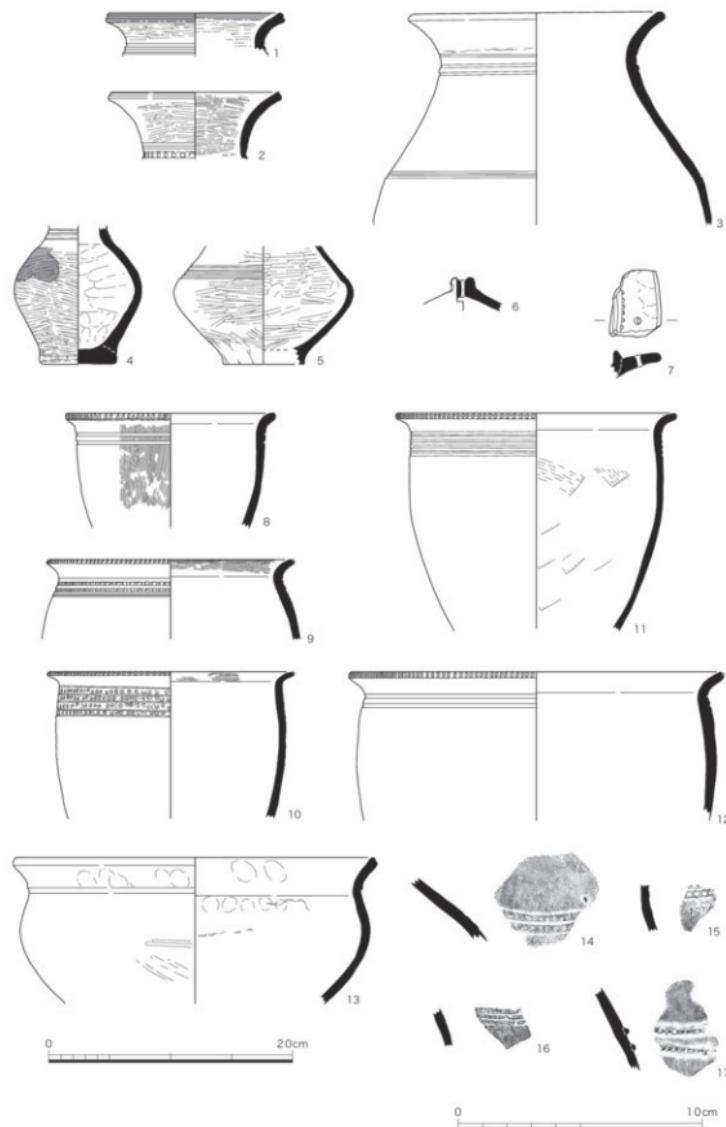
当調査地の北側では、左京第407次調査<sup>(3)</sup>がその後実施され、環濠内の集落の様相が判明してきている。これらの調査によって弥生時代前期・雲宮遺跡の範囲と内容はかなり判明したと言っても過言ではない。今後これらの資料を総合的に研究することによって、京都盆地での稻作文化の定着過程が解明されることを期待したい。

(小田桐 淳)

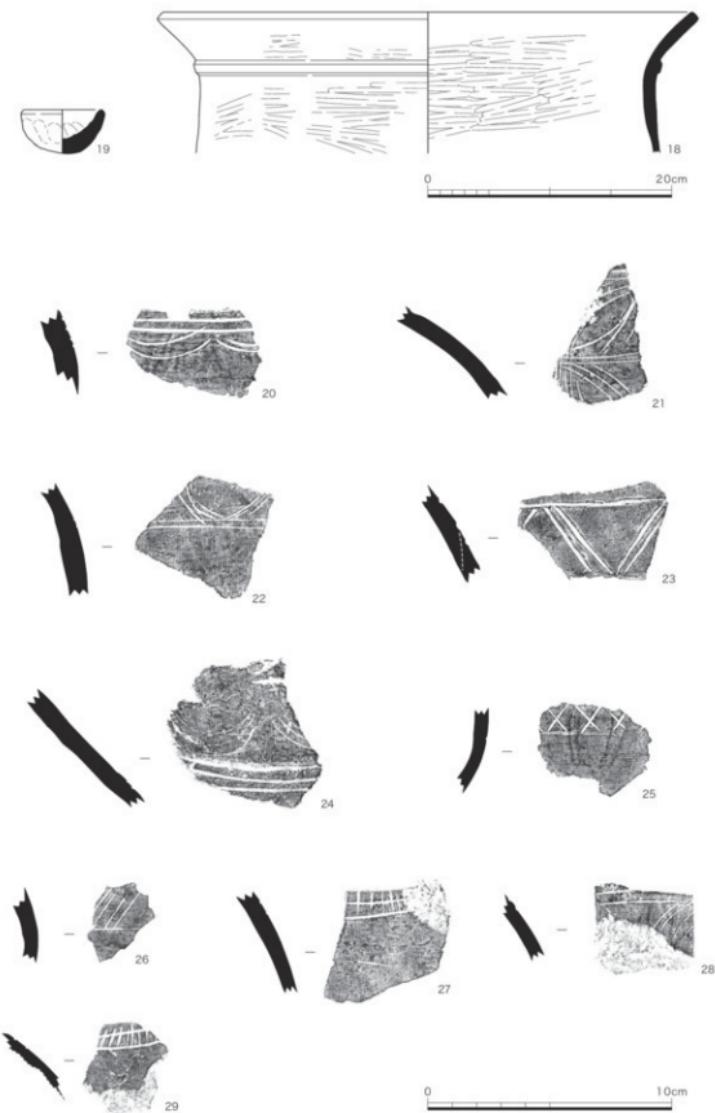
注1) 戸原和人「長岡京跡左京第216次調査 雲宮遺跡・長岡京工区」『京都府遺跡調査概報』第47冊 1992年

2) 小田桐 淳「1. 第91324次立会調査」『長岡京市センター資料選』(一) 2012年

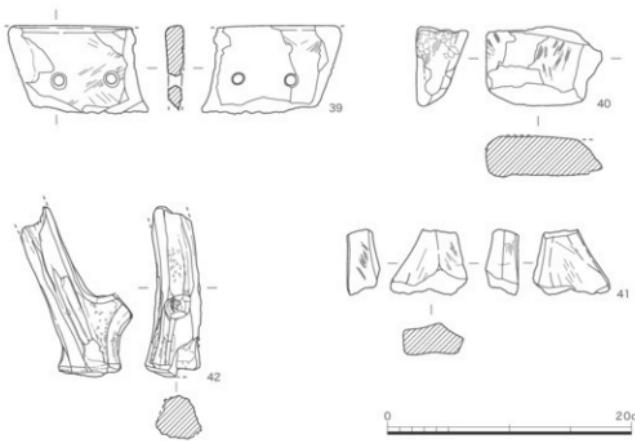
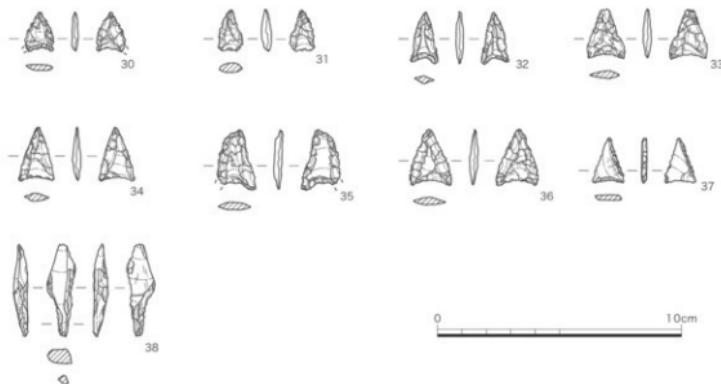
3) 柄山秀穂他「雲宮遺跡・長岡京左京六条二坊跡発掘調査報告書」『古代学協会研究報告』第10輯 (公財) 古代学協会 2013年



第1-3図 出土遺物実測図-1 (1/4・1/2)



第1-4図 出土遺物実測図-2 (1/4・1/2)

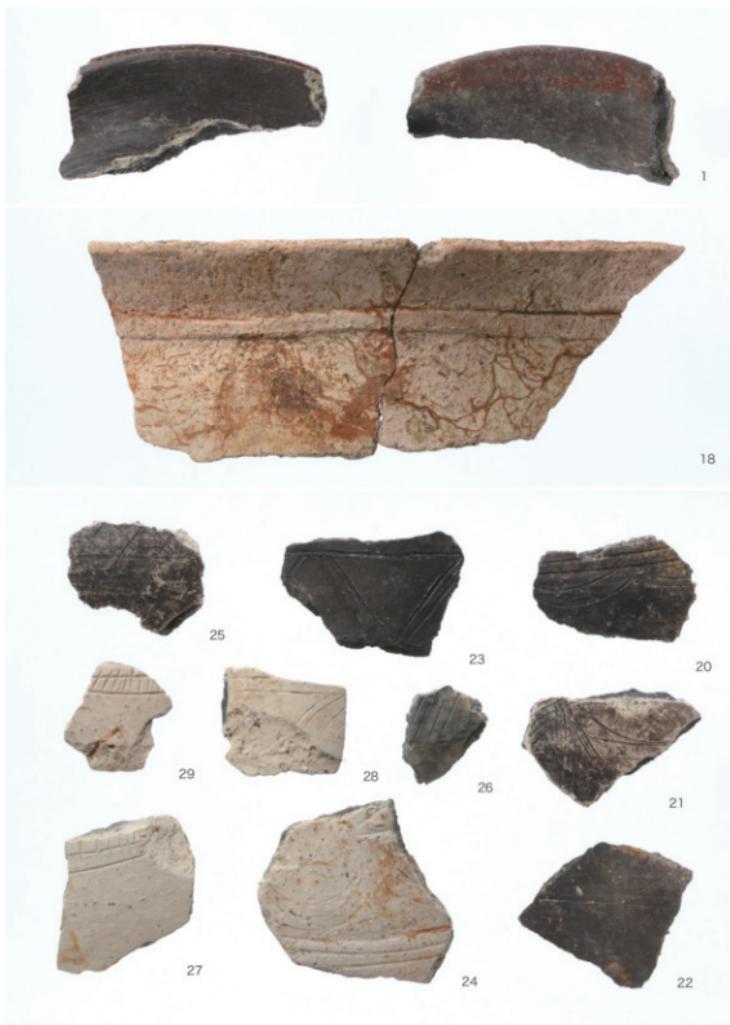


第1-5図 出土遺物実測図-3 (1/2・1/4)

付表1-1 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
甕	壺	1	7.0	(3.5)	-	暗灰色	内外面：横方向のヘラミガキ 口縁端面に1条のヘラ描沈線を施し、頸部に2条のヘラ描沈線が残る	満 SD04 4層	口縁部内外面に赤色顔料
		2	14.2	(5.6)	-	暗灰黄色	内外面：横方向のヘラミガキ 外面：口縁端面に沈線1条、頸部にヘラ描沈線3条と竹管文を施す	満 SD05 4層	
	広口壺	3	21.1	(17.5)	-	灰白色	外面：摩滅のため調整不明、体部にヘラ描沈線2条 頸部にケズり出し突帯を施す	断割り ベース 1層	
	壺	4	-	(11.5)	6.4	にぶい黄橙色	内面：体部強いナデ、頸部ヨコナデ 外面：ナメ方向のヘラミガキ、頭部にヘラ描沈線3条を施す	満 SD05 4層	肩部に黒斑
		5	-	(9.8)	6.7	灰白色	内面：横方向のヘラミガキ、一部に指圧痕が残る。外面：横方向のヘラミガキ、底部はヘラミガキ後強いナデ 体部上半にヘラ描沈線4条を施す	満 SD05 埋土	
	蓋	6	-	(2.75)	-	にぶい黄橙色	内面：ナデ つまみ部上下方向に穿孔	ベース 2層	
	高杯	7	-	(2.3)	-	灰白色	内面：突帯基部に竹管文を施す、穿孔1ヶ所残る	満 SD05	
	甕	8	17.3	(9.4)	-	黄灰色	内面：口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、ナデ、 外面：タテハケ 口縁端面に刻み目、頸部にヘラ描沈線2条を施す	満 SD03	
		9	20.4	(6.55)	-	灰黄色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ヨコナデ 口縁端面に刻み目、頸部に櫛描直線文後刺突文2帯とヘラ描沈線1条	満 SD04 3層	体部外面から口縁部内面にかけて煤付着
甕生土器	甕	10	20.4	(12.0)	-	灰黄色	内面：口縁部ヨコハケ後ヨコナデ、体部はナデ、 外面：口縁部ヨコナデ、体部摩滅のため調整不明、口縁端面に刻み目、頸部にヘラ描沈線文5条と竹管文4帯を施す	満 SD05 上層(紗)	体部外面から口縁部内面にかけて煤付着
		11	23.2	(17.9)	-	にぶい黄橙色	内面：口縁部ヨコナデ、外面：ナデ 口縁端部に刻み目、頸部にヘラ描沈線5条を施す	満 SD05 3層	
	鉢	12	30.8	(12.2)	-	灰黄色	内面：口縁部ヨコナデ、ナデ 口縁端部に刻み目、頸部にヘラ描沈線2条を施す	満 SD05 3層	口縁部外面と体部外面に煤付着
		13	30.0	(12.0)	-	にぶい橙色	内面：口縁部ヨコナデ、内面：ナデ、口縁部に指圧痕が残る、外面：横方向およびナメ方向のヘラミガキ	満 SD04	体部外面に煤付着
	壺	14	-	-	-	にぶい黄橙色	外面：ヘラ描沈線の間に竹管文を施す	満 SD05	
		15	-	-	-	灰色	外面：ヘラ描沈線の間に竹管文を施す	満 SD05	
		16	-	-	-	にぶい橙色	外面：ヘラ描沈線の間に刺突文を施す	満 SD05	
		17	-	-	-	明黄褐色	外面：2条の突帯を貼り付け、刻み目を施す	満 SD05	
鉢	18	44.4	(12.2)	-	-	明褐灰色	内面：口縁部調整不良、横方向のヘラミガキ 頸部に削り出し突帯を施す	断割りベース 1層	

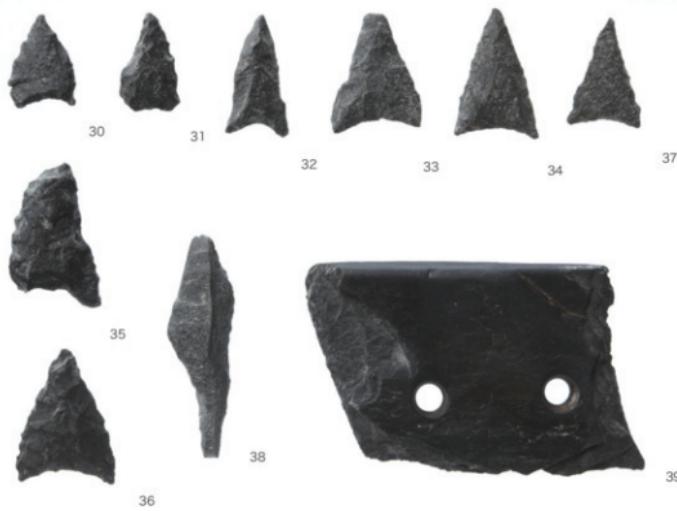
種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
弥生土器	碗	19	6.9	3.6	-	灰白色	内面:ナデ 外面:未調整	満 SD05 3層	
	壺	20	-	(3.5)	-	暗灰色	内面:ナデ 外面:横方向のヘラミガキ 3条のヘラ描 沈線文の下に二重弧文を施す	満 SD04 4層	外面に炭素 吸着した 後、赤色顔 料を塗布
		21	-	(3.8)	-	にぶい黄橙色	内面:ナデ後ヘラミガキ 外面:ヘラミガキに木葉文を施す	満 SD05 4層	
		22	-	(4.6)	-	黒褐色	内面:ナデ後ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ ヘラ描沈線2条と重弧 文を施す	満 SD05 3層	
		23	-	(4.0)	-	灰色	内面:横方向ナデ 外面:ヘラ描沈線間に山形文を施す	満 SD05 4層	
		24	-	(4.7)	-	灰白色	内面:ナデ、オサエ 外面:ナデ 重弧文とヘラ描沈線2条	満 SD05 3層	
		25	-	(3.5)	-	黑色	内面:ナデ 外面:横方向のヘラミガキ ヘラ描沈線1 条と斜格子文を施す	満 SD04 4層	外面に炭素 吸着した 後、赤色顔 料を塗布
		26	-	(3.15)	-	灰色	内面:ヨコナデ後ヘラミガキ 外面:ヘラミガキと山形文を施す	満 SD05 3層	
		27	-	(4.6)	-	灰白色	内外面:ヘラミガキ 外面:格子文を施す	満 SD05 3層	
		28	-	(2.6)	-	にぶい黄橙色	内面:ナデ 外面:ヘラ描沈線2条と重弧文を施す	満 SD05 3層	
		29	-	(2.75)	-	灰黄色	内面:剥離のため調整不明 外面:ヘラミガキ 格子文を施す	満 SD05 3層	
石器	石鏡	30	幅 1.15	長 1.6	厚 0.25			満 SD05	重量 0.4g サヌカイト
		31	幅 1.0	長 1.7	厚 0.4			満 SD05 3層	重量 0.6g サヌカイト
		32	幅 1.1	長 2.1	厚 0.3			満 SD05	重量 0.5g サヌカイト
		33	幅 1.55	長 2.0	厚 0.35			満 SD05 3層	重量 0.7g サヌカイト
		34	幅 1.45	長 2.2	厚 0.3			満 SD05 3層	重量 0.7g サヌカイト
		35	幅 1.55	長 2.45	厚 0.3			満 SD05	重量 1.2g サヌカイト
		36	幅 1.7	長 2.3	厚 0.3			満 SD05	重量 1.0g サヌカイト
		37	幅 1.3	長 1.85	厚 0.2			満 SD05 3層	重量 0.5g サヌカイト
	石鍬	38	幅 1.15	長 3.8	厚 0.6			満 SD05 3層	重量 2.1g サヌカイト
石製品	石皿	39	幅 (5.75)	長 (3.6)	厚 (0.75)			満 SD04 4層	重量 19.2g 粘板岩製
	砥石	40	幅 9.5	長 6.5	厚 3.4			ベース 1層	重量 324.1g 砂岩製
		41	幅 6.3	長 5.3	厚 2.6			満 SD05 上層(紗)	重量 87.8g 砂岩製
鹿角	-	42	幅 (9.1)	長 (13.95)	厚 3.5	基部と枝部に切断面、上端折れ		満 SD05 4層	



第1-6図 出土遺物-1



41



39

第1-7図 出土遺物-2

## 2. 長岡京跡右京第 257 次調査 ～弥生時代・長岡京期 今里北ノ町遺跡・長岡京跡、河道・溝等出土資料～

調査地	長岡京市野添二丁目 51-3	地区名	7ANINE-5 地区
調査期間	1987（昭和 62）年 4月 8 日～5月 9 日	調査面積	240m <sup>2</sup>
時期	弥生時代中期・長岡京期	出土遺物	5 箱
立地	氾濫原 I 標高 22.0 m		
参考文献		「右京第 257 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 62 年度 1989 年	

### 調査の概要

本調査は共同住宅建設に伴って実施した発掘調査で、調査地は長岡京跡右京四条二坊七町にあるとともに、縄文時代から古墳時代に至る集落遺跡である今里北ノ町遺跡にも該当しているところである。

調査地の旧状は水田であり、耕作土、灰茶色砂泥（第1層）、暗灰褐色粘質土（第2層）の堆積が 0.5 m ほどあった後、明綠褐色粘質土のベース層に至る。調査地の位置は旧国土座標第VI座標系で X = -118,534、Y = -27,577、水田面の標高は 22.5 m である。

ベース面からは 3 時期の切り合いをもつ遺構が検出された。最も新しい時期の遺構は、第2層を埋土とする凹み群で、直径約 5 ~ 10cm の円形を基本として帶状に密集している。深さはいずれも 5 cm ほどで、植物の根株痕跡と考えられるものである。埋土からは中世を下限とする土



第 2-1 図 発掘調査地位置図 (1/5000)

器小片が出土している。他に黒色土器片や、陶磁器片、長岡京期の土器片なども混入している。

第2-5図11～15・26が第2層出土の中世遺物である。11は瓦器小皿、12～15は土師器小皿である。26は白磁碗底部である。他に銭貨「唐國通寶」(中国・五代-958年初鑄)が1枚出土している(第2-11図)。

他の時期では、長岡京期の遺構と弥生時代の遺構がある。以下、これらの遺構について報告する。

#### 長岡京期の遺構と遺物

長岡京期の遺構としては、掘立柱建物SB04と東西溝SD01、落ち込みSX08が検出された。

溝SD01は、トレーニチ北部で検出された東西溝で、途中1.8mほど途切れている。溝幅は1.2m前後、深さは5cmから深いところで15cmほどと凹

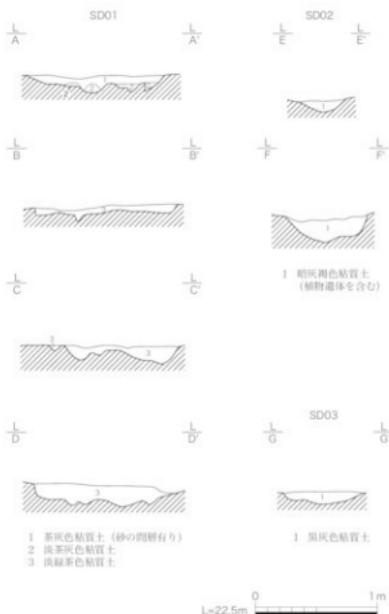
凸のある溝底となっている。トレーニチの東端では幅は狭くなり、深さも浅くなっている。溝の中からは土器類の他に木製品も出土している。溝の心座標はX=-118,529.6である。

掘立柱建物SB04は調査トレーニチの南東端で一部検出されたため、弥生時代流路を調査する際にトレーニチを南北に拡張して全容解明に努めたが、建物の南西隅柱は土置き場の関係で調査できなかった。建物は梁間3間×桁行2間の南北棟で、柱間は2.1m等間である。

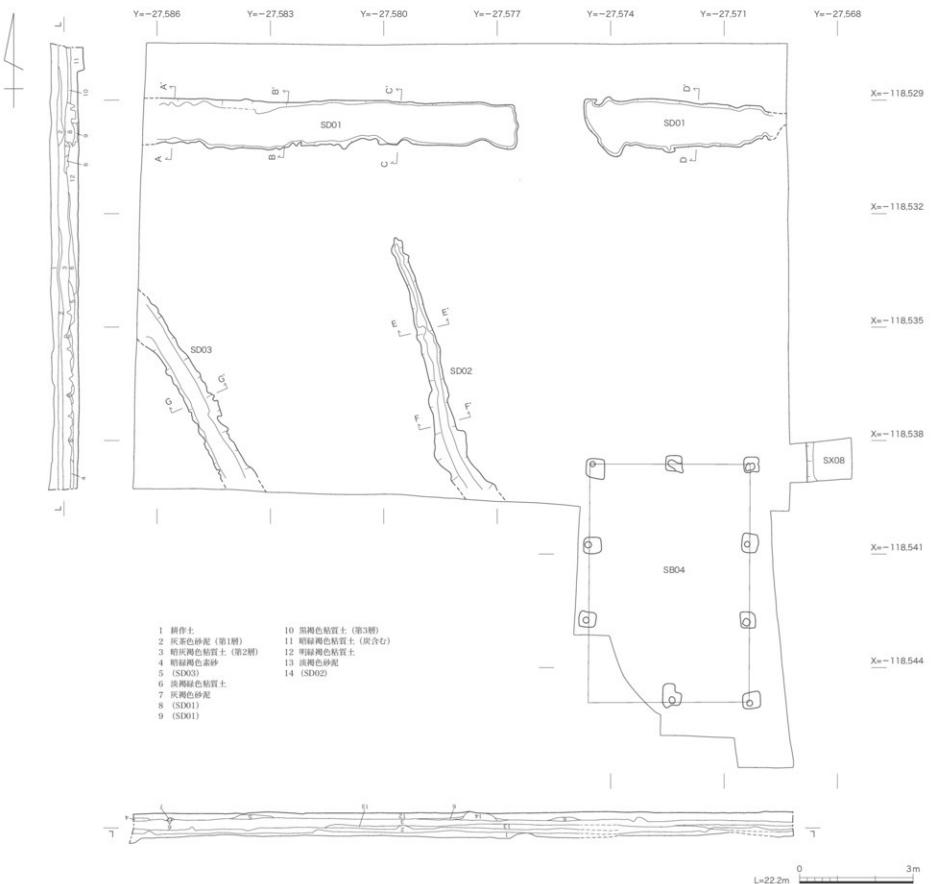
落ち込みSX08はトレーニチ東拡張部で検出された東へ20cmほど落ち込む遺構である。埋土は溝SD01と同様の土で、幅1mにわたって確認したが東での上がりは確認されなかった。南北方向の溝ないし土坑になるとを考えられる。

長岡京期の遺物には包含層から出土したものも多い。第2-5図16～25は第2層出土のものである。須恵器杯B蓋(16～18)、杯B(19～23)、杯A(24)、製塙土器(25)などが出土している。

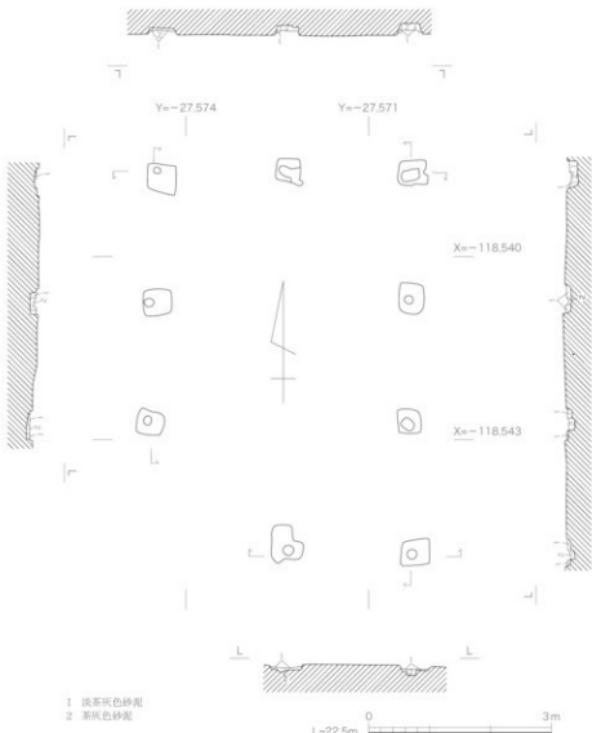
溝SD01からは土器類では、土師器皿E(1)、椀C(2・3)、皿A(4)、甕(5)、須恵器杯B(6)、壺蓋(7)、製塙土器(8)などが出土している。木製品では第2-6図に掲載したものが出土している。27～31は箸と考えられるものである。いずれも折れており、全長のわかるものはない。39は長さ20cmで先細に加工されており、箸になる可能性も考えられる。



第2-2図 溝SD01～03断面図(1/40)



第2-3図 調査区検出遺構図・土層図 (1/100)



第2-4図 掘立柱建物SB04 実測図 (1/80)

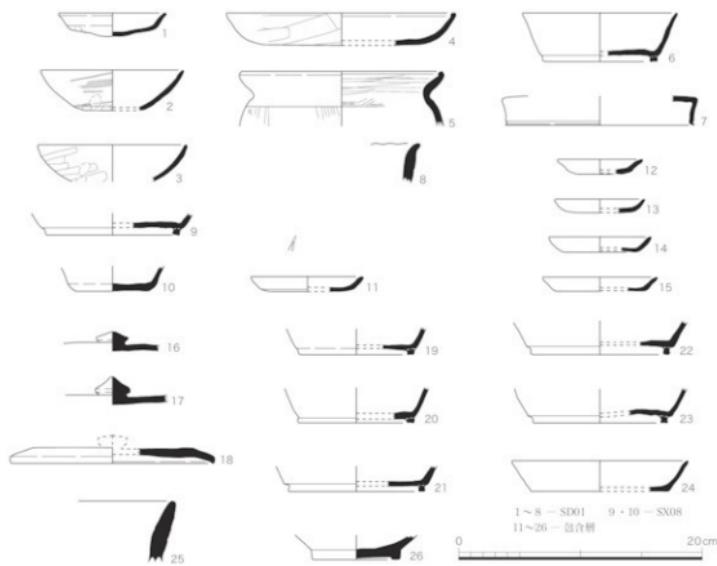
32・34は棒状の一端を斜めに切り落としているものである。42は荷札状、43は圭頭状に加工した部分に穿孔し、糸で括る札状の形態をしているが、墨痕は認められない。44は紡輪状の木製品、45は曲物の底板である。側面に1ヶ所木釘の跡が認められる。

SX08からは第2-5図9・10などが出土している。9の須恵器杯Bは底部外面が摩耗しており、転用窓である。10は須恵器杯Aと考えられる。

## 小 結

本調査地は長岡京右京四条二坊七町にあたっている。同じ町内のこれまでの調査では、調査地の北で右京第249次調査、右京第333次調査などが行われており、四条条間北小路南側溝SD33301が検出されている。南側溝の心座標はX=-118,476.1であった。

今回検出の東西溝SD01は、右京四条二坊七町の北に位置する四条条間北小路南側溝の南53.5mにあたることになる。四条条間小路北側溝がまだ未検出であるため、右京四条二坊七町



第2-5図 出土遺物実測図-1 (1/4)

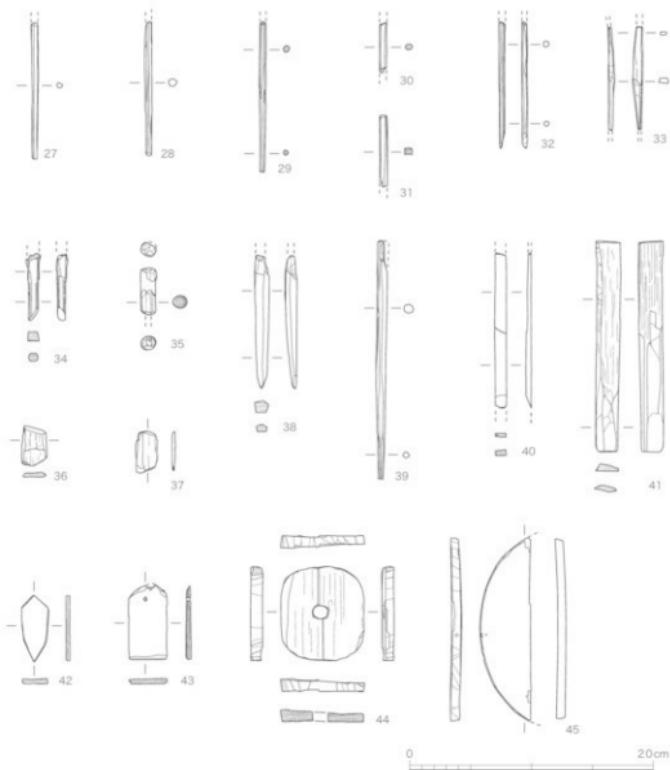
の南北距離がまだ確定できないが、一町を 120 m (40 丈) 四方と仮定すると溝 SD01 は七町の中央より北 6.5 m の位置になり、町の南北の中央に掘立柱建物 SB04 が位置することになる。

調査地の東隣りで実施した右京第 334 次調査、右京第 245 次調査で溝 SD01 の延長が検出されていないことを合わせると溝 SD01 は部分的に施行された溝で、町内を分割する溝とはならないと現時点では考えられる。

今回の調査では加工された木片が多く出土したが、右京第 333 次調査では人形や漆器鉢、「殿」などの墨書き土器、右京第 249 次調査では「殿」墨書き土器が複数出土しているなど、この町内は特殊な遺物を伴う区域であると考えられる。

さらに周辺に目を向けると、右京四条二坊八町では、右京第 296 次調査で 1/2 町占地の宅地が確認されており、掘立柱建物群とともに縁軸火舎や墨書き土器などが検出されている。また右京四条二坊十町で実施した右京第 168 次調査<sup>(6)</sup>では、「衛門」などの墨書き土器や木簡、木製品などが出土している。

これらの遺構・遺物からは、貴族の邸宅跡や京内官衙などの存在が浮かび上がってくる。本調査地および隣接する町には、このような重要な遺構が展開しているものと考えられ、長岡京の右京城でも重要な地域であると考えられる。今後この地域のさらなる解明が待たれるところである。



第2-6図 出土遺物実測図-2 (1/4)

- 注1) 山本柳雄「右京第249次調査概要」『長岡市報告書』第18冊 1987年  
 2) 小田桐 厚「右京第333次調査概報」『長岡市センターニュース』平成元年度 1991年  
 年報では当調査地を「右京三条二坊五町」として報告しているが、長岡京の条坊復原は平成4年度から、  
 二条大路を2町北にあげた新条坊復原を採用している。  
 3) 原 秀樹「右京第334次調査概報」『長岡市センターニュース』平成元年度 1991年  
 4) 岩崎 誠「右京第245次調査概報」『長岡市センターニュース』昭和61年度 1988年  
 5) 木村泰彦「右京第296次調査略報」『長岡市センターニュース』昭和62年度 1989年  
 6) 木村泰彦「右京第168次調査略報」『長岡市センターニュース』昭和59年度 1985年

付表2-1 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	皿 E	1	8.8	1.9	-	淡茶色	内外面：ヨコナデ、外面：底部ユビオサエ	SD01 A区 埋土1層	外面に煤付着
	椀 C	2	11.7	3.3	-	淡茶褐色	内面：調整不明、外面：ヘラミガキ、底 部に指圧痕残る (b 手法)	SD01 E区 埋土	
		3	12.2	(3.0)	-	淡橙色	内面：調整不明、外面：ヘラケズリ、 指圧痕残る (c 手法)	SD01 E区 埋土	
	皿 A	4	18.8	2.6	-	淡茶色	内面：ナデ、外面：口縁端部ヨコナデ、 ヘラケズリ (c 手法)	SD01 F区 埋土	
	甕	5	16.8	4.5	-	黄茶色	内面：口縁部ヨコハケ、外面：口頸部 ヨコナデ、体部タテハケ	SD01 C区 埋土	内部に煤付着
須恵器	杯 B	6	12.6	3.9	9.45	灰褐色	内外面：クロナデ、外面：貼り付け 高台、底部ヘラオコシ	SD01 A区 上面	
	壺蓋	7	15.4	(2.4)	-	灰色	内外面：クロナデ、外面：天井部ヘラ オコシ	SD01 B区 埋土	
製陶土器	-	8	-	(3.2)	-	橙色	内外面：ナデ	SD01 D区 埋土	
須恵器	杯 B	9	-	(1.8)	11.0	灰色	内外面：クロナデ、外面：貼り付け 高台、底部ヘラオコシ	2区 SX08 転用罐	
	杯 A	10	-	(2.0)	6.0	暗灰色	内外面：クロナデ、外面：底部ヘラ ケズリ	3区 SX08	
瓦器	小皿	11	9.2	1.2	-	黑茶色	内外面：ナデ、内面：底部ヘラミガキ	拡張区	
土師器	小皿	12	7.0	1.2	-	淡橙色	内外面：ナデ	拡張区 1・2層	
		13	7.4	1.1	-	黄褐色	内外面：ナデ	2層	
		14	8.4	1.2	6.2	淡黄色	内外面：ナデ	1・2層 あげ土	
		15	9.4	1.15	7.5	乳黃灰色	内外面：ナデ	2層	
須恵器	杯 B 蓋	16	-	(1.6)	-	灰色	内外面：クロナデ	2層	
		17	-	(2.3)	-	灰色	内外面：クロナデ	拡張区 1・2層	
		18	16.8	1.3	-	淡黄灰色	内外面：クロナデ、外面：天井部ヘ ラオコシ後ナデ	2層、拡張 区1・2層	
	杯 B	19	-	(2.1)	9.45	灰色	内外面：クロナデ、外面：貼り付け 高台、底部ヘラオコシ後ナデ	3区 2層 下面	
		20	-	(2.8)	9.6	灰色	内外面：クロナデ、外面：貼り付け 高台、底部ヘラオコシ後ナデ	2層	
		21	-	(1.9)	11.2	内面：灰色、 外面：黒灰色	内外面：クロナデ、外面：貼り付け 高台、底部ヘラオコシ	2層	

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯B	22	-	(2.5)	11.4	内面:灰色、 外面:暗灰色	内外面:ロクロナデ、外面:貼り付け 高台、底部ヘラオコシ	2層	
		23	-	(2.8)	11.05	灰色	内外面:ロクロナデ、外面:貼り付け 高台、底部ヘラオコシ後ナデ	4区 2層下	
	杯A	24	14.4	(2.5)	11.3	青灰色	内外面:ロクロナデ、外面:底部ヘラ オコシ後ナデ	拡張区 1・2層	
製塗土器	-	25	-	(5.0)	-	黒褐色	内外面:ナデ	2層	
白磁	碗	26	-	(2.0)	7.2	白色	内外面:施釉、外面:削り出し高台	2層	
木製品	箸	27	幅 0.5	長 (11.1)	厚 0.4			SD01 C区 埋土	
		28	幅 0.6	長 (11.0)	厚 0.6			SD01 D区 埋土	
		29	幅 0.5	長 (12.3)	厚 0.55			SD01 D区 埋土	
		30	幅 0.6	長 (4.1)	厚 0.45			SD01 A区 2層	
		31	幅 0.65	長 (5.9)	厚 0.55			SD01 A区 2層	
		32	幅 0.45	長 (10.3)	厚 0.5			SD01 A区 2層	
		33	幅 0.9	長 (8.5)	厚 0.45			3区 3層 (SD01 下 層)	
		34	幅 0.9	長 (5.5)	厚 0.75			SD01 B区 埋土	
		35	幅 1.3	長 (3.7)	厚 1.05			SD01 C区 埋土	
		36	幅 1.05	長 (3.3)	厚 0.35			SD01 E区 埋土	
		37	幅 (1.8)	長 (3.4)	厚 0.25			SD01 E区 埋土	
		38	幅 1.2	長 (10.9)	厚 0.95			SD01 E区 埋土	
		39	幅 0.8	長 19.5	厚 0.7			SD01 A区 2層	
		40	幅 0.9	長 (12.7)	厚 0.5			SD01 B区 埋土	
		41	幅 2.05	長 17.2	厚 (0.55)			SD01 C区 埋土	
		42	幅 2.2	長 5.45	厚 0.45			SD01 C区 埋土	
		43	幅 3.15	長 (6.1)	厚 0.45			1区 2層 下面	
		44	幅 6.8	長 7.7	厚 1.0			SD01 F区 埋土	
曲物	45	幅 (4.2)	長 (15.0)	厚 0.7				SD01 C区 埋土	底板



第2-7図 遺構検出状況（西から）



第2-8図 調査地全景（西から）



第2-9図 拡張区・掘立柱建物 SB04 (北から)



第2-10図 出土遺物

### 弥生時代の遺構と遺物



第 2-11 図 「唐國通寶」

弥生時代の遺構は、河道 SR05 と橋状遺構 SX07 である。他に、北西-南東方向に掘られた溝 SD02・03、土坑 SK06 も埋土的にはこの時期になると考えられるが、明確な時期の決め手となる遺物は出土していない。

河道 SR05 はトレンチ北半部を占める流路跡である。調査地では弧状に弯曲する南肩が検出された。深さは 1.7 m ほどである。埋土の状況から、下半部に堆積している砂礫層の時期と、上半の粘砂系堆積層の 2 時期に分けられる。橋状遺構 SX07 は中間の時期に構築されており、流れが移動した時にぬかるみとなった場所に架けられたものと考えられる。

橋状遺構 SX07（第 2-14 図）は北セクション内で見つかった遺構である。打ち込まれた状態の杭は 4 本で、他に 2ヶ所杭跡がある。杭列の内側に 3 本の材を組み合わせて橋桁とし、橋桁と直行する材が 3 カ所残存していた。橋桁の材は一端を杭状に加工した表皮を残す丸太材である。

土坑 SK06（第 2-15 図）は南北 1.6 m、東西 1.3 m 以上の方形ぎみを呈した焼土坑である。検出された場所は河道 SR05 の肩付近で、SR05 の最上層と区別不能な層をベースとして切り込まれている。土坑の底近くに堆積している層は焼成を受けており、また上層の埋土には炭片が含まれている。遺物が出土していないため時期は不明であるが、河道より新しいと考えられる。

出土遺物は全て河道 SR05 上半の層から出土している。土器類（第 2-16 図）には壺（46・50・51）、甕（47・48）、高杯脚部（49）がある。48 は近江系受け口状口縁の甕で、口縁部外面には柳描文が認められる。49 の脚部外面端部には穿孔列が巡るかほとんど貫通していない。50 は広口壺の口縁部と考えられるものである。大きく開いた口縁端部は面をつくり、面の下端部の一部は指圧痕によって波状を呈している。51 は受け口状に聞く口縁をもつ大型の壺で、体部と頸部との境界に突帶を巡らせ、刻み目を施している。

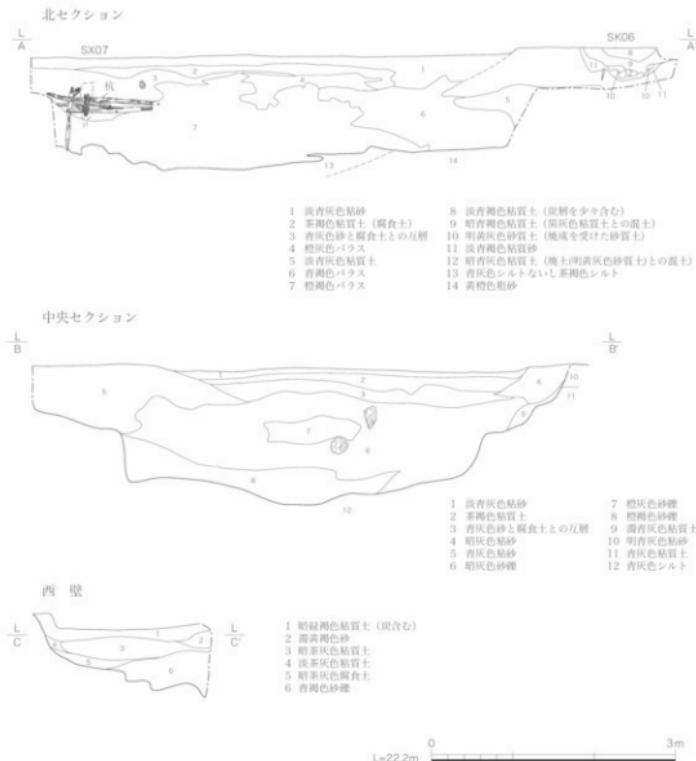
これらの土器類は中期後葉に位置付けられるものがほとんどであるが、50 のみやや古くなると考えられる。

木製品（第 2-17 図）では、52 は板材の表裏を丁寧に削って薄く加工したものである。孔は開けられておらず、勘の未成品の可能性が考えられる。53 は両端を欠き全長は不明であるが、長方形の板材の三方に孔を穿つものである。田下駄と考えられる。一端は焼け焦げている。54・55 は杓子の身と把手と考えられるものである。荒い削りの未成品である。

第 2-18 図は橋状遺構 SX07 の部材である。57 の杭は中央および上端の腐食がひどい。中央の腐食部は杭が打ち込まれた上面部にあたると思われる。



第2-12図 流路SR05 平面図 (1/100)

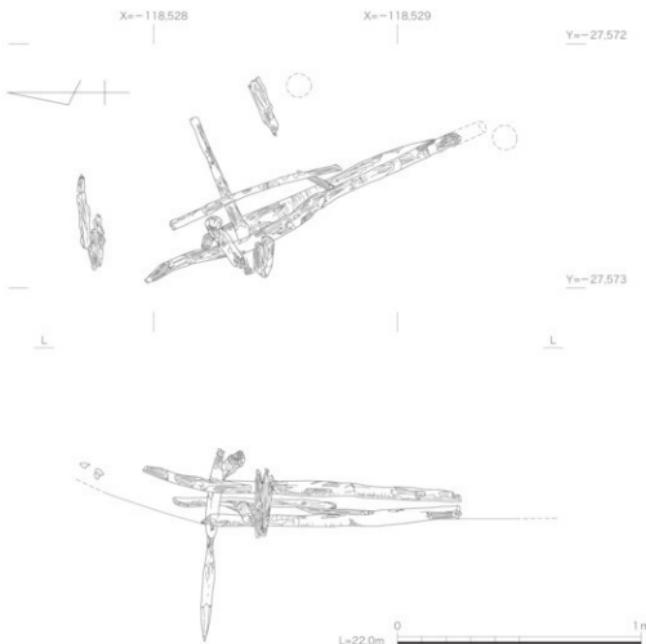


第2-13図 流路SR05断面図(1/60)

## 小 結

河道 SR05 は当初流れが頻繁で砂礫層を主に堆積させていたが、弥生時代中期後葉になると本流が移動し、当地では腐植土や粘質土層が堆積する湿地状の環境になる。この時期に橋状構造 SX07 が架けられていることから、ここが集落から水辺ないし水田に至る通路であったものと考えられる。また土器とともに木器未成品や廃棄品が出土していることからも、集落は近接するところに営まれていたと推測される。

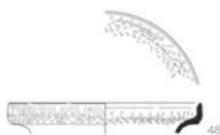
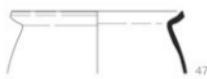
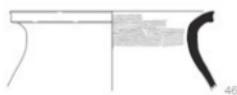
周辺の調査では、北方の右京第 50 次調査で中期～後期の河道、右京第 75 次調査で中期の河道、右京第 117 次調査で前期～後期の河道、右京第 333 次調査では後期の河道がそれぞれ確認されている。西方では右京第 323 次調査で弥生時代の土坑と中期～後期の河道、東方では右京第 245 次、249 次調査で後期の河道が確認された。



第2-14図 橋状造構 SX07 実測図 (1/20)

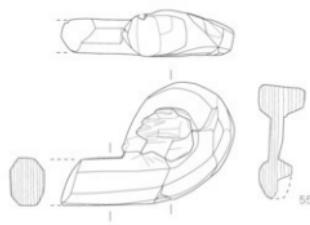
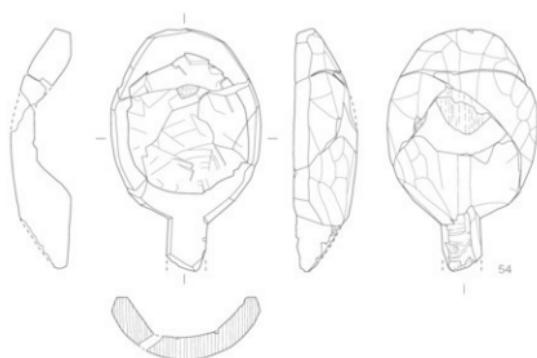
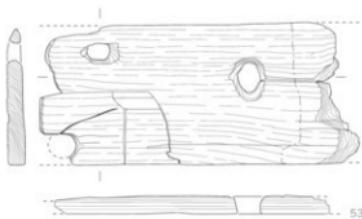
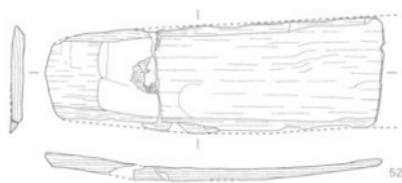


第2-15図 土坑SK06 実測図 (1/40)



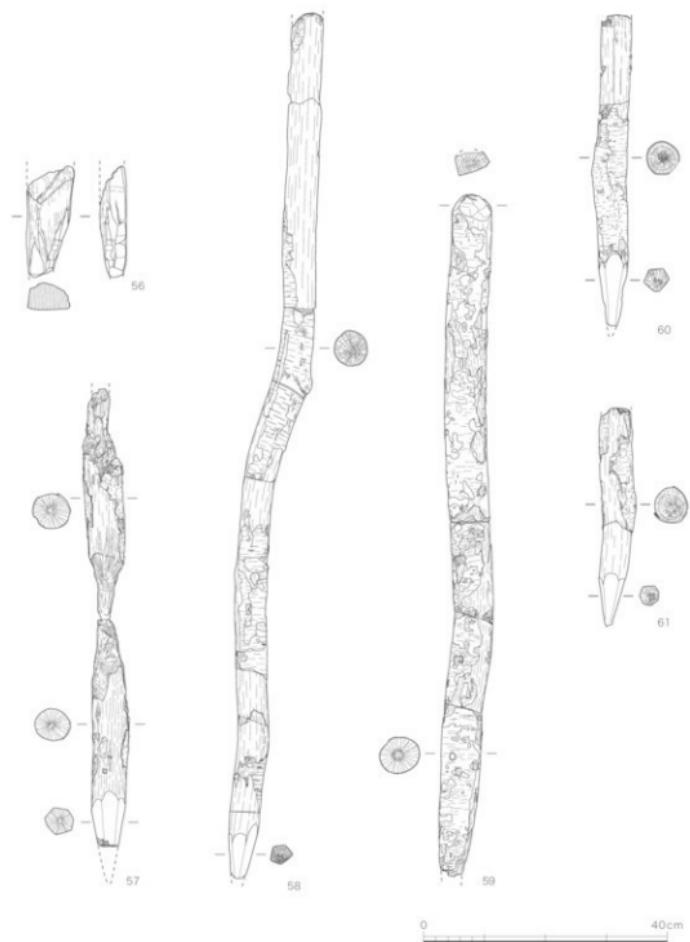
0 20cm

第 2-16 図 出土遺物実測図-3 (1/4)



0 20cm

第2-17図 出土遺物実測図-4 (1/4)



第2-18図 橋状遺構 SX07 部材実測図 (1/8)

付表 2-2 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
弥生土器	壺	46	16.6	(6.6)	-	淡黄茶色	内面：口縁部ヨコナデ、ヨコハケ、体部ナデ、外面：口縁端面に強いヨコナデ、体部ナデ	SR05 B区3層	
		47	14.25	(5.15)	-	淡黄褐色	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：ナデ、外面：調整不明	SR05 C区3層	外面に炭化物付着
	甕	48	15.8	(2.6)	-	茶褐色	内外面：口縁部ヨコナデ、外面：ナデ、内面に柳描列点文、外面に柳描山形文、列点文を施す	SR05 C区3層	近江系
		49	-	(2.6)	10.8	黄茶灰色	内面：横方向のヘラケズリ、外面：脚部ヨコナデ、脚部ナデ、据部に刺突文を施す	SR05 C区1層 2層	
	高杯	50	29.2	(2.65)	-	淡黄灰色	外面：口縁端面下部は指頭による押痕	SR05 C区3層	
		51	30.4	(52.8)	7.0	外面：淡橙茶色～橙茶白色、内面：黄茶灰色、一部暗褐色	内面：頸部ヨコハケ後ナデ、体部ヨコハケ、タテハケ、底部は摩滅のため調整不明、外面：口縁部ヨコハケ後ナデ、体部ナナメ方向のタタキ、体部下半はタタキ後ハケ、継方向のヘラケズリ。口縁部に沈線を、頸部に突帯と刻み目を施す	SR05 B区3層、 C区3層、 C区肩部	
木製品	不明	52	幅 (9.5)	長 27.8	厚 1.5			SR05 C区3層	
	田下駄	53	幅 (11.7)	長 (26.25)	厚 1.5			SR05 B区3層	3ヶ所穿孔
	杓子	54	幅 12.3	長 (19.9)	厚 5.2			SR05 C区3層	
		55	幅 10.1	長 (14.2)	厚 3.8			SR05 2層	把手

このように当調査地周辺では弥生時代各時期の河道が確認されている。集落は南方の段丘上に展開する可能性が高く、今後の調査に期待される。

(小田桐 淳)

7) 山本輝雄「右京第 50 次調査概要」『長岡京市報告書』第 12 叢 1984 年

8) 山本輝雄「右京第 75 次調査概要」『長岡京市報告書』第 9 叢 1982 年

9) 小田桐 淳「右京第 117 次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和 57 年度 1983 年

10) 原 秀樹「右京第 323 次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和 63 年度 1990 年



第2-19図 調査地全景（西から）



第2-20図 流路 SR05 断面（西から）



第 2-21 図 橋状遺構 SX07 (南東から)



第 2-22 図 出土遺物-1



第2-23図 出土遺物-2

### 3. 長岡京跡右京第407次調査 ～古墳時代 今里遺跡、流路出土資料～

調査地	長岡京市今里畔町 23	地区名	7ANIAIC - 3 地区
調査期間	1992(平成 4) 年 7 月 10 日 ~ 8 月 12 日	調査面積	280m <sup>2</sup>
時期	古墳時代	出土遺物	41 箱
立地	氾濫原 I 標高 27.7 m		
参考文献	「右京第 407 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 4 年度 1994 年 「4. 長岡京跡右京第 407 次調査」『長岡京市センター資料選』(三) 2013 年		
調査の概要			

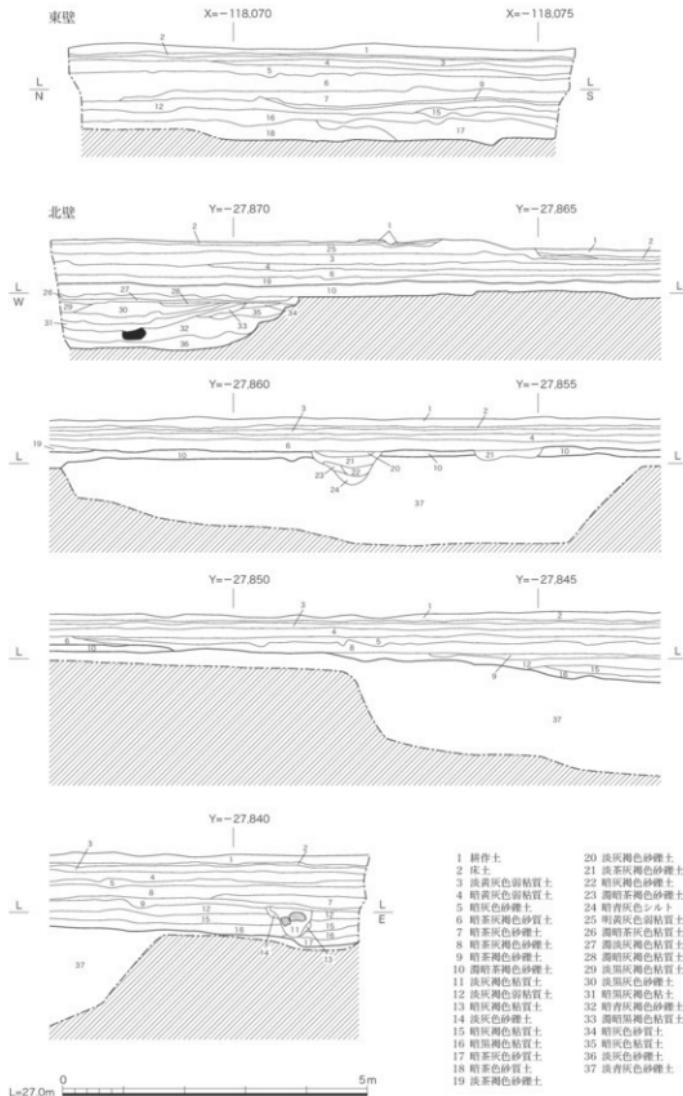
## 調査の概要

調査地は、飛鳥時代より法灯を伝える乙訓寺の北東約300mに位置し、旧石器時代以降の複合遺跡である今里遺跡の北東部にあたる。調査地周辺では、数十回もの調査が行われており、長岡京期を始め、弥生・古墳・平安時代の重要な成果が認められている。

本調査は、共同住宅建設工事に伴って実施したものである。調査区は当初、南北約8m、東西約31mの範囲を設定した。調査期間の終盤に北辺2箇所、西辺1箇所で調査区の拡張作業を行った。このうち、西辺の拡張区は、平安時代の掘立柱建物西側の状況を確認するとともに、右京第282次調査<sup>(註)</sup>で櫛状木製品が出土した弥生時代後期～古墳時代前期の流路を検出するために設けている。調査では、古墳時代前・後期と平安時代前期の遺構を検出し、平安時代前期を中心に大量の遺物が出土した。本報告では、古墳時代の成果を報告する。



第3-1図 発掘調査地位置図（1/5000）

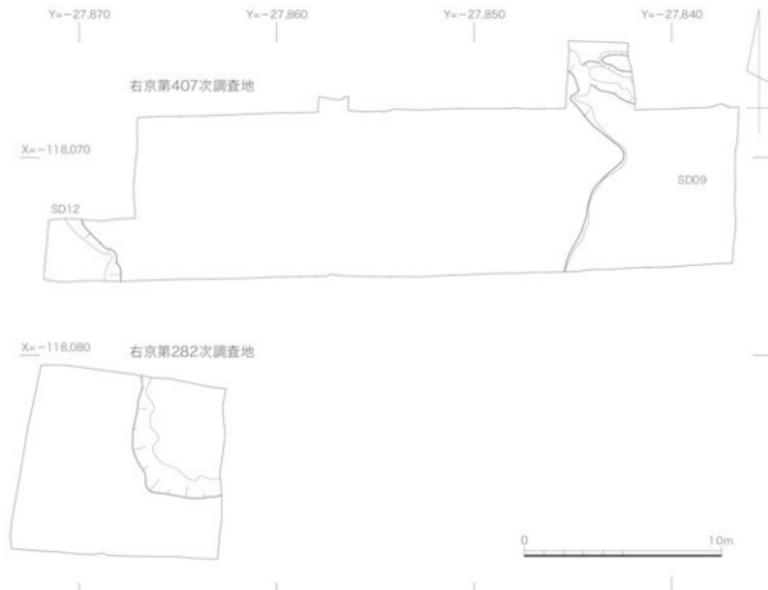


### 検出遺構

古墳時代を中心とした時期の遺構には流路2条がある。西拡張区の流路SD12は、右京第282次調査で検出された流路につながるものである。また、調査区の東側では沼状の堆積である流路SD09を検出している（第3-3図）。

**流路 SD12（第3-2・3図）** 調査着手前に予想されていたように、西拡張区のほぼ全域で右京第282次調査と同一の流路を検出することができた。検出面は長岡京期頃の遺物を含む暗茶褐色砂礫層（第3-2図第10層）を完全に除去した面であり、その高さは現地表である耕作土上面より約0.9m下の標高約27mであった。流路の両岸を検出することはできなかつたが、本調査区内における最深部は深さ0.9m前後を測る。なお、右京第282次調査では深さ1.2mと報告されている。

流路SD12の埋土には粘質土と砂礫土が複数層認められ、流水、滯水を繰り返していたことが分かる。最上層の第26層は薄い茶灰色粘質土層で僅かに古墳時代後期の遺物が含まれていた。第27～31層は灰色～灰褐色を呈する粘質土・砂礫土層であり、この層からは大量の古式土師器が出土している。第32層は青灰色系の砂礫土層で、少量ながらも弥生時代中期～後期の遺物が認められた。ただ、当初期待されていた木製品は含まれておらず、第3-2図中に黒塗りで示



第3-3図 本調査・右京第282次調査 弥生～古墳時代検出遺構図（1/250）

した流木についても加工痕跡を確認することはできなかった。

**流路 SD09**（第3－2・3図） 調査区の東辺では、調査着手時の排水溝掘削などで古墳時代後期、平安時代前期の遺物が出土していた。このため、調査期間の終盤に調査区の北東部を北へ拡張し、調査区東半部に広がる堆積層の性格解明を試みた。その結果、灰褐色および黒褐色粘質土層、茶灰色砂質土層（第3－2図第15～17層）が古墳時代後期の流路ないし沼状の堆積であることを確認した。なお、流路 SD09 の上層にあたる第7～9層には平安時代前期の遺物が含まれていた。平安時代前期の遺構群との関係では、掘立柱建物 SB02 の東辺部が流路 SD09 の埋没による傾斜地に若干の整地を施したのち柱掘形を掘削していること、さらに、平安時代前期の遺物を多く含む第7～9層が、掘立柱建物 SB02 柱掘形や整地層を切って堆積していることが明らかとなつた。

#### 出土遺物

本調査では整理箱にして41箱の遺物が出土した。このうちの20箱弱が平安時代前期のものであり、次いで古墳時代前期のものが多数を占める。ここでは、主に流路 SD12 の出土遺物について概略を述べる。

**流路 SD12 第27～31層出土遺物**（第3－4～6図） 流路 SD12 第27～31層には最も多くの古墳時代遺物が含まれていた。土器形式には壺・甕・高杯・器台・小型丸底壺・小型器台・鉢がある。

壺（第3－4図）には、低い口頭部が大きく外反する広口壺（2）、やや長胴気味と考えられる体部から直線的に口頭部が立ち上がる直口壺（3～9）、体部から外傾する擬口線上を外側へ拡大し更に低い口縁を付加する二重口縁壺（1）がある。壺では3～9の直口壺が多く、口頭部の特徴によって、上半が内湾気味になるもの（3）、端部が僅かに外反するもの（4・8）、内上方へ肥厚し端部が外傾する面を形成するもの（5・7・9）、端部まで直線的で狭い外端面となるもの（6）に分けることができる。4は小型の個体であり、体部に比べ大きな口頭部を備え外面には丁寧なヘラミガキが施されている。

甕（第3－5図）には、丸底で長胴気味の体部から比較的大きく外反する口頭部をもつもの（10）、丸底で球形の体部から内湾気味に立ち上がる口頭部の端部が内側に肥厚するもの（11～24）、外反する口頭部の端部が上方に立ち上がり外端面を形成するもの（25・26）がある。11～22には口縁端部の特徴として、やや上方に肥厚する11～14、比較的大きく肥厚が内傾する15～20、内傾する肥厚とともに外側へも僅かに肥厚する21～24を見ることができる。10と23は完形に近い個体であり、器高20.4cmの10は外面に口縁端部付近までタタキが及ぶ。器高13.4cmの23は外面に密なハケメを施す。

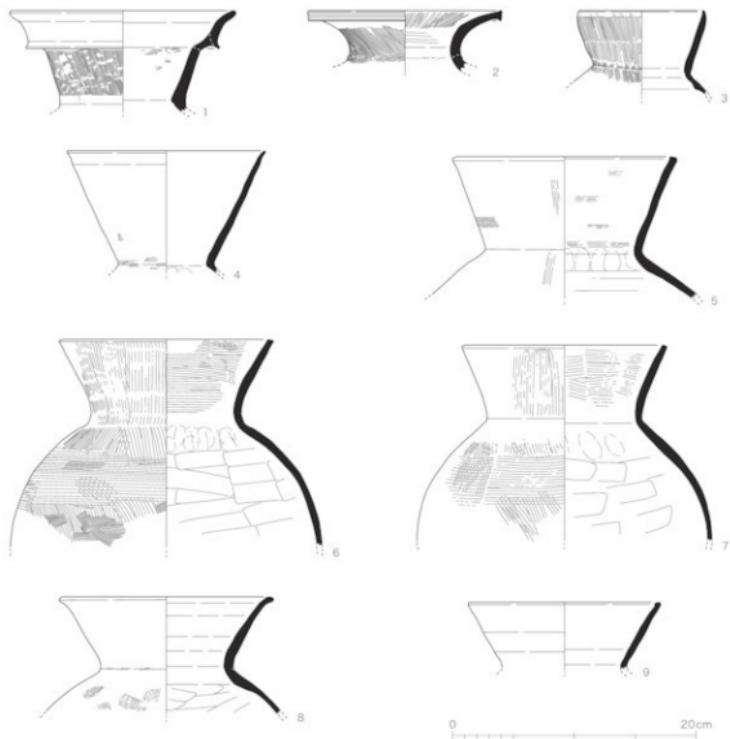
高杯（第3－6図29～36）は、杯底部の稜が不明瞭で、口縁部には外反気味となるもの（29・30）と直線的なもの（31）が認められる。高杯脚部には、脚下方の屈曲が弱い32～34と、大きく屈曲し据端部へ直線的に外傾する35・36がある。32・34では屈曲部の上方に3方向の透孔が穿たれている。

37は鼓形の器台である。大きく外傾する受部および脚部は端部付近で外反し、くびれ部の上下には2条の段が形成されている。完形に復元できる個体であり器高9.4cmを測り、受部径が脚部径を上回る。

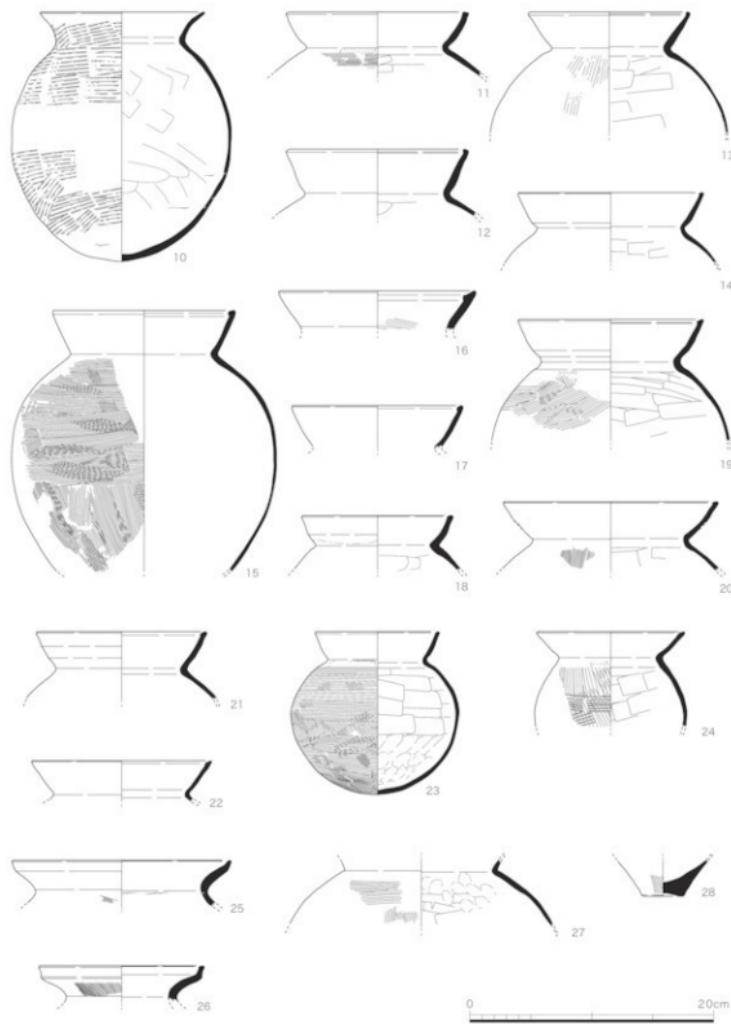
小型丸底壺（第3-6図38～43）には、口頸部と体部の高さがほぼ等しいもの（38～40・43）と比較的大きな体部に短い口頸部をもつもの（41・42）がある。前者については、体部の形状で球形に近い38・39と扁平な40・43に分けることができる。

小型器台（第3-6図44～46）には全形を残す個体はなかった。いずれも中空の脚部で、受部および脚部が直線的に外傾する形態と考えられる。くびれ部は大きく屈曲し、端部は強いナデによって外反気味となる。44・46の脚部中位には透孔が穿たれている。

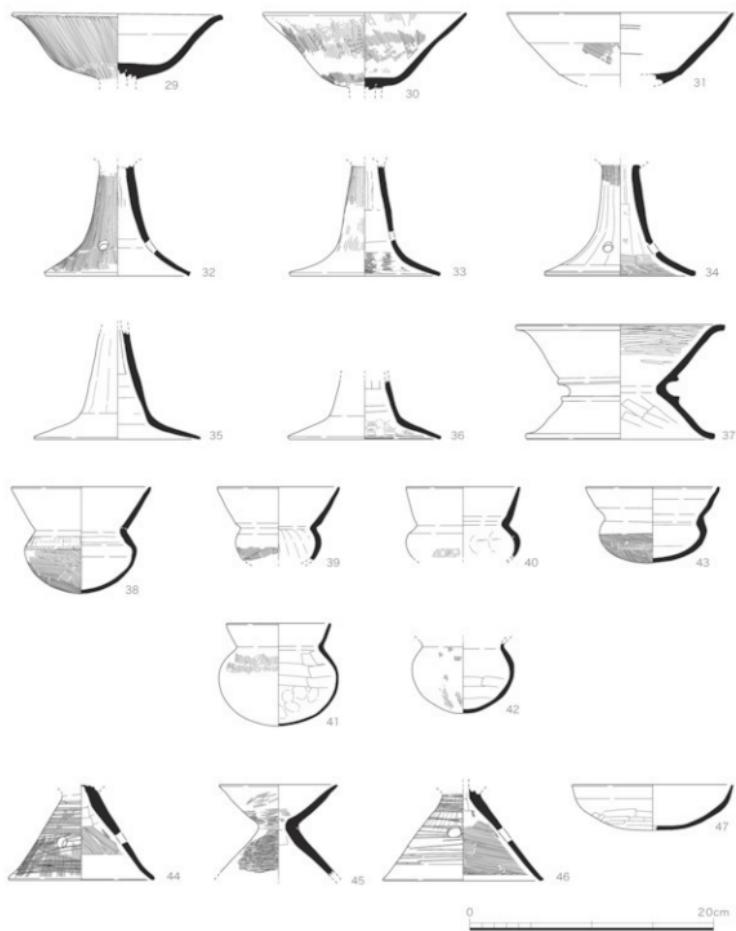
小型鉢（第3-6図47）は器高3.8cm、口径13.2cmを測る。底部から内湾氣味に広がり、器高の中位で大きく屈曲して直線的に端部へ至る。



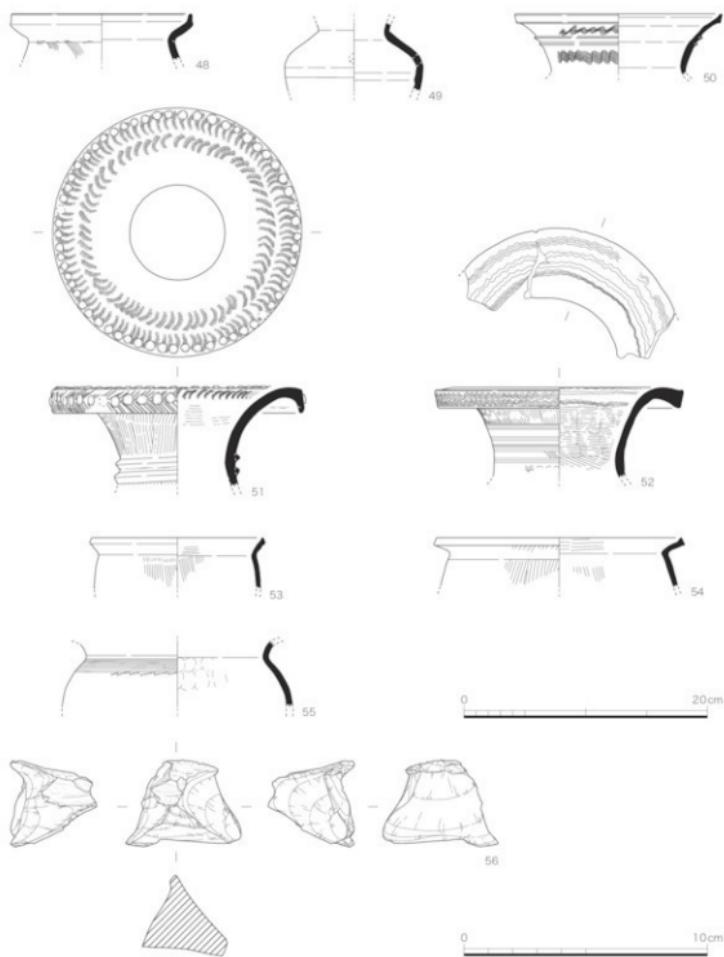
第3-4図 出土遺物実測図-1 (1/4)



第3-5図 出土遺物実測図-2 (1/4)



第3-6図 出土遺物実測図-3 (1/4)



第3-7図 出土遺物実測図-4 (1/2・1/4)

付表3-1 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			残存部位 残存度	調整等	地区 層位
			口径	器高	底径			
直口壺	二重口 縁壺	1	(8.3)	18.6	-	口縁部～頸部1/3	内面：口縁部上半ナデ・頸部ハケのちナデ、外 面：口縁部ナデ・頸部ハケ	4層上
	広口壺	2	(5.1)	16.0	-	口縁部1/4	内面：口縁部ミガキ・頸部ナデ、外面：口縁部 ナデ・頸部ハケ、口縁部外面に沈線	3層
		3	(6.9)	10.2	-	口縁部～肩 部1/3	内面：口頭部ナデ、肩部ケズリ、外面：端部ナ デ・頸部～肩部ハケ	4層
		4	(10.1)	16.3	-	口頭部1/6	内面：口頭部ナデか・肩部ケズリ、外面：ミガ キ	2・4層、南 壁
		5	(11.7)	18.4	-	口縁部～体 部上半4/5	内面：口縁部ハケのちナデ・体部上半ケズリ、 外面：ハケのちナデ、肩部内面に指圧痕	4層上、西 壁
		6	(17.0)	17.6	-	口縁部～体 部上半1/4	内面：口縁部ハケ・頸部ナデ・体部ケズリ、外 面：口頭部ハケのちナデ・体部ハケ、内面の頸 部に指圧痕・煤付着	3層
		7	(16.1)	16.8	-	口縁部～体 部上半1/8	内面：口頭部ハケ・肩部指圧痕・体部ケズリ、 外面：口縁端部ナデ・口頭部ミガキ・体部ハ ケ、内面に煤付着	2層
		8	(9.6)	17.6	-	口縁部～体 部上半3/5	内面：口頭部ナデ・体部上半ケズリ、外面：口 縁部ナデ・体部上半ハケのちナデ	4層上
		9	(5.5)	15.8	-	口縁部1/6	内外面：口縁部ナデ・頸部内面に煤付着	4層
土師器	甕	10	20.4	13.5	-	ほぼ完形	内面：口頭部ナデ・体部ナデ、外面：口縁部上 半ナデ・口縁部下半～体部下半タタキ・底部ナ デ、内面の体部下半に接合痕	2層
		11	(5.3)	15.0	-	口縁部～肩 部1/4	内面：口頭部ナデ・体部ケズリ、外面：口縁部 ナデ・頸部～肩部ハケ	3層
		12	(5.5)	15.0	-	口縁部～肩 部1/10	内面：口頭部ナデ・肩部ケズリ、外面：ナデ	2・4層、南 壁
		13	(9.9)	13.3	-	口縁部～体 部上半3/5	内面：口頭部ナデ・体部上半ケズリ、外面：口 頭部ナデ・体部上半ハケ	1層上
		14	(5.7)	15.2	-	口縁部～体 部上半1/12	内面：口頭部ナデ・体部ケズリ、外面：ナデ、 外面に煤付着	2層
	甕	15	(21.4)	15.0	-	口縁～体部 下位1/5	内面：口頭部ナデ・体部ケズリのちナデ、外 面：口頭部ナデ・体部ハケ	2層
		16	(3.2)	16.2	-	口縁部1/8	内面：口縁部ナデ・頸部ハケ、外面：ナデ	3層
		17	(3.4)	14.0	-	口縁部1/8	内外面：口縁部ナデ	4層
		18	(4.5)	12.4	-	口縁部～肩 部1/4	内面：口頭部ナデ・肩部ケズリ、外面：ナデ、 口縁部外面に煤付着	1層
		19	(10.0)	15.2	-	口縁部～体 部上半1/4	内面：口頭部ナデ・体部上半ケズリ、外面：口 頭部ナデ・体部上半ハケ、外面に煤付着	3層上
		20	(5.7)	17.6	-	口縁部～肩 部1/8	内面：口頭部ナデ・肩部ケズリ、外面：口頭部 ナデ・肩部ハケ、外面に煤付着	4層

種類	器形	番号	法量(cm)			残存部位 残存度	調整等	地区 層位
			口径	器高	底径			
甕		21	(5.5)	14.0	-	口縁部～体部上半1/2	内面：口頭部ナデ・体部上半ケズリ、外面：ナデ	4層上
		22	(3.4)	14.8	-	口縁部～肩部1/8	内面：口頭部ナデ・肩部ケズリ、外面：ナデ、外面に煤付着	4層
		23	13.4	10.2	-	ほぼ完形	内面：口頭部ナデ・体部上半ケズリ・体部下半ナデ、外面：口頭部ナデ・体部ハケ、体部下半の内面に指圧痕・外面に煤付着	3層
		24	(7.9)	12.2	-	口縁部～体部上半1/4	内面：口頭部ナデ・体部ケズリ、外面：口頭部ナデ・体部タキのちハケ、対面に煤付着	3層
		25	(3.8)	18.0	-	口縁部～肩部1/5	内面：ナデ、外面：口縁部ナデ・肩部ハケ、頭部内面に接合痕	4層
		26	(3.0)	13.6	-	口頭部1/8	内面：ナデ、外面：口縁部ナデ・頭部ハケ	壁
		27	(5.6)	-	-	頸部～体部上半1/5	内面：頸部～肩部ナデ・体部ケズリ、外面：頸部～肩部ナデ・体部上半ハケ、体部外面に煤付着、頸部内面に指圧痕	4層
		28	(2.9)	-	3.5	底部1/1	内面：ナデ、外面：体部ハケ・底部ナデ	4層
士師器		29	(5.3)	17.4	-	杯部1/1	内面：ナデ、外面：端部ナデ・ナデのちミガキ	4層上
		30	(6.3)	16.7	-	杯部ほぼ完形	内外面：ハケのちナデ、口縁端部ナデ、外面に煤付着	2層
		31	(5.9)	18.6	-	杯部1/15	内面：ミガキか、外面：上半ナデ・下半ハケのちナデ	3層
		32	(9.2)	-	12.0	脚部9/10	内面：下半ナデ、外面：ハケ・端部ナデ、3方向に透孔	3層上
		33	(9.1)	-	12.4	脚部2/3	内面：上半ケズリ・下半ハケ・端部ナデ、外面：上半ミガキ・下半ナデか・端部ナデ、1方向に透孔	3層
		34	(9.1)	-	12.4	脚部1/3	内面：上半ハケのちナデ・下半ハケ、外面：上半ハケか・下半ナデ、3方向に透孔	4層
		35	(9.0)	-	13.7	脚部9/10	内面：中位ケズリ・下位～端部ナデ、外面：ナデ	4層上
		36	(4.9)	-	12.6	脚部1/4	内面：ナデ、外面：ナデ、内面の下半に指圧痕	4層上
鼓形器台		37	9.4	15.2	15.6	全形4/5	内面：受部上半ミガキ・屈曲部ナデ・脚部ケズリ・裾部ナデ、外面：ナデ	2層
		38	8.8	11.4	-	全形3/5	内面：口頭部ケズリか・体部ナデ、外面：口頭部ナデ・体部ハケ	3層
		39	(6.0)	10.0	-	口縁部～体部上半1/3	内面：ナデ、外面：口縁部～体部上半ナデ・体部下半ハケ	3層
		40	(5.8)	9.4	-	口縁部～体部上半1/5	内面：ナデ、外面：口頭部ナデ・体部上半ハケ、体部内面に接合痕と指圧痕	1層

種類	器形	番号	法量(cm)			残存部位 残存度	調整等	地区層位
			口径	器高	底径			
土師器	小型丸底壺	41	8.4	8.6	-	全形3/5	内面：口頭部ナデ・体部上半ケズリ・体部下半指圧痕、外面：口頭部ナデ・体部上半ハケのちナデ・体部下半ナデ、外面に煤付着	2層
		42	(5.9)	-	-	体部1/2	内面：頭部～体部上半ナデ・体部下半ケズリ、外面：体部ハケ	4層上
		43	(6.3)	11.0	-	全形3/4	内面：口頭部ナデ・体部ケズリ、外面：口縁部～体部上半ナデ・体部下半ハケ、外面に煤付着	4層
	小型器台	44	(7.8)	-	12.0	脚部4/5	内面：上位ケズリ・中位ハケ・下位～端部ハケのちナデ、外面：ミガキ、2方向に透孔	3層
		45	(7.6)	9.7	-	受部～脚部上半3/5	内面：脚部ケズリ・ナデ、外面：ミガキ	1～2層
		46	(7.6)	-	13.2	脚部3/5	内面：ハケ・端部ハケのちナデ、外面：上半ケズリのちミガキ・下半ミガキ・端部ナデ、3方向に透孔	3層
	鉢	47	3.8	13.2	-	全形2/5	内面：ナデ、外面：口縁部～体部上半ナデ・体部下半ケズリ	3層
	甕	48	(3.8)	14.9	-	口縁部～肩部1/6	内面：ナデ、外面：口頭部ナデ・肩部ハケ	1層
須恵器	龜	49	(5.0)	17.0	-	頭部～体部上半1/4	内外面：ナデ、外面：体部下位ケズリ、体部最大径に透孔	1層
	壺	50	(5.7)	-	-	口頭部1/8	内外面：ロクロナデ、外面：2条の突帯と上下に波状文	1層
弥生土器	壺	51	(8.2)	24.0	-	口頭部1/1	内面：ハケのちナデ、外面：頭部ハケ。口縁部の内面に円形浮文と柳描列点文・口縁部の外面上にヘラ描き練杉文と円形浮文、頭部外面に2条の突帯	シルト層
		52	(7.4)	22.2	-	口頭部1/3	内面：ハケ、外面：ハケ、口縁部の内面に波状文・口縁部外端面に波状文、頭部の外面に直線文と波状文	シルト層
	甕	53	(4.2)	14.0	-	口縁部～体部上位1/12	内面：ハケ、外面：端部ナデ・頭部～体部上半ハケ、外面に煤付着	シルト層
		54	(4.0)	20.2	-	口縁部～体部上位1/12	内面：ハケ、外面：端部ナデ・頭部～体部上半ハケ	シルト層
		55	(5.5)	-	-	頭部～体部上半1/9	内面：ナデ、外面：ナデか、肩部外面に直線文と列点文、肩部内面に指圧痕	シルト層
石製品	剝片	56	3.6	4.8	3.3	-	重さ37.0g、サヌカイト	シルト層

**流路 SD12 その他出土遺物（第3－7図）** 流路 SD12 では、前述した古墳時代前期以外に古墳時代後期、弥生時代中期・後期の遺物が出土している。

土師器甕（48）、須恵器龜（49）・甕（50）はいずれも古墳時代後期のものであり、流路堆積の最上層である第26層（第3－2図）に含まれていた。

弥生土器の壺（51・52）・甕（53～55）、石器剝片（56）は、流路堆積の下層であるシルト層から出土したものである。51・52の壺は中期後半に属するものと考えられ、いずれも大きくな

外反する口縁部の内面にはハケ状工具による施文が施されている。53～55の甕は中期末～後期のものと考えられる。

### 小 結

今回報告した流路SD12は、その検出位置や堆積状況から右京第282次調査で検出されていた流路に接続することが明らかである。いずれの調査でも流路の全容を明らかにできていないが、幅5m程度の小規模な流れで、流水、滞水を繰り返していたことが分かる。また、流路は北西から南東方向へ蛇行しているものと考えられるが、より下流にあたる南東域では調査が行われておらず明らかでない。

本調査でも流路の堆積層から大量の遺物が出土した。土器表面は摩耗が少なく、完形に近い個体も散見される。また、高杯、小型丸底壺が目立つことも注目されるところである。この場所が集落居住域の近辺で、祭祀的な行為が行われていた可能性を示すものと考えられる。流路SD12の出土遺物は多く、その全てを図示することは困難であった。最上層に古墳時代後期、最下層に弥生時代中期の遺物を含むが、主体的な時期は甕および小型丸底壺・小型器台などの特徴から庄内式期末から布留式期にかけてのものと位置付けることができる。

(中島 勝夫)

注)木村泰彦「右京第282次調査略報」『長岡市センター年報』昭和62年度 1989年



第3~8図 調査区断ち割り状況（西から）



第3-9図 調査地全景（北東から）



第3-10図 西拡張区流路 SD12（北から）



第3-11図 西拡張区流路 SD12 堆積状況（東から）



第3-12図 流路 SD09（北西から）



第3-13図 流路 SD09 堆積状況（北から）



第3~14図 出土遺物

## 4. 長岡京跡右京第217次調査 ～長岡京期、甕据え付け建物出土資料～

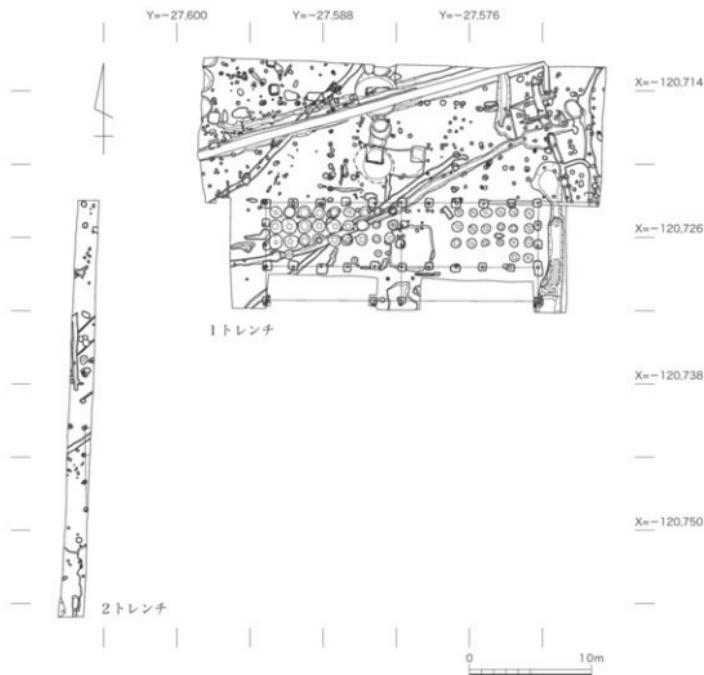
調査地	長岡京市調子一丁目 25-1 他	地区名	7ANROZ-1 地区
調査期間	1986(昭和 61) 年 1 月 15 日 ~ 3 月 20 日	調査面積	633m <sup>2</sup>
時期	長岡京期	出土遺物	12 箱
立地	低位段丘 標高 22 m		
参考文献		「右京第 217 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 60 年度 1987 年	

## 調査の概要

本調査は学校建設工事に伴って実施した。調査地はJR長岡京駅の南西約1km、西山山地から北西～南東に向かって緩やかに広がる低位段丘上に位置していて、すぐ東にはJR東海道線が南北に走っている。調査地は以前広大な敷地を持つ工場であったが、その後短期大学校が跡地に移転することとなった。移転に際しては残された工場の建物のほとんどを再利用する形となり、新たに建設される建物部分を対象に発掘調査を行うこととなった。調査対象となったのは本館棟と回廊新築部分で、それぞれ1トレンチ、2トレンチとした。調査の結果、近現代の井戸、野壠、江戸時代の井戸、土坑、掘立柱建物、柵列、平安時代の溝、長岡京期の掘立柱建物、柵列、溝、土坑等が検出された。このうち1トレンチで検出された掘立柱建物は内部に須恵器大甕の据え付け痕を持つ珍しいもので、1986(昭和61)年3月16日に現地説明会を行っている。



第4-1図 発掘調査地位置図(1/5000)

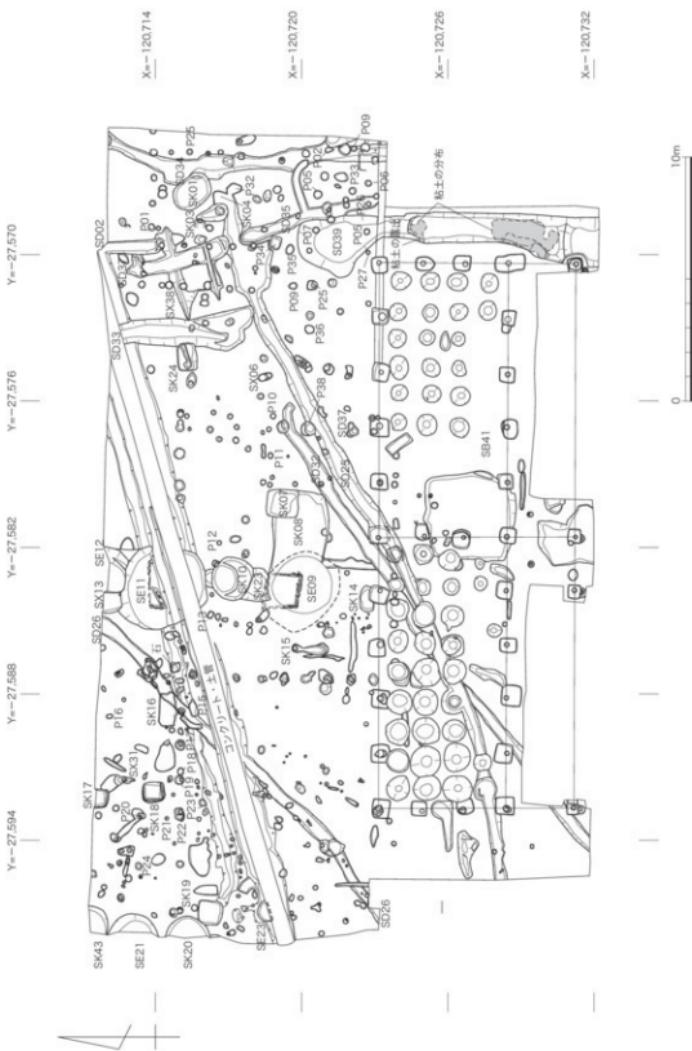


第4-2図 調査区検出遺構図 (1/400)

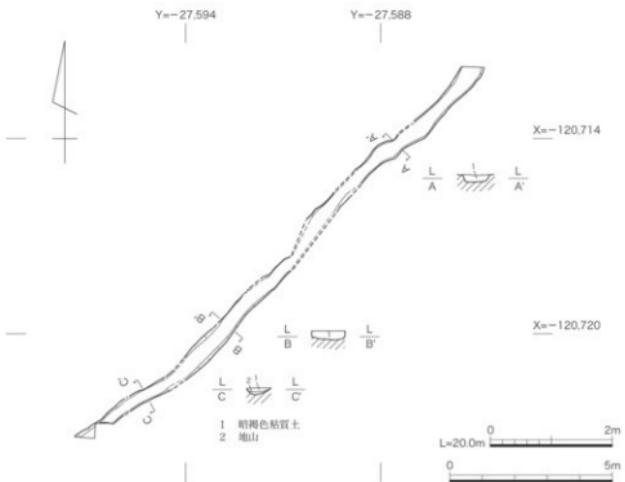
#### 検出遺構

**1 レンチ** 敷地内の北部、本館棟建設予定地部分に南北 12 m、東西 35 mで設定した。その後レンチ南辺部で掘立柱建物 SB41 が検出されたため、東西 27.5 m、南北 6 mの拡張を行い、さらに廂などの確認のため部分的に南に 3 m の拡張を行った。その結果、最終的な調査面積は約 570m<sup>2</sup>となった。調査では、近現代の井戸、野臺、江戸時代の井戸、土坑、掘立柱建物、柵列、長岡京期の掘立柱建物、溝等が検出された。ここでは長岡京期の遺構について述べる。

**掘立柱建物 SB41** (第4-3図) 調査地南辺で検出された東西棟の掘立柱建物で、東西 10間、南北 3間、南に 1間の廂を持つ長大な建物である。中央には間仕切りがあり、東西 2室に分けられている。身舎の柱掘形は一辺 0.6 ~ 0.9 m の隅円方形で、深さは 0.3 ~ 0.6 m である。このうち南東の柱掘形 P77 は、南北 1.2 m と長くなっている。平面形状から柱掘形の位置が変更されたものとみられる。この柱掘形内からは土師器の皿 A (第4-8図8) が出土しているが、他の掘形内の遺物は非常に少ない。南側の廂は作り替えが認められ、当初は直径 0.25 ~ 0.4 m、深さ 0.3 m 前後の円形掘形で、その後一辺約 0.5 m、深さ約 0.3 m の隅円方形掘形のものとなっ



第4-3図 1トレンチ検出遺構図 (1/200)

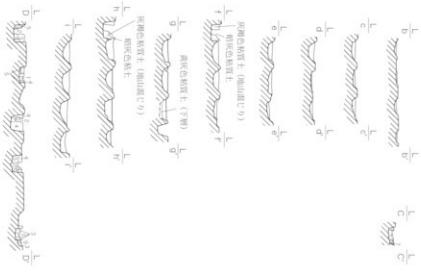


第4-4図 1トレンチ溝SD26実測図(1/150・1/80)

ている。その際に後述する建物東側の溝SD39は埋め立てられている。身舎の柱間は東西が2.25m、南北は1.8mで、掘形内部には直径約0.2mの柱痕が残されている。このうち北西側のP50～52、南西のP64・67の5箇所では柱の抜き取り痕が確認された。身舎と南廂との柱間は最初のものが3m、その後2.7mとなっていて、柱の直径はいずれも0.15mである。このうち作り替え前の廂P93柱穴からは土師器の甕片(第4-8図9)が出土している。

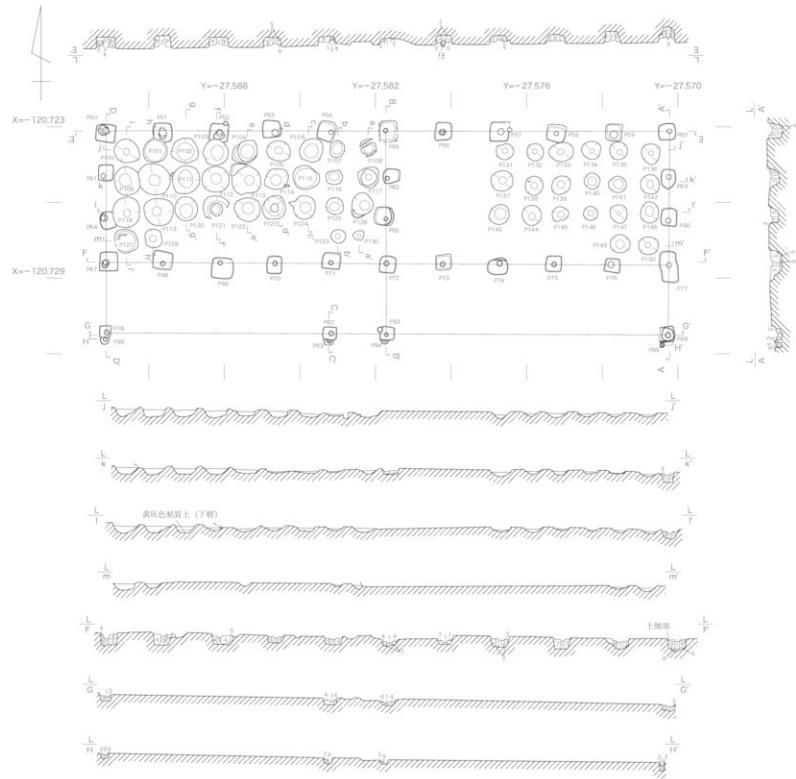
この建物の最大の特徴は内部に須恵器の大甕を据え付けたとみられる円形の穴が整然と並んでいる点である。建物は東西2室に分けられていて、西側の部屋はほぼ全面に31個、東側の部屋では東寄りに20個の穴が穿たれていた。穴の直径は西側では0.4～1.3mとばらつきがあり、東側は直径0.5～1.0mである。深さは0.15～0.3mで、穴の断面は半球形に近い丸底ないし台形で、埋土は基本的に暗褐色粘質土(黄灰色の地山をブロック状に含む)の1層のみであった。穴の間隔は中心間で約1.2mあり、西側の部屋では南北4個、東西9個で、南廂の中央5箇分には穴が認められない。おそらくこの部分は作業スペースおよび出入り口が存在したものとみられる。東側の穴の配列は基本的に西側と同じであるが、こちらは西端の東西3列分(11個)の穴が認められない。西側の穴には柱掘形を切っているものと認められ(P101-P51、P103-P52、P118-P64)、穴が建物完成後ないし柱据え付け後に掘られたものであることを示している。

この穴に関しては調査当時須恵器の大甕を据え付けた痕と推定したが、その頃はまだ類例が少なく、また大甕の破片が出土していないこともあり、須恵器大甕の据え付け痕とすることには疑問を呈する向きもあった。しかしその後各地での類例も増加し、現在ではこれを否定する意見は見られない。なお長岡京では現在でもこの掘立柱建物SB41が最大規模のものである。

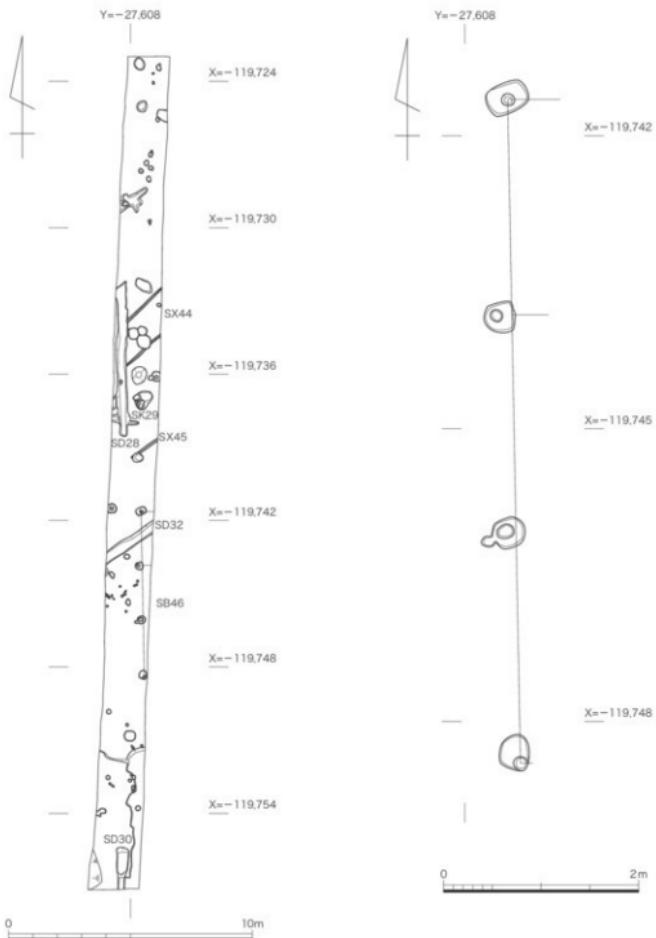


- 1 暗茶灰色粘質土
  - 2 暗灰褐色粘質土
  - 3 鮎河内粘質山(黄灰色粘質土)混じり
  - 4 灰褐色粘質土山腹混じり
  - 5 鮎河内粘質土
  - 6 暗灰褐色粘質土
  - 7 暗灰褐色粘質混じり
  - 8 黄褐色粘質土
  - 9 黄褐色粘質土  
9.1 鮎河内粘質土(暗茶褐色粘質土)(深部地盤の層をローラー押す(?)かわ)

$L=20.7\text{m}$  0 10m



第4-5図 1トレンチ掘立柱建物 SB41 実測図 (1/150)



第4-6図 2トレンチ検出遺構図(1/200)

第4-7図 2トレンチ 挖立柱建物SB46平面図(1/50)

**溝 SD39** (第4-3図) 挖立柱建物 SB41 の東側で検出された南北方向の溝である。溝は建物北東部で最大幅 2.6 m と広くなっているが、建物東側では幅を減じて幅 0.9 ~ 1.5 m となり、建物南東部で再び西側に広がって幅 2 m となり南に延びている。溝はちょうど身舎部分を避けるように作られており、廻の部分のみ切り合いが認められる。位置的にみて挖立柱建物 SB41 の東を区画する溝とみられるが、上述のごとく新しい廻に作り替えられた段階で溝は埋め立てられていた。溝は 3 段階に南に向かって深くなっており、北東部で 0.3 ~ 0.4 m、建物東側で 0.5 m、

南東部で0.6mとなっている。また溝内では黄灰色粘土が集中してみられる個所が存在した。調査地内ではもっと多くの遺物が出土している（第4-8図）。

**溝SD26**（第4-4図）トレンチ北西部で検出された北東から南西方向に延びる溝で、後世の搅乱が激しいが幅0.4～0.7m、深さは0.15mである。斜め方向であるが溝内からは長岡京期の遺物がまとまって出土していることから、長岡京期のものとしている。上述の掘立柱建物SB41と溝SD39のように長岡京期の遺構にも前後関係が認められることから、あるいは長岡京の造営段階における遺構の可能性も考えられる。したがって掘立柱建物SB41に切られる同方向の溝SD25・32なども同様の可能性もあるが、遺物の出土が無く不明である。

**2トレンチ** 1トレンチの南西部、回廊新築部分に南北34.5m、東西2mで設定した。江戸時代のピットや土坑、長岡京期の掘立柱建物、平安時代の溝、長岡京期の可能性がある溝や轍などが検出されている。

**掘立柱建物SB46**（第4-7図）トレンチの南半部で検出された南北方向の掘立柱建物とみられる柱列である。トレンチが狭いため広がりは確認できないが、4基の掘形が確認できた。掘形は0.3～0.4mの隅円方形で、直径0.15mの柱痕を持つ。柱間は北から2.2m、2.2m、2.4mである。北で西にわずかに振れる。他に少数の柱掘形が確認できたが、広がりは不明である。

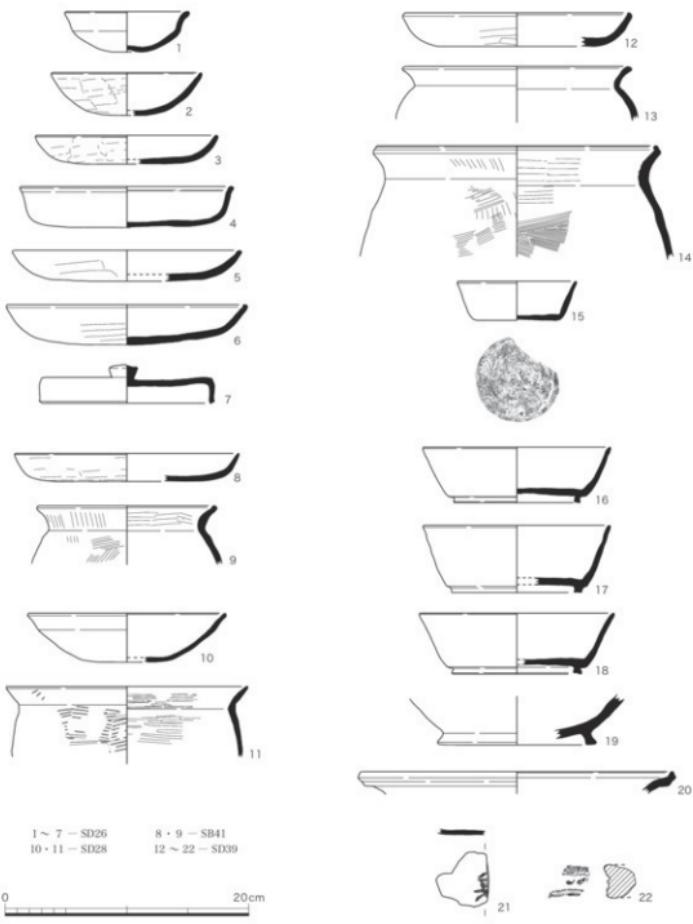
この他に北東から南西方向の溝SD32や轍とみられる細い溝SX44・45などがあり、1トレンチでみられたように長岡京造営段階の遺構の可能性がある。またトレンチ北半部では平安時代の遺物を含む南北方向の溝SD28も検出されている。

#### 出土遺物（第4-8図）

今回の調査で出土した遺物は、大半が江戸時代のもので占められ、他は包含層出土のものが多い。長岡京期の遺物は溝を中心に出土しているが小片が多く、図示できたものは多くはない。この他に溝SD28からは平安時代の遺物も少量出土している。また図示していないが包含層内よりサヌカイト製の石鐵も出土している。

**溝SD26出土遺物** 溝内からは土師器の食器類を中心に遺物が出土している。土師器は壺C(1)、椀A(2)、皿A(3～6)があり、この他に甕が少量認められる。土師器の食器類は外側ヘラケズリを行うc手法のものが大半であるが、4は底部不調整で、直立気味の口縁部と外反する端部を持つ。また2は内面全体に黒漆が付着している。須恵器は非常に少なく、図化できたものは壺蓋(7)のみで、他に杯B蓋の小片が少量出土したのみである。

**溝SD39出土遺物** 長岡京期の遺構ではもっと多くの遺物が出土している。土師器の食器類は小片が多く、図示できたのは皿A(12)のみである。外面をヘラケズリするc手法である。甕は球形の体部と外反する口縁部からなり、口径18.8cmのもの(13)と口径23.6cmのもの(14)がある。これらの他に羽釜の破片も出土している。須恵器は杯A(15)、杯B(16～18)、壺L(19)、甕(20)のほか、甕の体部片、杯B蓋の小片が出土しているが図示できるものはなかった。15は底部全体に木目圧痕が残る。21は杯Aの底部片で、外面に墨書き認められるか判読できなかつた。22は軒丸瓦の小片であるが型式は不明である。他に平・丸瓦の小片が出土している。



第4-8図 出土遺物実測図 (1/4)

また少量ながら製塙土器の破片も出土している。

**掘立柱建物 SB41 出土遺物** 柱掘形内および甕据え付け穴内の遺物は非常に少量・小片である。8は身舎南西の柱掘形(P77)内から出土した土師器皿Aで、摩滅が激しいがc手法が確認できる。9は作り替え前の廐P93柱穴から出土した土師器甕口縁部片である。口径14.8cmの小型のもの。この他に作り替え後の廐P78からは平瓦片が出土している。甕据え付け穴はいずれも小片で図示できるものはなかった。P101・126・127・144から土師器食器類の小片、

P109・138からは土師器片と須恵器甕小片、P146からは製塙土器小片が出土している。

**溝SD28出土遺物** 2トレンチで図示できたのは、この溝SD28出土の遺物のみである。土師器杯A(10)は口径16.3cm、器高4cmで、口縁部をヨコナデするe手法である。黒色土器の甕(11)は口径19.8cmで、内外面をヘラミガキしており、外面にはタタキ跡が残る。内外面黒色化するB類である。平安京土器編年II期中段階頃のものとみられる。これらの遺物に関しては、延暦16(797)年に長岡京の南に移転し、その後、貞觀3年(861)～延喜8年(908)に大山崎の河陽宮に移転した第3次山城国府関連の遺物の可能性が考えられる。

## 小 結

今回の調査における顕著な成果として長岡京期の甕据え付け穴を持つ建物の検出があげられる。当調査地は長岡京の条坊復原で右京八条二坊七町にあたり、京内ではかなり南側に位置している。この建物が検出された当時は、長岡宮出土木簡に記された『八條四甕納米三斛九斗』から、32個以上並んだ大甕の中身を米と解釈して倉のような施設を推定した。さらに右京八条二坊という位置から、「西市」周辺の「調邸」の可能性を考えた。しかしその後類例が増加するとともにこれらは酒などの醸造施設とみられることが判明した。<sup>(1)</sup>さらにこの調査から25年後の2011(平成26年)年2月から調査地の東側で、学校移転に伴う大規模な調査(右京第1019次)<sup>(2)</sup>が行われ、同様に甕据え付け穴を持つ建物がもう1棟検出された。この建物は南北2間、東西5間、内部に22個の甕据え付け穴を持つもので、規模は半分以下である。さらにこの建物の西側にある区画溝からはほぼ完形に復元できる須恵器大甕が出土し、同時に「米」と記された墨書き土器が2点出土し、右京八条二坊七町において酒造りを行っていた可能性はさらに高くなった。先にも述べたように右京第217次調査で検出された掘立柱建物SB41は長岡京で類例が増加した現在でも最大規模を持つ建物であり、右京第1019次調査で検出された建物の円形穴を合わせると73個となり、右京八条二坊七町は長岡京内ではもっと多くの大甕が存在した町となる。さらに南側の右京八条二坊六町では、長岡京では最大規模を持つ深さ5mの井戸が見つかっており、推定位では八条条間小路両側溝が検出されていないことから2町域ないしはそれ以上の広さを持つ施設の可能性もある。それではなぜこのような施設が右京八条二坊という都の南辺に作られたのか。その理由のひとつとしては醸造に適した水が得られる場所であるということが考えられる。ただしこれについては別の視点での検討が必要となる。また別の視点から見れば、当地のすぐ南には三川の合流地点があり、さらに推定山陽道にも近いという水運・陸運の利便性も指摘できよう。当地周辺に推定される第3次山城国府移転の理由のひとつに交通の要衝である点が指摘されているが<sup>(3)</sup>、あるいはこれらと軸を一にする内容かもしれない。向後に期したいと思う。

(木村 泰彦)

注1) 木村泰彦「甕据え付け穴を持つ建物について」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集 1999年

2) 木村泰彦・山本輝雄・小田樹 淳・原 秀樹『長岡京跡右京第1019次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第56集 2013年

3) 中川和哉「第3次山城国府に関する新提言」『長岡京古文化論叢II』 1992年

付表4-1 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	壺C	1	10.2	3.3	-	7.5YR7/6 橙	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ 外面：不調整（e 手法）	SD26 A区	
	榠A	2	12.4	3.5	-	7.5YR6/6 橙	内面：摩滅のため調整不明 外面：ヘラケズリ（c 手法）	SD26 A区	内面に黒漆付着
	皿A	3	15.0	2.35	-	7.5YR6/6 橙	内面：摩滅のため調整不明	SD26 A区	
		4	17.6	3.35	-	2.5YR6/6 橙	内外面：ヨコナデ 外面：底部不調整	SD26 A区	底部に黒斑あり
	5	18.8	2.5	-	-	7.5YR6/6 橙	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ 外面：ヘラケズリ（c 手法）	SD26 A区	
	6	19.8	3.3	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ 外面：ヘラケズリ（c 手法）	SD26 A区	
須恵器	壺蓋	7	14.4	3.15	-	N6/6 灰	内外面：ロクロナデ 天井部：ツマミ貼り付け時のナデ	SD26 A区	外面自然釉剥離痕
土師器	皿A	8	18.4	2.3	-	7.5YR6/6 橙	内外面：ヨコナデ 外面：ヘラケズリ（c 手法）	SB41 P-77 掘形南西	
	甕	9	14.8	(4.8)	-	5YR6/4 にぶい橙	内面：口縁部ヨコハケ、ナデ 外面：口縁部タチハケ、ナナメ方向ハケ	SB41 P-93 柱穴	
土師器	杯A	10	16.3	4.0	-	5YR6/6 橙	内面：摩滅のため調整不明 外面：ヨコナデ、ユビオサエ（e 手法）	SD28	
	甕	11	19.8	(5.9)	-	2.5Y2/1 黒	内面：横方向ヘラミガキ 外面：タキ後横方向ヘラミガキ	SD28	B類
	皿A	12	18.8	2.8	-	7.5Y6/6 橙	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ 外面：ヘラケズリ（c 手法）	SD39 G区	
土師器	甕	13	18.8	(4.4)	-	7.5YR6/6 橙	内外面：摩滅のため調整不明	SD39 G区	
		14	23.6	(9.3)	-	10YR6/4 にぶい黄橙	内面：口縁部ヨコハケ、ナナメ方向ハケ後ナデ 外面：口縁部タチハケ、ナナメ方向ハケ	SD39 E区	外面口縁に煤付着
須恵器	杯A	15	9.8	3.2	-	5Y6/1 灰	内外面：ロクロナデ 外面：底部ヘラ切り	SD39 C区	底部外面に木目狂痕
	杯B	16	15.4	4.55	10.4	7.5Y6/1 灰	内外面：ロクロナデ 外面：底部ヘラ切り、高台貼り付け時のナデ	SD39 G区	
		17	15.4	5.5	10.6	5Y6/1 灰	内外面：ロクロナデ 外面：底部ヘラ切り、高台貼り付け時のナデ	SD39 G区	
		18	16.0	5.0	10.6	7.5Y6/1 灰	内外面：ロクロナデ 外面：底部ヘラ切り、高台貼り付け時のナデ	SD39 F区	
	壺L	19	-	(4.15)	13.0	2.5Y5/1 黄灰	内外面：ロクロナデ 外面：高台貼り付け時のナデ	SD39 アゼ	
	甕	20	26.0	(1.85)	-	胎土：2.5Y6/1 黄灰	内外面：ロクロナデ	SD39 G区	外面自然釉
	杯A	21	幅4.3	長4.5	厚0.4	5Y7/1 灰白	内面：ロクロナデ 外面：ヘラ切り	SD39	底部墨書
瓦	軒丸瓦	22	幅(4.0)	長(2.6)	-	瓦当：2.5Y5/2 暗灰黄	凹凸面：欠損	SD39 G区	



第4-9図 調査地全景（東から）



第4-10図 調査地全景（北から）



第4-11図 1トレンチ掘立柱建物 SB41（北東から）



第4-12図 掘立柱建物 SB41 東半部（北から）



第4-13図 挖立柱物 SB41（西から）



第4-14図 2トレンチ全景（北から）



1



7



4



15



6



16

第4-15図 出土遺物

## 5. 長岡京跡左京第125次調査 ～長岡京期、条坊側溝等出土資料～

調査地	長岡市馬場北石ヶ町1-1	地区名	7ANLKC-1地区
調査期間	1985(昭和60)年5月13日～8月7日	調査面積	546m <sup>2</sup>
時期	長岡京期	出土遺物	20箱
立地	小畠川のつくった扇状地 標高16.3m		
参考文献	「左京第125次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年		

### 調査の概要

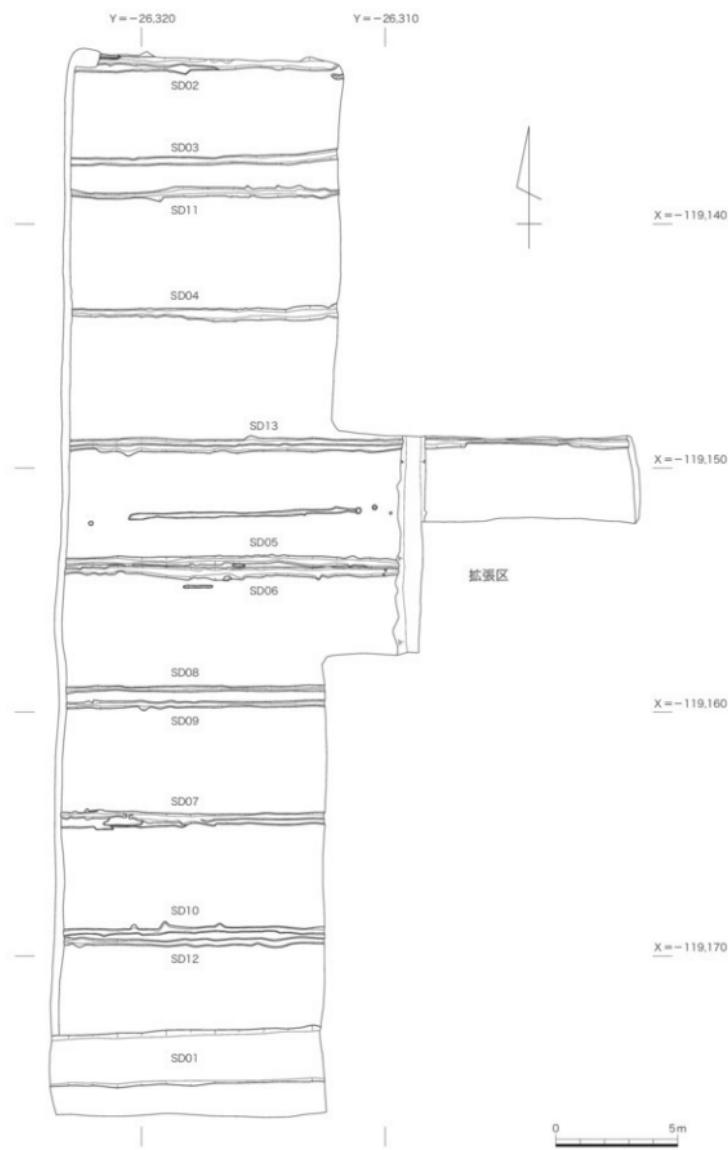
工場内の施設改築工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は、JR京都線長岡駅より北東約1kmに位置する電機工場の敷地内で、工場の南側には府道伏見柳谷高槻線（愛称・三菱通り）が東西に走っており、また調査地のすぐ北側を東流する水路は向日市との市境になっている。

長岡京の条坊復原によると、左京六条二坊三町の北西隅に相当し、ちょうど東一坊大路と五条条間小路の交差点が想定されていた。当地はまた、縄文時代から中世に至る複合遺跡である馬場遺跡の範囲にも含まれる所であって、そうした重複する遺跡に関わる遺構・遺物の検出が充分に予測された。

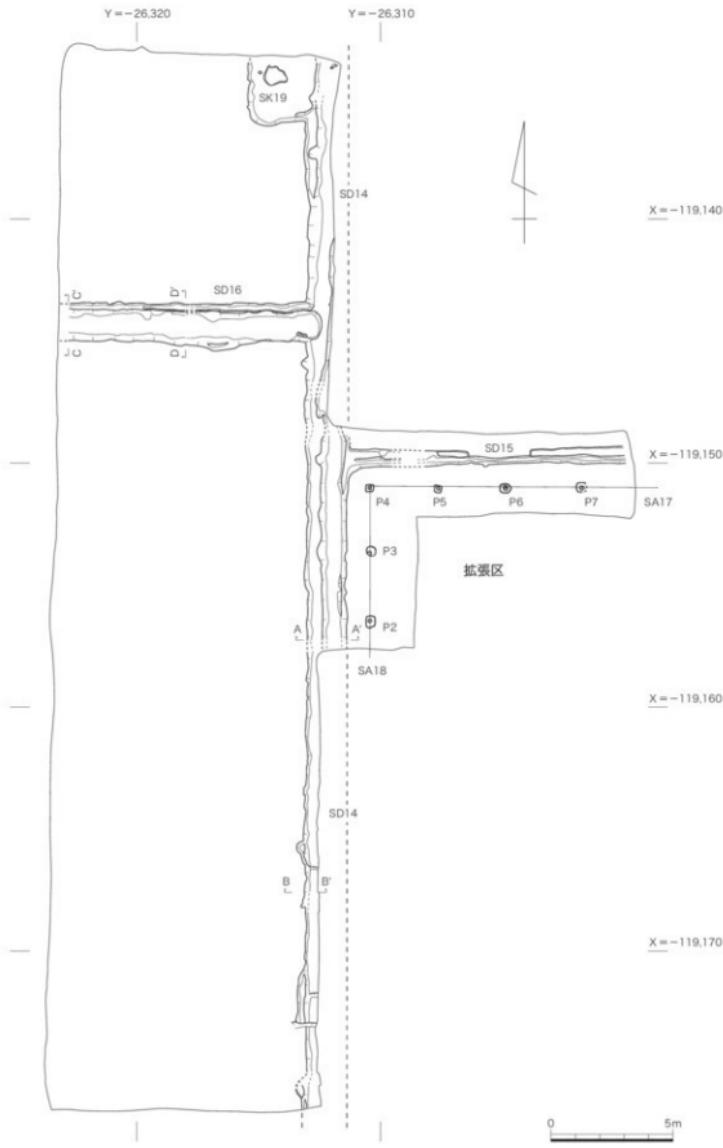
発掘調査にあたっては、東西11m、南北43mの南北に長い調査区と、その中央から東側に



第5-1図 発掘調査地位置図(1/5000)



第5-2図 調査区検出遺構図（中世以降）(1/200)



第5-3図 調査区検出遺構図（長岡京期）(1/200)



第5-4図 調査区検出遺構図（弥生～古墳時代）（1/200）

12.5 mほど突出する拡張区を付加して設定し、5月13日から重機で盛土、耕作土などを掘り下げるところから始めた。調査は、調査対象地が操業中の工場建屋内という制約もあって、昼なお薄暗い環境の元での遺構検出作業は多くの困難を伴い、調査の進行に際して大きな妨げになったことは否めない。調査の結果、耕作土と床土直下の灰白色粘質土層の上面において近世、その下の茶灰色粘質土層上面では中世と長岡京期の遺構を重複する状態で確認することができた。さらに、その約0.2mほど下層において古墳～弥生時代の遺構も少数確認することができ、大きな成果を得ることができた。そして、遺構の全景写真と実測作業を行い、8月7日に現地での調査を終了した。

なお、調査区心の国土座標値は、X = -119,155、Y = -26,313である。

#### 検出遺構

##### (1) 中世以降の遺構

中世以降の遺構には、東西方向の溝および東西方向の小溝群がある。

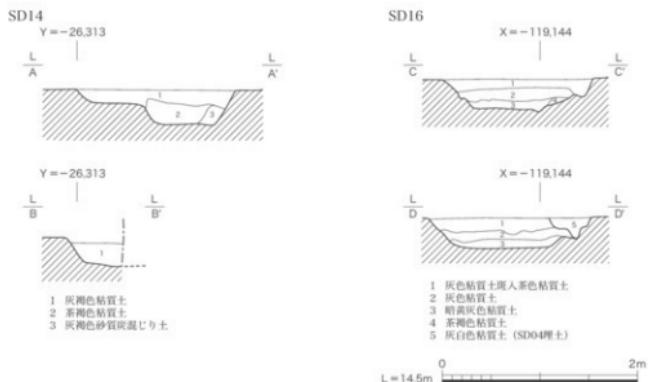
**溝 SD01** 調査区の南端付近で検出した東西方向に延びる素掘りの溝で、東西とも調査区域外に続いている。溝の幅は2.2m、深さ0.3m程度の規模があり、断面は逆台形を呈していた。溝の埋土は、暗灰褐色砂質土層と暗灰色粘質土層の上下2層であって、土師器や陶器など近世の遺物が少量出土している。

**小溝 SD02～13** 調査区の全域で検出した東西方向に延びる素掘りの溝群で、東西とも調査区域外に延びている。各溝は、幅がおおむね0.3～0.5m、深さは0.2m前後の規模があり、埋土はいずれも灰白色粘質土1層のみであった。溝内からは、土師器、須恵器、瓦器などの小片が少量出土しており、中世の所産であると考えられた。これらの溝群は、1条ないし2条一対となり、おおむね5～5.5mほどの間隔で規則的に掘り窪められていたことから、水田耕作などにともなう遺構の可能性が濃厚と考えられる。

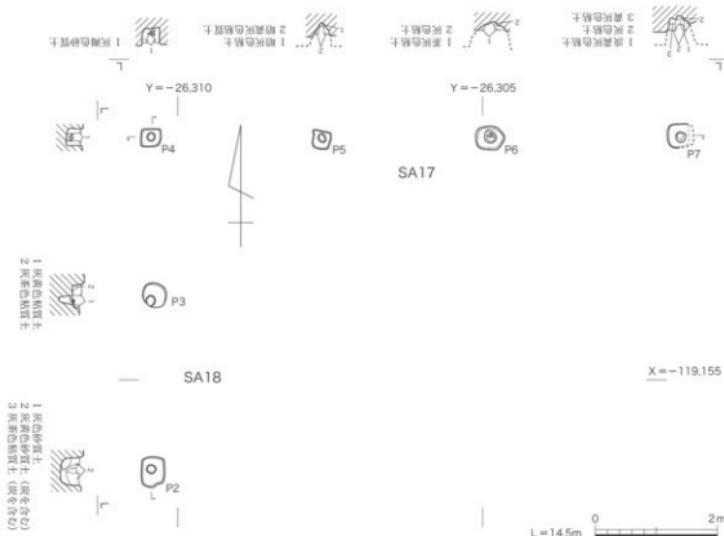
##### (2) 長岡京期の遺構

この時代の遺構としては、長岡京の条坊路である東一坊大路東側溝および五条条間小路南側溝の他、左京六条二坊三町の敷地境を区画する掘立柱の柵列を2条、それに東一坊大路の路面上に施された溝1条と土坑1基などを確認している。

**東一坊大路東側溝 SD14** 調査区の東辺部に沿って検出した南北方向に延びる素掘りの溝である。溝は、総長約43m分を検出することができたが、調査区の東辺部に沿って検出したため、溝の大半は西半部しか確認しておらず、全体が分かったのは拡張区での長さ約9m分のみであった。そこで、その部分で明らかになった内容を説明すると、溝は西から東に向かって2段に掘り窪められており、その比高は0.15m前後であった。溝の幅は約1.6m、深さ0.3mほどの規模があり、断面は逆台形を呈していた。溝底は、凹凸がほとんど認められず、おおむね北から南に向かって緩やかに傾斜していた。溝内の埋土は、上から灰褐色粘質土層、茶褐色粘質土層、灰褐色砂質炭混じり土層などに分けることができ、土師器、須恵器、瓦などの遺物が廃棄された状態で出土している。埋土の中に砂や礫などの堆積が認められなかつたことから、溝内の流水はほ



第5-5図 溝SD14・16断面図 (1/50)



第5-6図 柵SA17・18実測図 (1/80)

とんどなく、淀んだ状態であったものと推察することができる。溝心の国土座標値は、X=-119,153、Y=-26,312.2であって、その数値からみて東一坊大路の東側溝であると判断した。

**五条条間小路南側溝 SD15** 東に突出する拡張区で検出した東西方向に延びる素掘りの溝で、西端は東一坊大路東側溝SD14に直交するように連結している。小溝SD13と重複しており、それよりも古いことを確認できた。溝の幅は0.7m以上、深さ0.2m以上の規模があり、断面は逆台形を呈している。溝内からは、土師器、須恵器などの遺物が少量出土している。溝心の国土座標値が、X=-119,149.5、Y=-26,302であることからみて、五条条間小路の南側溝であると判断した。

**溝 SD16** 調査区の北部において検出した東西方向の素掘り溝で、東端部は東一坊大路東側溝SD14に直交して連結しているものと推察される。小溝SD04と重複しており、それよりも古いことを確認した。溝の幅は、約1.6m、深さは0.3m程度の規模が有り、先に説明した東一坊大路の東側溝に遜色のない規模であることが知られた。溝の底部は、ほとんど凹凸がなく、おおむね西から東に向かって緩やかに傾斜していた。埋土は、上から灰色粘質土斑入茶色粘質土層、灰色粘質土層、暗黄灰色粘質土層、茶褐色粘質土層の3~4層に分けることができ、土師器、須恵器など長岡京期の遺物が出土している。調査時点では条坊路（五条条間小路）の側溝と考えたが、その後の調査の進展により東一坊大路の路面を横断していることが判明した。溝心の国土座標値は、X=-119,144.2、Y=-26,318である。

**柵 SA17・18** 柵SA17は、五条条間小路南側溝SD15から南に0.9mほど離れ、それと平行するように東西方向に延びる掘立柱列で、東西に4間以上あることを確認した。柱掘形は、一辺が0.3~0.5mの隅円方形を呈し、柱痕跡は径0.1m程度であった。柱間寸法は、西から2.8m、2.8m、3.15mと不揃いである。

柵SA18は、SA17の西端から南に延びる掘立柱列で、東一坊大路東側溝SD14から東に0.9mほど離れ、南北に3間以上あることを確認できた。柱掘形は、一辺0.4~0.5mの隅円方形を呈し、柱痕跡は径0.15mほどである。柱間寸法は、北から2.7m、2.7m等間である。

これらの柵列は、左京六条二坊三町の北西隅を区画する施設になるものと考えられる。このことは、大路に面する遮蔽施設が必ずしも築地塀でなくてもよいことを示唆しており、注目に値しよう。

**土坑 SK19** 調査区の北東隅で検出した



第5~7図 土坑SK19実測図(1/20)

不整形な土坑で、東一坊大路の東側溝に近接する路面上に所在することが判明した。東西0.9m、南北0.8mの規模があり、深さは0.15m程度であった。埋土は、茶灰色炭混じり土層と黄灰色粘質土層の上下2層に分けられ、そのうち茶灰色炭混じり土層には炭化物を多く含んで黒色化していた（第5-22図）。土坑内からは、土師器、須恵器、瓦などの遺物が出土している。

### （3）弥生～古墳時代の遺構

**溝SD22** 調査区のほぼ中央部で検出した東北東から西南西の方向に延びる素掘りの溝。幅0.8～1.2m、深さは0.2m程度の規模で、埋土は灰茶色細砂であった。

**溝SD24** 調査区の南部で検出した弧を描くように東西方向に延びる溝で、幅は0.2～0.5m、深さ約0.1mほどの規模がある。

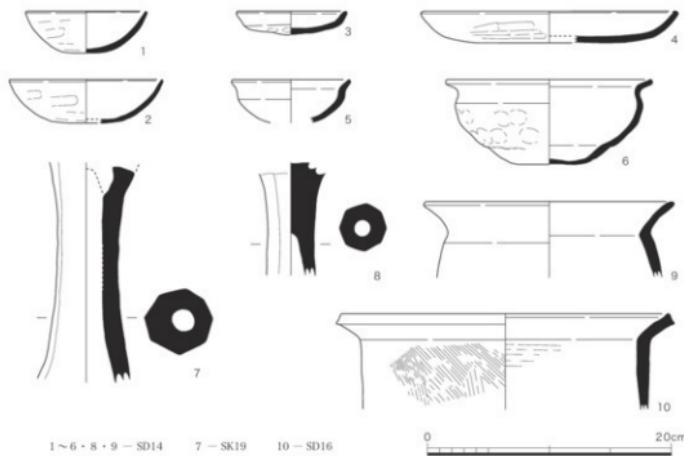
**土坑SK23** SD24の北西すぐで検出した南北に長い土坑である。幅約0.3m、長さ約0.7m、深さ約0.1mの大きさで、灰色粘質土を埋土としていた。土師器の破片が若干出土している。

この他、SD22のすぐ北側において約1m、南北約0.8mの範囲に土師器の甕が破損した状態で散布しているのを確認している。

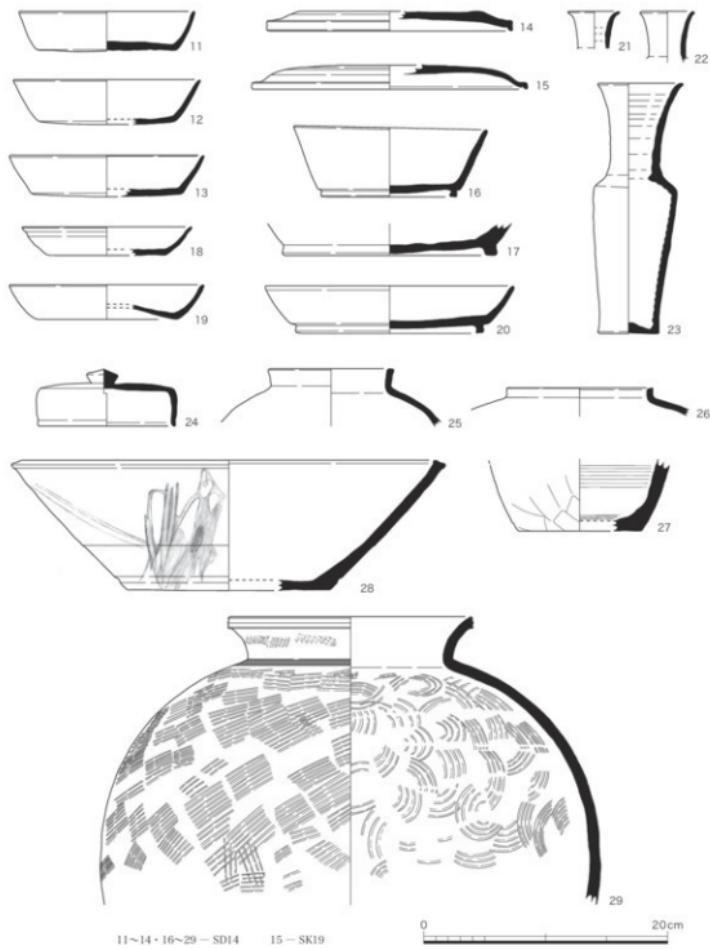
### 出土遺物

#### （1）長岡京期の遺物

長岡京期の遺物には、土師器、須恵器、製塙土器、瓦類などがある。その多くは、東一坊大路東側溝SD14から出土したもので、次いで土坑SK19が多く、東西溝SD16や五条条間小路南側溝SD15などの遺構はさほど多くはなかった。以下、主な出土遺物について説明を加えるが、出土した遺構は特に断らない限り東一坊大路東側溝SD14から出土したものである。



第5-8図 土師器実測図(1/4)

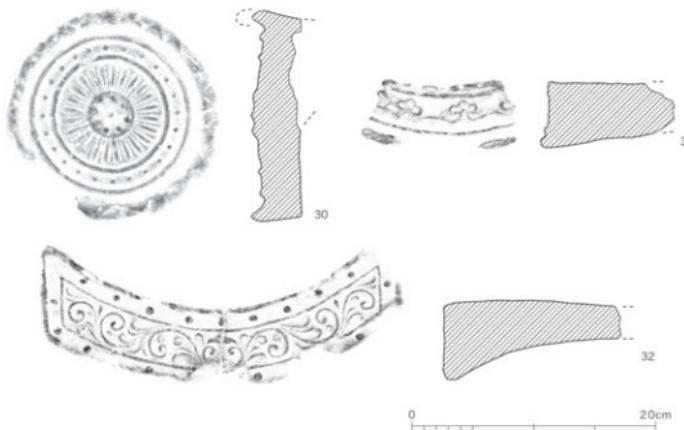


第5~9図 須恵器実測図 (1/4)

**土師器** 土師器には、椀A・皿A・皿C・壺B・壺C・高杯・甕などの器種がある。

椀Aは、口径10cmの小型品(1)と口径12.6cmの中型品(2)があり、調整手法は外面全体をヘラケズリして仕上げるc手法である。

皿A(4)は、底部が平底形態の皿で、口縁端部を内側に丸めて肥厚させている。外面全体を



第5-10図 軒丸瓦・軒平瓦実測図(1/4)

ヘラケズリするc手法で調整して仕上げている。

皿C(3)は、口径が9.1cmしかない小型の皿の完形品である。口縁部外面と内面のみをナデ調整するe手法で仕上げている。

壺B(6)は、いわゆる墨書き人面土器の形態の壺で、粘土紐の接合痕が残っているが、人面は墨書きされていない。

壺C(5)は、壺Bの小型形態の壺で、全体に摩滅しているため、墨書きを認めることはできなかつた。

高杯(7・8)は、いずれも芯棒に粘土を貼り付けて脚柱状部を成形するもので、削りによつて8角形に面取りして仕上げている。7は、土坑SK19から出土したものである。

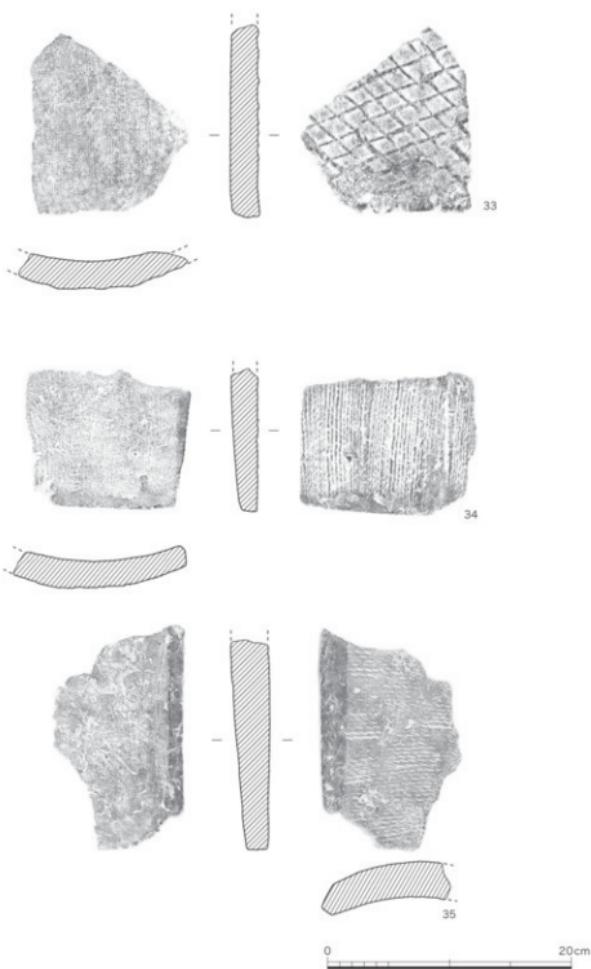
甕A(9)は、くの字状に屈曲する口縁部をもつ形態の甕で、全体に摩滅していく調整手法は不明瞭である。

甕E(10)は、口縁部がくの字状に鋭く屈曲し、体部が大きく膨らまない形態の甕で、胎土に砂粒を比較的多く含み、暗茶褐色を呈している。外面に煤の付着が認められ、東西溝SD16から出土したものである。

**須恵器** 須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・壺A・壺G・壺M・盤A・甕などの器種がある。

杯A(11~13)は、平底形態の杯で、口縁部が外反するもの(12)と内湾気味に立ち上がるるもの(11・13)があり、いずれも軟質に焼成されている。

杯B(16・17)は、底部に高台を貼り付けた形態の杯で、17は高台径が17.6cmもある大型



第5-11図 平瓦・丸瓦実測図 (1/4)

品の底部である。16は硬質に焼成されているが、17の焼成はあくまでも軟質に仕上がっている。

杯B蓋(14・15)は、ともにつまみ部を欠損しているが、口縁端部が屈曲する形態である。14の内面は平滑で、墨痕が認められることから、硯に転用されたものと考えられる。15は、土坑SK19から出土したものである。

皿A (18・19) は、平底形態の皿であるが、19の底部は上げ底風に歪んでいる。18は口縁部がやや外反気味に開き、19は軟質に焼成され、全体に摩滅している。

皿B (20) は、口径が20.4cmもある大型の皿で、重ね焼きの痕跡をとどめている。底部内面は平滑であり、硯に転用された可能性もある。

壺A (25・26) は、口縁部が短く直口する形態の壺で、26の肩部には蓋との重ね焼きの痕跡をとどめている。

壺A蓋 (24) は、器高が比較的高く作られている。つまみは宝珠形で、天井部外面にはつまみも含めて自然釉が付着している。

壺M (21・22) は、ともに外反しながら上方にのびる口縁部の破片で、口縁端部は丸くおさめている。21の内外面には、自然釉の付着が認められる。

壺G (23) は、ほぼ完形に復元できるものであるが、軟質に焼成され、全体的に摩滅を受けているため、調整の痕跡は不明瞭である。

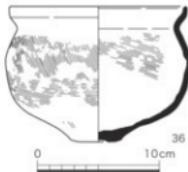
27は壺の底部片と考えられるもので、底部は平底で未調整、外面をケズリによって調整する。

盤A (28) は、平底の大型盤である。軟質に焼成されており、体部外面には火擣の痕跡が明瞭に残っている。底部は未調整。

甕 (29) は、くの字に屈曲して外反する口縁部を持つ形態で、口縁端部は垂直する面をもつ。体部外面に平行タタキ、内面には同心円の当て具痕をとどめ、肩部外面にカキメの痕跡がある。外面には自然釉が付着している。

**軒丸瓦** 30は、単弁の蓮華文軒丸瓦で、瓦当面はほぼ完形であるが、丸瓦部を欠損していた。瓦当面の文様構成をみると、中房の蓮子の数は1+8、蓮華文の弁数は24葉である。外区は西鋸歯文を24個配している。胎土には、チャートや長石などの砂粒を含んでおり、瓦質に焼成されているが、全体に摩滅を受けているため、表面の炭素吸着は剥離している。6320Ab型式に比定することができる。

**軒平瓦** 31は、飛雲文軒平瓦である。瓦当面の中央下半と右端部が部分的に欠損している。凸面は繩タタキの痕跡、凹面には布目痕をとどめる。瓦質焼成であるが、全体に摩滅している。直線頭で、6802B型式に比定できる。32は、唐草文の軒平瓦である。瓦質に焼成されているが、全体に摩滅している。直線頭で、6732F型式に比定することができる。



第5-12図 弥生土器実測図(1/4)

**平瓦** 33は、凸面は斜格子タタキ、凹面には布目痕が残る。瓦質に焼成されている。34は、凸面は縱方向の繩タタキ、凹面は布目痕をとどめている。側面はケズリによって面取りして仕上げる。瓦質に焼成されている。

**丸瓦** 35は、凸面を横方向に繩タタキした後、ナデを加えて仕上げている。凹面には、布目痕を明瞭に

付表5-1 出土土器観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	碗A	1	10.0	3.5	-	灰白色	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ(c手法)	SD14 4D区2層	
		2	12.6	3.6	-	にぶい黄橙色	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ(c手法)	SD14 4D区2層	
	皿C	3	9.1	2.0	-	にぶい黄橙色	口緑部外面・内面：ナデ 体部外面：未調整(c手法)	SD14 8E区2層	完形品
	皿A	4	21.0	2.6	-	にぶい黄橙色	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ(c手法)	SD14 1D区2層	
	壺C	5	9.8	(3.5)	-	浅い黄橙色	口緑部外面・内面：ナデ 体部外面：未調整(c手法)	SD14 4D区2層	全体に摩滅
	壺B	6	16.9	7.0	5.0	浅い黄橙色	口緑部外面・内面：ナデ 体部外面：未調整(c手法)	SD14 4D区2層	全体に摩滅
	高杯	7	-	(18.0)	-	にぶい黄橙色	外面：ヘラケズリ	SK19	心棒作り 8角形に面取り
		8	-	(9.2)	3.8	にぶい黄橙色	外面：ヘラケズリ	SD14 7区2層	心棒作り 8角形に面取り
	甕A	9	20.5	(6.2)	-	にぶい黄橙色	ナデ	SD14 4D区	
	甕E	10	27.7	(7.9)	-	暗茶褐色	口緑部内外面：ナデ 体部内外面：ハケメ	SD16 5C区1層	外面に煤が付着
須恵器	杯A	11	14.4	3.3	11.4	灰白色	回転ナデ	SD14 1D区2層	全体に摩滅
		12	15.3	3.6	11.2	灰白色	回転ナデ	SD14 4D区1層	全体に摩滅
		13	16.0	3.4	12.4	灰白色	回転ナデ 底部外面：ヘラ切り後ナデ	SD14 4D区1層	
	杯B蓋	14	20.1	(1.6)	-	灰白色	回転ナデ 天井部外面：ヘラ切り後ナデ	SD14 9E区1層	内面に墨痕あり、鏡に転用
		15	22.6	(2.1)	-	灰色	回転ナデ 天井部外面：ヘラ切り後ナデ	SK19	
	杯B	16	15.9	5.8	11.2	オリーブ灰	回転ナデ 底部外面：ヘラ切り後ナデ	SD14 8D区1層	
		17	-	(2.6)	17.6	灰白色	回転ナデ	SD14 8E区	全体に摩滅
	皿A	18	13.9	(2.4)	-	灰色	回転ナデ 底部外面：ヘラ切り後ナデ	SD14 4D区1層	
		19	16.0	(2.9)	11.4	灰白色	回転ナデ 底部外面：ヘラ切り後ナデ	SD14 7E区2層	
	皿B	20	20.4	3.9	15.4	灰白色	回転ナデ	SD14 5D区2層	口緑部に重ね焼きの痕跡 底部内面が平滑

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	壺M	21	4.3	(3.1)	-	灰色	回転ナデ	SD14 7E区2層	内外面に 自然釉付着
		22	4.5	(4.2)	-	灰色	回転ナデ	SD14 7E区2層	
	壺G	23	7.0	20.5	5.0	灰白色	回転ナデ	SD14 5D区2層	全体に摩滅が頗著
	壺A蓋	24	11.3	4.7	-	灰色	回転ナデ	SD14 4D区1層	天井部に 自然釉付着
		25	10.3	(4.7)	-	灰白色	回転ナデ	SD14 4D区1層	
	壺A	26	12.0	(2.8)	-	灰白色	回転ナデ	SD14 4D区1層	口縁部に 重ね焼きの痕跡
		27	-	(5.9)	-	灰白色	回転ナデ 体部外面：ケズリ	SD14 4D区1層	
	盤A	28	35.6	10.6	16.6	灰色	回転ナデ 底部外面：ヘラ切り後ナデ	SD14 4D区1層	火葬の痕跡
	壺	29	20.0	(23.6)	-	灰色	外面：平行タタキ、カキメ 内面：同心円當て具痕	SD14 4D区1層	外面に自 然釉が付着
弥生土器	鉢	36	16.4	11.1	4.2	橙色	外面：口縁部はナデ、体部はナナメハケ 内面：口縁部はナデ、体部はナナメない しヨコハケ	SD14 4D区1・ 2層	

付表5-2 出土瓦観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構層位	備考
			長さ	幅	厚さ				
瓦	軒丸瓦	30	16.2	-	4.1	灰色	凹凸面の調整などは摩滅のため不明	SD14 4D区1層	全体に摩滅 6320Ab型式
		31	(10.8)	(13.0)	5.4	灰白色	凸面：ナデか 凹面：布目痕	SD14 4D区1層	6802B型式
	軒平瓦	32	(14.5)	28.8	4.2	灰色	凸面：ナデか 凹面：ナデか	SD14 4D区1層	全体に摩滅 6732F型式
		33	(15.8)	(14.2)	2.4	灰色	凸面：斜格子タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ	SD14 4D区2層	
	平瓦	34	(11.7)	(14.2)	2.4	灰色	凸面：網タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ	SD14 1D区2層	
		35	(17.2)	(10.6)	3.1	灰色	凸面：網タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ	SD14 4D区1層	

とどめ、側面をケズリによって仕上げる。瓦質に焼成されている。

## (2) 弥生時代の遺物

36は、受け口状に屈曲する口縁部をもち、口縁部よりも体部の方が径を大きく作られた鉢である。底部は上げ底気味で、底径は4.2cmと小さい。弥生時代後期後半に比定することができる。

## 小 結

以上みてきたように、東一坊大路と五条条間小路の交差点を確認できたことは、長岡京の条坊を復原する上に大きな成果だといえる。以下では、東一坊大路と五条条間小路、そして条坊の交差点について簡単にまとめ、終わりとしたい。

まず、東一坊大路については、長岡宮の東限を画する重要な条坊路であり、付表5-3に示したように、これまで22地点で確認されている。南限がおおむね六条大路付近まで、北限は北京極よりも以北の京域外にあたる久々相遺跡（第5・6・10・11次調査）や修理式遺跡（第9次調査）においても確認されており、長岡京に「北辺条坊」が存在したことを査証する資料ともなっている。しかしながら、調査によっては東側溝のみが確認された例もあれば、西側溝のみの場合もあり、側溝の検出状態は多様である。同じ調査で東西両側溝が確認されたのは、宮第210次調査と左京第257次調査のわずか2例にすぎず、京域外の修理式遺跡と久々相遺跡をも含めても4例と少数であることに変わりはない。それらの調査結果から路面幅を側溝の心々間で計測すると、左京第257次調査の22.9mは若干短かめであるが、他の3例の数値は24.4～25mである。このことからすると、東一坊大路は、おおむね80尺で計画され、施行されたと判断できそうである。また、側溝の方位は、北で東に6'程度振れていることも判明している。

次に五条条間小路については、四条大路と五条大路との中间を東西に走る小路であるが、これまでのところ調査事例は本例を含めても3例と極めて乏しいといわなくてはならない。今後、類例の増加を待って改めて考えてみたい。

最後に、東一坊大路の路面上を横断して掘り込まれた東西溝SD16について検討してみたい。この溝の特徴としては、溝幅が1.6mと今回確認した東一坊大路東側溝SD14とはほぼ同じであり、大路の側溝規模に遜色がないことを指摘することができる。また、調査区内においてこの溝と対になる溝は確認されておらず、単独で東一坊大路の路面上に掘られたことは確実である。そこで、今回検出した五条条間小路南側溝SD15との心々距離を求める約5mとなる。この数値は、小路の幅員約9mの1/2に近似することから、五条条間小路の中央付近に位置している可能性が考えられる。つまり、五条条間小路の南北側溝は、東一坊大路の東西側溝とT字状に連結しており、東一坊大路が六条条間小路よりも基本的に優先されていることは間違いないが、雨水などの排水を西側溝から東側溝に流下させるために、東一坊大路の路面上を横断させて掘られたのがSD16ではないかと考えておきたい。

（山本 雄輝）

付表5-3 東一坊大路側溝の座標値一覧

東 側 溝				西 側 溝					
	調査 次数	遺構名	X座標	Y座標	調査 次数	遺構名	X座標	Y座標	文献
京 域 外	修理工式9-11	SD0901	-115,679.50	-26,306.00	修理工式9-11	SD0902	-115,680.00	-26,331.00	1
	久々相5・6	SD0505	-116,026.00	-26,307.00	久々相5・6	SD0506	-116,009.20	-26,331.40	2
	久々相10・11	SD1001	-116,245.00	-26,302.40					3
宮 城					P198	SD19801	-116,493.30	-26,332.50	4
					P277	SD27701	-116,658.40	-26,332.16	5
左 京 城	L451	SD45102	-116,821.00	-26,307.70					6
宮 城					P373	SD37301	-117,030.00	-26,332.87	7
	P210	SD21013	-117,325.00	-26,308.98	P210	SD21013	-117,325.00	-26,333.42	8
					P329	SD21014	-117,370.00	-26,328.80	9
左 京 城	L556	SD55630	-118,210.00	-26,310.65					10
	L465	SD46511	-118,349.10	-26,310.90					11
	L422	SD42205	-118,440.00	-26,311.10					12
	L257	SD25703	-118,482.00	-26,311.40	L257	SD25702	-118,479.10	-26,334.30	13
	L522	SD52201	-118,830.00	-26,312.06					14
	L258	SD25817	-118,858.00	-26,312.25					15
	L125	SD14	-119,150.00	-26,312.20					本書
					L292	SD05	-119,246.50	-26,336.90	16
	L311	SD03	-119,668.10	-26,313.30					17
	L326	SD03	-119,700.00	-26,313.30					18
	L415	SD01	-119,720.00	-26,313.30					19
	L316	SD03	-119,748.20	-26,313.30					20
					L557	SD17	-119,917.00	-26,338.60	21

文献1 「向日市報告書」第68集 2005年

文献2 「向日市報告書」第50冊 2000年

『向日市報告書』第70集 第2分冊 2006年

文献3 「向日市報告書」第62集 2004年

文献4 「向日市報告書」第24集 1988年

文献5 「向日市報告書」第41集 1997年

文献6 「向日市報告書」第58集 第2分冊 2003年

文献7 「向日市報告書」第70集 第1分冊 2006年

文献8 「向日市報告書」第25集 1989年

文献9 「向日市報告書」第62集 第2分冊 2004年

文献10 長岡京連絡協議会資料

文献11 「向日市報告書」第61集 2003年

文献12 「向日市報告書」第49集 1999年

『向日市報告書』第57集 2002年

文献14 「向日市報告書」第83集 2011年

文献15 「向日市報告書」第31集 1991年

文献16 「長岡京市センター年報」平成4年度 1994年

文献17 「長岡京市センター年報」平成5年度 1995年

文献18 「長岡京市センター年報」平成6年度 1996年

文献19 「長岡京市センター年報」平成9年度 1999年

文献20 「長岡京市センター年報」平成5年度 1995年

文献21 「長岡京市センター年報」平成25年度 2015年



第5-13図 調査区全景（北から）



第5-14図 調査区全景（南から）



第5-15図 拡張区全景（西から）



第5-16図 拡張区全景（東から）



第5-17図 東一坊大路東側溝 SD14 全景（北から）



第5-18図 東一坊大路東側溝 SD14 全景（北から）



第5-19図 東一坊大路東側溝 SD14 遺物出土状況

（南から）



第5-20図 溝SD16 全景（西から）



第5-21図 柵SA17 全景（東から）



第5-22図 土坑SK19 全景（東から）



第5~23図 出土遺物-1



第5-24図 出土遺物-2



第5-25図 出土遺物-3

## 6. 長岡京跡左京第302次調査 ～長岡京期、条坊側溝等出土資料～

調査地	長岡京市神足拾式1	地区名	7ANMJN-3地区
調査期間	1993（平成5）年4月21日～6月10日	調査面積	264m <sup>2</sup>
時期	長岡京期	出土遺物	20箱
立地	小畠川のつくった扇状地 標高11m		
参考文献	「左京第302次調査略報」『長岡京市センター年報』平成5年度 1995年		

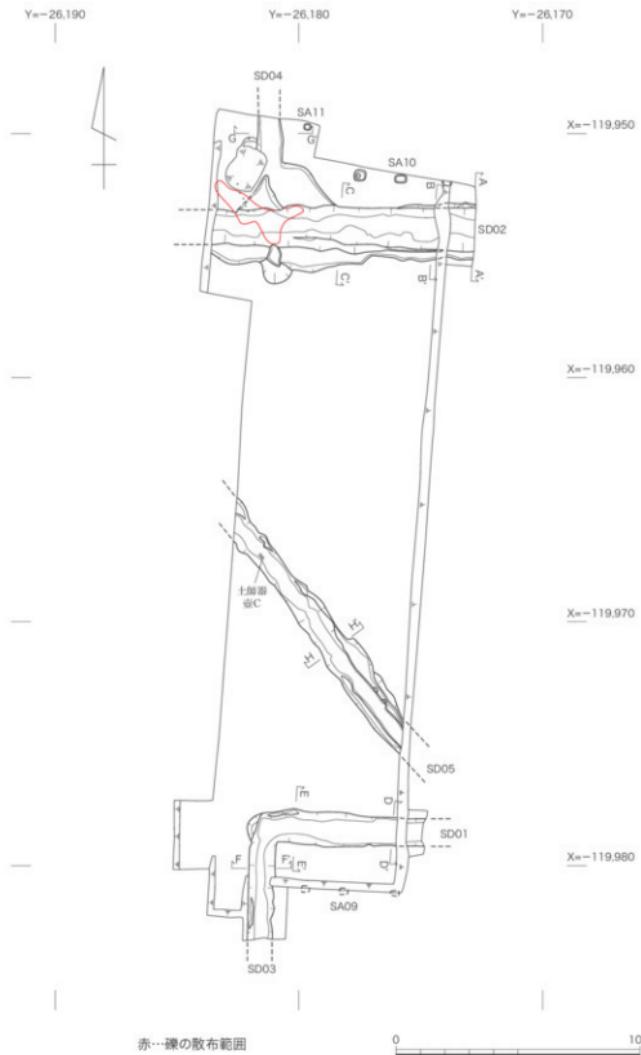
### 調査の概要

本調査は、工場建設工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は、JR京都線長岡京駅の東方約950mに位置する工場地帯の一角であるが、周辺にはまだ多くの水田が残っており、調査地もまた水田として利用された所であった。

長岡京の条坊復原によると、左京六条二坊五町と七条二坊八町にまたがる地点で、六条大路と東二坊坊間西小路との交差点が想定されていた。当地はまた、弥生～古墳時代を中心とする集落遺跡である雲宮遺跡の範囲にも含まれる所で、すぐ北側には弥生時代前期の環濠集落の広がることが確認されていた。

調査地は、すでに開発地周囲の擁壁工事が終了しており、擁壁で囲まれた水田の南半部に幅約8m、長さ約29mの南北に長い調査区を設定し、4月21日から重機で耕作土や床土などを排除





第6-2図 調査区検出遺構図（長岡京期）(1/200)

し、22日から人力で遺構検出のための精査を進めた。その結果、地表下約0.5mの灰色シルト層上面において条坊路の側溝や柵列などの遺構を確認した。そして、条坊路を追究するため、調査区の南北両端をそれぞれ東西および南へ拡張するなどして調査を進め、さらに下層において古墳～弥生時代の流路などの遺構を部分的に検出するなどの成果を収め、6月10日には現地での調査を終了することができた。

なお、調査区心の国土座標値は、X=-119,965、Y=-26,179である。

#### 検出遺構

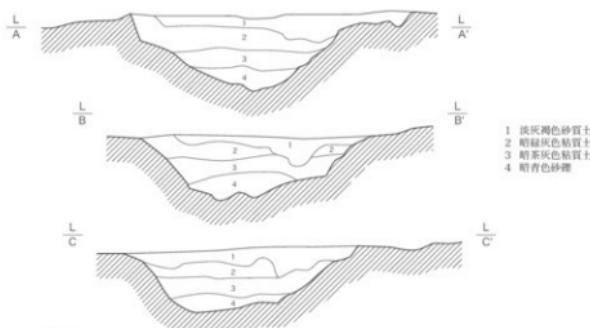
**六条大路南側溝 SD01** 調査区の南部で検出した東西方向の素掘り溝で、西側は南に屈曲して東二坊坊間西小路東側溝SD03に連なり、東側の調査区域外に続いている。溝の幅は、1.1～1.3m、深さ0.3～0.4m程度の規模があり、断面は逆台形を呈している。溝の肩部は、おおむね直線的で、底部は西から東に向かって緩やかに傾斜していた。溝の埋土は、上から茶灰色粘質土層、暗灰色炭泥じり土層、暗灰色粘質土層の3層に分けることができたが、流水を示唆するような堆積状況を認めることはできなかった。溝内からは、土師器、須恵器などの遺物がまとめて出土した。溝心の国土座標値をみると、X=-119,978.64、Y=-26,175であって、その数値から六条大路の南側溝であると判断するに至った。

**六条大路北側溝 SD02** 調査区の北部で検出した東西方向に延びる素掘りの溝で、東西とも調査区域外に続いている。溝の幅は1.8～2.7m、深さ0.55～0.6mの規模があり、断面は逆台形を呈している。溝の両肩は出入りがあり、溝底は西から東に向かって緩やかに傾斜していた。溝の埋土は、上から淡灰褐色砂質土層、暗緑灰色粘質土層、暗茶灰色粘質土層、暗青色砂礫層の4層に分けられ、砂礫層の堆積が認められることから、流水があったことを示唆している。溝内からは、土師器、須恵器、瓦、陶砲、土馬など多彩な遺物がまとめて出土しているが、東二坊坊間西小路の東側溝SD04と合流するあたりでは、人頭大ほどの河原石や凝灰岩などが散乱した状態で埋没していた。溝心の国土座標値は、X=-119,953.84、Y=-26,183.6であり、その数値から六条大路の北側溝であると判断した。したがって、先述した南側溝SD01との距離を溝の心々で求めると24.8mという数値が得られた。

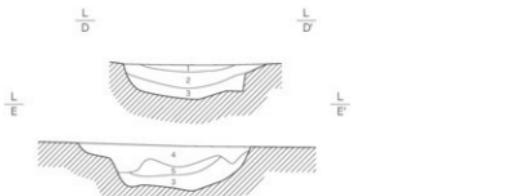
**東二坊坊間西小路東側溝 SD03** 六条大路南側溝SD01の西端から南に直交して延びる南北方向の素掘り溝で、南側は調査区域外に延びている。溝幅1.1m、深さ0.45mで、断面は逆台形である。埋土は、上から暗緑灰褐色粘質土層、灰色粘質土層、暗灰色粘質土層の3層に分けられ、土師器、須恵器などの遺物が出土している。溝心の国土座標値は、X=-119,983、Y=-26,181.6であり、東二坊坊間西小路の東側溝であると推察することができた。

**東二坊坊間西小路東側溝 SD04** 調査区の北部で検出した南北方向の素掘り溝で、六条大路北側溝SD02とT字状に連結しているが、連結部は大きくハの字状に広がっていた。溝の幅は0.9～1.1m、深さは0.2mと他の側溝よりも浅く、しかも埋土は暗茶褐色砂質土層の1層のみであった。土師器や須恵器の破片が出土しているが、量的には乏しい。溝心の国土座標値は、X=-119,949.5、Y=-26,181.2であり、先に述べた東側溝SD03の数値に近似していることから、

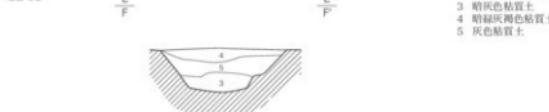
SD02



SD01



SD03



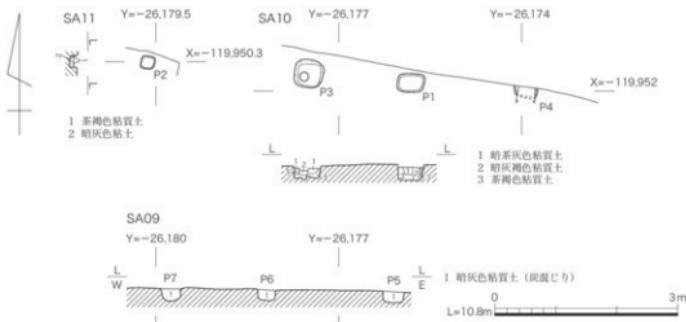
SD04



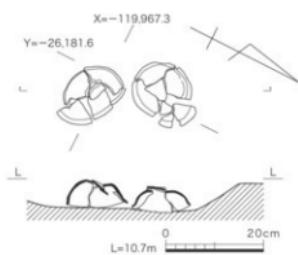
SD05



第6-3図 条坊側溝 SD01～04、斜行溝 SD05 断面図 (1/40)



第6-4図 柵SA09断面図、柵SA10・11実測図(1/80)



第6-5図 斜行溝SD05 土師器壺C出土状況実測図(1/10)

須恵器などが出土しているが、特に東一坊大路東側溝の延長線上にあたる地点において土師器の壺Cが2個体伏せ置いた状態(第6-5・17図)で出土していることは、路面上で行われたであろう祭祀を検討する上に興味深い資料といえる。

**柵SA09** 調査区南端の壁面において検出した2間以上の東西方向に延びる掘立柱列で、六条大路南側溝SD01より南に1.5m程度離れている。柱掘形は、一辺0.3mほどの隅円方形を呈するものと推察され、深さは0.2m遺存していた。柱痕跡は確認できていないが、柱間寸法は西から1.6m、2.1mと不揃いである。この柵は、右京七条二坊八町の北辺を遮蔽する施設になることが推察できる。

**柵SA10** 調査区の北端で検出した東西に2間以上の続く掘立柱列で、六条大路北側溝SD02よりも1m前後北側にある。柱掘形は、一辺0.35～0.5mの隅円方形で、柱痕跡は径約0.2mを測り、柱間寸法は約1.8m等間であることが知られた。この柵は、右京六条二坊五町の南辺を遮蔽する施設になるものと推察することができる。

東二坊坊間西小路の東側溝と判断した。

**斜行溝SD05** 調査区の中央部において検出した北西から南東に向かって延びる素掘り溝で、六条大路の路面を斜めに横断するように掘り窪められていた。溝の幅は、0.85～1.6m、深さ0.3mほどの規模があり、断面はU字状を呈している。溝の両肩とも入りが多く、溝底には窪みが多数認められた。溝の埋土は、上から灰褐色粘質土層、黄褐色砂層、暗灰色粘質土層、暗灰色疊混じり土層に分けられ、砂の堆積が認められることから、流水のあったことを示唆している。遺物は、主に砂層から土師器、

**柵 SA11** 調査区の北端で柱掘形を1基検出したが、その検出位置からみて右京六条二坊五町の西辺を遮蔽する南北方向の柵になるものと判断した。柱掘形は、一辺約0.2mの隅円方形を呈するが、柱痕跡は確認できなかった。

#### 出土遺物

今回の調査では、弥生時代、長岡京期、中世、近世以降に大別できる遺物が出土しているが、その大半を占めているのが長岡京期の遺物である。

長岡京期の遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、土製品、瓦類、金属製品、木製品、凝灰岩など各種のものがある。六条大路北側溝SD02から出土したものが大半を占めており、次いで六条大路南側溝SD01が多く、東二坊坊間西小路東側溝SD04や斜行溝SD05などの遺構は少量であった。以下、主な出土遺物について説明を加えることとするが、出土した遺構は特に断らない限り六条大路の北側溝SD02から出土したものである。

**土師器** 土師器には、杯A・杯B・椀A・皿A・壺B・壺C・盤B・高杯・甕A・羽釜などの器種がある。

杯A（1・2）は、底部が平底形態の杯で、口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させている。調整は、外面すべてをヘラケズリして仕上げるc手法である。

杯B（3）は、杯Aの底部に高台を貼り付けた形態の杯であるが、口縁部を欠損する。外面の調整は、ケズリを施した後にミガキを加えて仕上げている。

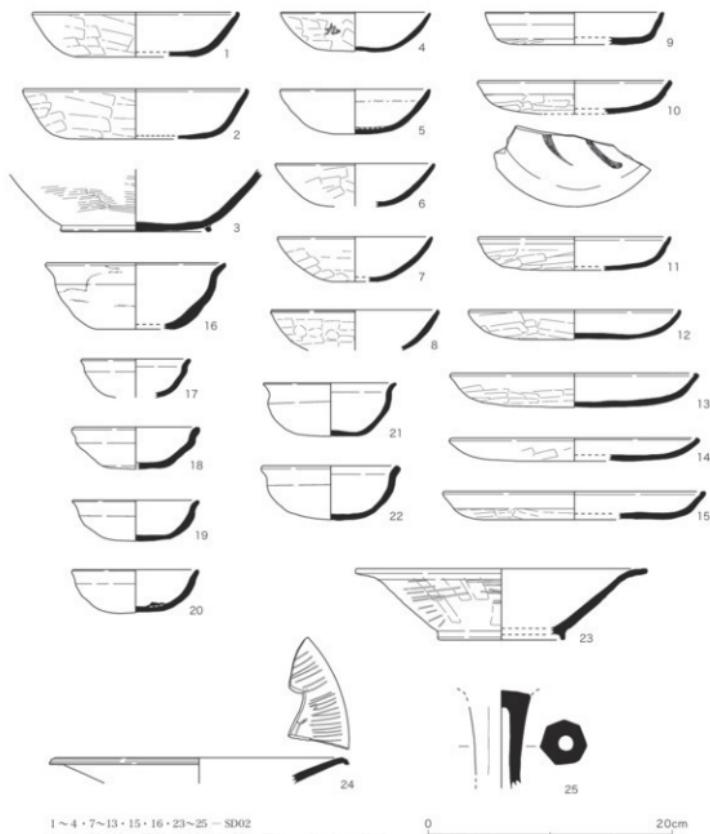
椀A（4～8）は、口径12.3～13.8cm、器高3.3～4cm前後の法量で、外面全体をヘラケズリするc手法で調整して仕上げる。4の外面には「九」の字の墨書が認められ、5の内外面と6の内面には漆の皮膜が認められたことから、漆塗りの際にパレットとして使用された可能性を考えられる。5・6は、六条大路南側溝SD01から出土したものである。

皿A（9～15）は、底部が平底形態の皿で、口縁端部を丸くおさめるもの（9）と、内側に折り曲げて肥厚させたもの（10～15）がある。口径15～17cm前後のもの（9～12）と、20.5cm前後のもの（13～15）に分けられる。また、調整技法は、外面全体をヘラケズリするc手法のもの（12・14）と、底部のみをヘラケズリするb手法のもの（9）、そしてその中間のもの（10・11・13・15）がある。10の底部外面には判読不明の墨書が、また13・15の底部外面には焼成後に施された線刻が認められた。14は、東二坊坊間西小路東側溝SD03からの出土。

壺B（16）は、内面と口縁部外面のみしかナデ調整しない作りが粗雑な壺で、外面には粘土紐の接合の痕跡をとどめている。祭祀に使用されたとみられるいわゆる墨書き土器の形態であるが、人面は墨書きされていない。

壺C（17～22）は、壺Bの小型形態であるが、いずれも墨書きによる人面は描かれていない。18～20の内面には、漆皮膜の付着が認められることから、パレットなどの漆容器として使用されたことが考えられる。17・19は六条大路南側溝SD01、18・20は東二坊坊間西小路東側溝SD03、そして21・22は斜行溝SD05から出土したものである。

盤B（23）は、口縁部が大きく開き、底部に高台を貼り付けた形態で、体部外面はヘラケズ



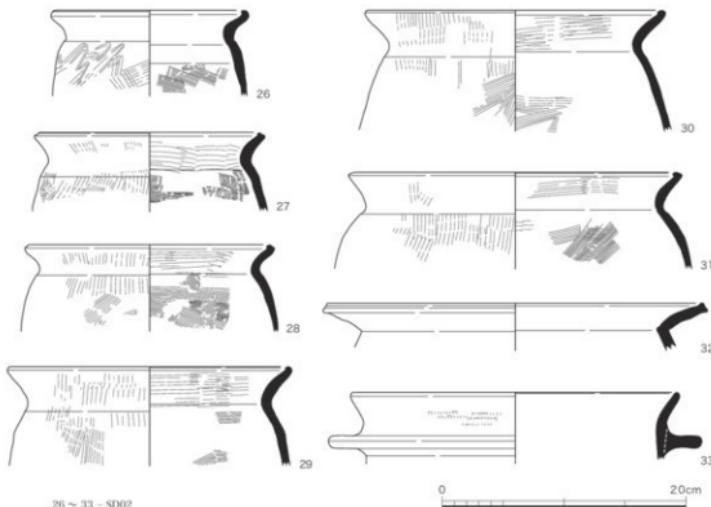
第6-6図 土師器実測図-1 (1/4)

リの後にミガキを加えて仕上げている。

高杯は、24が杯部、25が脚柱状部の破片である。24の内面を放射状および螺旋状にミガキを施して加飾し、25はケズリを施して七角形に面取りしている。

甕A (26 ~ 31) は、口縁部が緩やかに屈曲して外反する形態で、おおむね口径 16cm 前後、19 ~ 20cm、23 ~ 27cm 程度のものに分けることができる。26と28の外面に煤が付着していることから、煮沸に使用されたものと考えられる。

甕C (32) は、口縁部がくの字状にするほど屈曲する形態の甕で、胎土に砂粒を比較的多く含む特徴がある。



第6-7図 土師器実測図-2 (1/4)

羽釜（33）は、胎土に角閃石を含み、暗茶褐色を呈していることなどから、生駒山西麓産の土器と考えることができる。

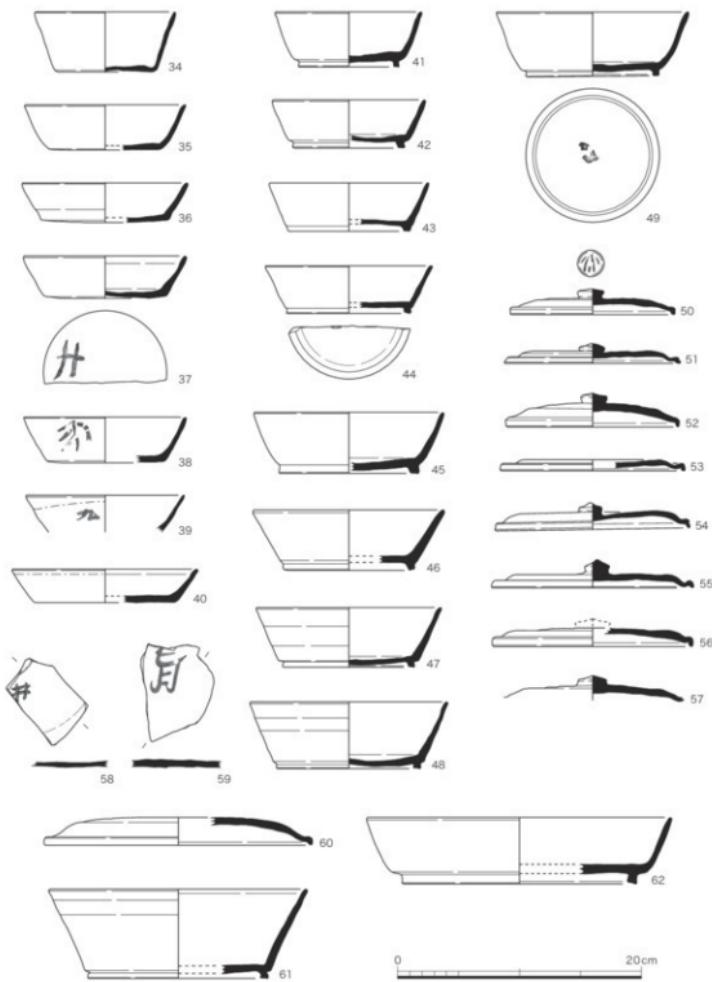
**須恵器** 須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・壺M・壺L・壺N・鉢D・甌などの器種がある。

杯A（34～38）は、底部が平底の杯で、口径11.6cmの小型品（34）と口径13.5cm前後の中型品（35～38）があり、34は器高が4.9cmと高い特徴がある。37の底部外面には「井」の墨書が、また38の口縁部外面には判読不明の墨痕が認められる。34と37は、六条大路南側溝SD01から出土したものである。

杯B（41～49・61）は、底部に高台を貼り付けた形態の杯で、法量によって12～13.7cmの小型品（41～44）、口径15.2～16.2cmの中型品（45～49）、口径21.2cmの大型品（61）に分けられる。44と49は底部外面に、61の底部内面には墨痕が確認できた。この他、41の内面には漆膜の痕跡が認められたことから、パレットなどの漆容器として使用されたことが考えられる。41と61は、六条大路南側溝SD01からの出土。

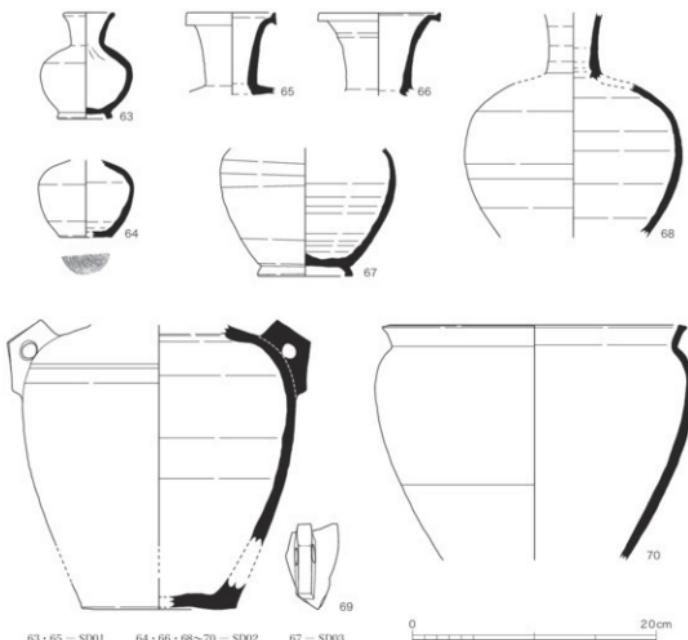
39は、杯Aないし杯Bの口縁部片と考えられる破片で、外面には「九」の墨書が認められるが、筆跡は4（土師器椀A）に類似している。軟質に焼成されていて、口縁部外面には重ね焼きの痕跡をとどめている。

杯B蓋（50～58・60）は、いずれも口縁端部が屈曲する形態で、口径が13.6～16.6cmの中型品と22cmの大型品（60）がある。55・57・60の内面は平滑で、墨痕が認められたことから、硯に転用されたものと考えることができる。また、58の天井部外面には「井」の字の墨書が、



34・37・41・56・57・61・62 — SD01      35・36・38~40・42~52・54・55・58~60 — SD02      53 — SD03

第6~8図 須恵器実測図-1 (1/4)



第6-9図 須恵器実測図-2 (1/4)

53の口縁端部外面には重ね焼きの痕跡が認められた。53は東二坊坊間西小路東側溝SD03、56・57は六条大路南側溝SD01から出土したものである。

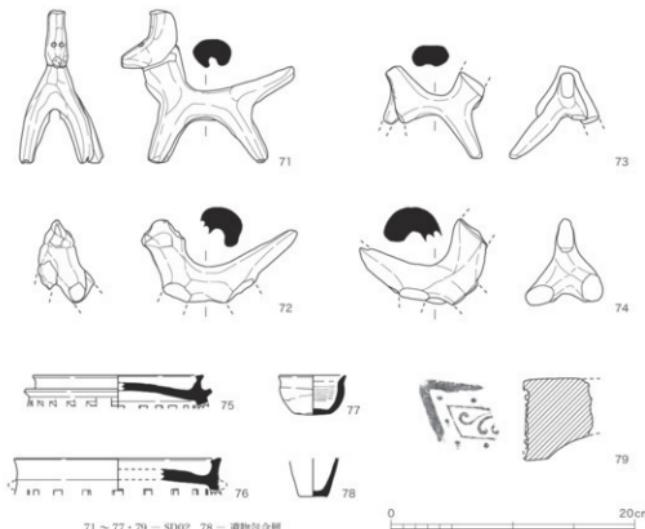
皿A (40)は、平底形態の皿で、口縁端部外面に重ね焼きの痕跡が認められた。59は、皿ないし杯の底部片と考えられるもので、外面に「旨」と墨書きされた墨書き土器である。

皿B (62)は、底部に高台を貼り付けた形態で、口径が25cmもある大型品である。底部内面は平滑になっており、摺られた可能性が考えられる。また、底部外面には、爪状の圧痕が認められる。

壺Mは、63が底部に高台を貼り付いたもので、口縁端部は丸くおさめ、頸部内面にはしづり目が残る。64は底分が平底で、回転糸切りの痕跡をとどめている。63は、六条大路南側溝SD01から出土した。

壺L (65～68)は、壺Mの大型形態で、口縁端部は上下に拡張させて面を形成している。65の外面には自然釉が付着している。65は六条大路南側溝SD01、67は東二坊坊間西小路東側溝SD03からの出土。

壺N (69)は、口縁部を欠損するが、肩部に把手を貼り付けた双耳壺と考えられるものである。



第6-10図 土製品・軒平瓦実測図(1/4)

底部は未調整の平底で、把手は四角形に面取りされ、径1.0cm程度の円孔を穿っている。外面には、自然釉の付着痕をとどめている。

鉢D(70)は、口縁部が短く外反し、端部を外側へ拡張させて外傾する面をもつ。軟質に焼成されていて、灰白色を呈する。

**土製品** 土製品には、陶硯、土馬、ミニチュア土器などがある。

75・76は、円面観の破片で、脚部には長方形の透かし孔を施している。円面部が平滑であることから、実際に使用されたものと考えられる。

土馬(71~74)は、71が完形品である以外はいずれも破損品で、頭部はもとより、脚部を欠失しているものがほとんどである。

ミニチュア土器には、土師器(77)と須恵器(78)がある。77は、ミニチュアカマドとセットになる鍋で、粗雑に作られている。78は、小壺と考えられる底部片で、平底の底部、割れ口には漆がわずかに付着していた。

**瓦類** 瓦類には、軒平瓦、平瓦、丸瓦などがある。軒平瓦(79)は、唐草文軒平瓦の瓦当片で、外区に珠文を配している。曲頭で、瓦質に焼成されており、側面及び凹面はケズリを施して調整している。

**漆塗し** 漆塗しは、六条大路北川溝SD02から15点ほどが出土したものである(第6-19図右下)。いずれも時計廻りに捩られた状態であり、長さ3~8cm、厚さ1~1.5cm程度の大き

付表6-1 出土土器観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
杯A	杯A	1	17.0	3.7	-	にぶい黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD02 4層	
		2	18.6	4.1	-	にぶい橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD02 2層	
杯B	杯B	3	-	(5.1)	12	にぶい橙色	内面：ヨコナデ 外面：ナデ後ミガキ	SD02 3層	
榢A	榢A	4	12.3	3.4	-	にぶい黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD02 4層	口縁部外 面に「九」 の墨書
		5	12.4	3.8	-	灰白色	内面：ヨコナデ 外面：摩滅のため調整不明	SD01 2層	内外面に 漆が付着
		6	13.1	(3.6)	-	灰黄色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD01・03	内面に漆 が付着
		7	12.8	(3.7)	-	にぶい橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD02 4層	
		8	13.8	(3.3)	-	にぶい橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD02 4層	
土師器皿A	皿A	9	14.6	(2.7)	-	にぶい黄褐色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、底部ケズリ	SD02 2層	
		10	16.0	(2.8)	-	にぶい黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、底部ケズリ	SD02 4層	底部外面 に墨書
		11	15.8	(2.8)	-	にぶい黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ、底部ケズリ	SD02 2層	
		12	17.4	2.4	-	にぶい褐色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD02 3層	
		13	20.4	2.8	-	にぶい褐色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ、底部ケズリ	SD02 2・4層	底部外面 に線刻
		14	20.6	(1.9)	-	灰黄色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ(c手法)	SD03 2層	
		15	21.6	(2.3)	-	にぶい黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ、底部ケズリ	SD02 4層	底部外面 に線刻
壺B	壺C	16	14.8	(5.5)	-	灰黄色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD02 3層	
		17	9.0	(3.2)	-	浅黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD01 2層	
		18	10.5	3.5	-	浅黄色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD03 2層	内面に漆 が付着
		19	10.4	3.3	-	浅黄色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD01 2層	内面に漆 が付着
		20	10.4	3.6	-	灰白色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD03	内面に漆 が付着
		21	10.9	4.4	-	浅黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD05	

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	壺C	22	11.4	4.5	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部ナデ、体部未調整	SD05	
	盤B	23	24.0	5.8	10.4	にぶい黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ後横方向にミガキ	SD02 3層	
	高杯	24	24.6	(2.1)	-	灰黄色	内面：ヨコナデ後ミガキ 外面：ナデ	SD02 3層	
		25	-	(8.1)	-	にぶい黄橙色	内面：芯棒作り 外面：ヘラケズリ	SD02 1層	7角形に面取り
	壺A	26	16.2	(7.0)	-	黄灰色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02 3層	口縁部外面に煤が付着
		27	18.9	(6.5)	-	灰黄色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02 4層	
	壺A	28	20.4	(7.1)	-	暗灰色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02	外面全体に煤が付着
		29	23.3	(8.2)	-	にぶい黄橙色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02 4層	
	壺C	30	24.6	(9.9)	-	にぶい黄橙色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02	
		31	27.4	(7.9)	-	灰黄褐色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02 4層	
須恵器	杯A	32	31.6	(3.9)	-	灰黄色	内面：口縁部ヨコハケ、体部ナデ 外面：口縁部ナデ、体部タテハケ	SD02 4層	
		33	27.0	(5.5)	-	にぶい黄褐色	内面：ヨコナデ 外面：タテハケ後ヨコナデ	SD02 3層	生駒山西 麓産
	杯A	34	11.6	4.9	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	SD01 2・4層	
		35	13.2	3.7	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	
		36	13.6	3.3	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	
		37	13.4	3.5	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	SD01 3層	底部外面に「井」の墨書
	皿A	38	13.3	3.7	-	にぶい黄褐色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	口縁部外面に墨書
		39	13.0	3.0	-	黄灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 4層	口縁部外面に「九」の墨書、口縁部外面に重ね焼きの痕跡
	皿A	40	15.2	2.8	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 2層	口縁部外面に重ね焼きの痕跡

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
杯B		41	12.0	4.5	8.2	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD01 1層	内面に漆 が付着
		42	12.6	3.9	9.2	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 2層	
		43	13.0	4.0	10.0	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02	
		44	13.7	3.9	10.2	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 3・4層	底部外面に 墨痕有り
		45	15.6	5.0	11.4	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 4層	
		46	15.6	4.0	10.8	黄灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 3層	
		47	15.2	4.9	10.8	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 4層	
		48	16.2	5.5	11.8	にぶい黄褐色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 2層	
		49	15.8	5.3	11.0	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD02 3層	底部外面に 墨書 外面に自然 釉が付着
		61	21.2	7.3	14.8	灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	SD01 1・2層	底部内面に 墨痕有り
須恵器		50	13.6	2.1	-	黄灰色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	内面平滑、 転用窓 つまみに 墨書
		51	15.2	2.8	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	
		52	14.2	2.8	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	
		53	15.2	(0.9)	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD03 2層	つまみを欠 損 重ね焼きの 痕跡有り
		54	16.0	2.3	-	明青色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02	
		55	16.6	2.3	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	内面平滑、 転用窓
		56	16.4	(1.5)	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD01 3層	つまみを 欠損
		57	-	(2.2)	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD01 1層	内面平滑 で墨痕有り、 転用窓
		58	-	-	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	天井部外 面に「井」 の墨書
		60	22.0	(2.3)	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：天井部ヘラ切り後ナデ	SD02 4層	内面平滑 で墨痕有り、 転用窓

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	出土遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯	59	-	-	-	灰色	内面:回転ナデ 外面:ナデ	SD02 4層	底部外面に「旨」の墨書き
	皿B	62	25.0	5.5	19.2	灰白色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD01 2層	底部内部平滑 底部外面に爪状圧痕
	壺M	63	4.3	8.7	4.5	灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD01 1・2層	
		64	-	(6.3)	4.2	灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、底部回転糸切り	SD02 4層	
	壺L	65	7.7	(6.8)	-	灰白色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD01 2層	外面に自然軸が付着
		66	10.1	(6.8)	-	灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD02 4層	
	壺N	67	-	(10.5)	7.8	明青灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD03 2・3層	
		68	-	-	-	灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、体部下半ケズリ	SD02 3層	外面に自然軸が付着
	鉢D	69	-	-	12.7	暗灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、底部は未調整	SD02	把手に円孔 外面に自然軸が付着
	鉢D	70	25.0	(19.2)	-	灰白色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD02 4層	
土製品	土馬	71	長さ 14.1	幅 6.8	高さ 12.5	浅黄褐色	ナデ	SD02	完形品
		72	長さ (12.8)	幅 (4.2)	高さ (4.8)	浅黄色	ナデ	SD02 3層	
		73	長さ (8.3)	幅 (7.5)	高さ (7.3)	浅黄橙色	ナデ	SD02 3層	全体に摩滅
		74	長さ (10.5)	幅 (7.1)	高さ (6.3)	にぶい黄橙色	ナデ	SD02 2層	
	陶瓶	75	14.0	(2.7)	-	青灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD02 3層	円面観、長方形の透孔
		76	17.0	(3.0)	-	灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	SD02 2層	円面観、長方形の透孔 墨痕有り
	ミニチュア土器	77	5.5	3.2	-	灰黄色	内面:口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ 外面:口縁部ヨコナデ、底部未調整	SD02 B区4層	土師器選
	ミニチュア土器	78	-	(3.2)	2.4	灰白色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、底部未調整	遺物包含層	須恵器壺、割目に漆付着
瓦	軒平瓦	79	長さ (5.7)	幅 (5.7)	厚さ 6.7	灰色	凸面:ナデ 凹面:ナデ 側面:ケズリ	SD02 2層	唐草文軒 平瓦

さがある。色調は、暗茶褐色を呈している。

## 小 結

今調査の最も大きな成果は、何といっても六条大路の南北両側溝および東二坊坊間西小路との交差点が確認されたことであろう。以下で、若干の検討を加えてまとめておきたい。

### (1) 条坊路と交差点

まず、六条大路については、今回南北両側溝を確認することができた。側溝の規模は、北側溝が南側溝に比べて大きく、しかも北側溝が流水の痕跡をとどめていたのに対して、南側溝では明確ではなかった。この六条大路については、これまで左京城で10地点、右京城では1地点の計11地点において確認されており、そのうち本事例のように同じ調査地ないし近接する調査で南北両側溝が確認されたのは3例ある。それによると、路面幅は側溝の心々間で24.5～24.8mという数値が得られ、おおむね80尺で計画され、施行されたことが知られる。また、側溝の方位については、西で北に16'前後振れていることが知られる。

次に、東二坊坊間西小路は、今回確認できたのは東側溝のみであるが、六条大路の側溝に比べてやや規模が劣っているといえる。これまでに12地点において確認されているが、今回の調査地はその南限に相当する。一方、北限については、京城外にあたる野田遺跡においても確認されていることは、東一坊大路の場合と同様に注意すべきである。同じ調査地で東西両側溝が確認されたのは8例あり、路面幅を側溝の心々間で計測すると、左京第413次調査の7.83mは短かすぎるくらいがあるが、他を検討すると8.4～9.6mという数値が得られ、おおむね30尺で計画され、施行されたと言えそうである。また、側溝の方位については、北で東に5'程度振れていることが知られる。

次に、今回六条大路と東二坊坊間西小路の交差点を確認できたが、北と南で交差の状況が異なっていることが判明した。すなわち北側はT字状、南側はL字状に交差しており、六条大路が東二坊坊間西小路よりも優先されていることが分かる。ただ気になる点は、斜行溝SD05の存在であって、この溝は六条大路の路面を斜行するように掘られ、流水があることから、確認することはできないが北側溝から南側溝に接続して水を流す役割を有していた可能性を考える必要があろう。

### (2) 遺物の特徴

今回の調査では、条坊側溝から土師器や須恵器など長岡京期の遺物がまとまって出土した。図示していない遺物も多いが、興味深いことは、漆の付着した土器や漆漬しなど漆に関わる遺物が比較的目立つことである。漆が付着した土器は、各側溝から出土しているが、いずれもパレットとして使用された土師器の椀Aや壺Cなど小型の器種で、壺や甕などといった貯蔵具はない。特に、漆漬しは出土例が乏しいものであって、具体的な内容を指摘することはできないが、六条大路の南北に漆を使用した何かしらの工房が存在したことを示唆するものとして重要である。付近には、東市の中存在した可能性が推定されているだけに、注意すべきことであろう。

(山本 卿雄)

付表6-2 東二坊坊間西小路側溝の座標値一覧

	東 側 溝				西 側 溝				文献
	調査 次数	遺構名	X座標	Y座標	調査 次数	遺構名	X座標	Y座標	
左京城 外	野田 10	SD10002	-116,386.80	-26,175.40	野田 10	SD10001	-116,405.35	-26,184.85	1
	L345	SD34520	-117,526.00	-26,175.70	L345	SD34521	-116,529.00	-26,184.70	2
	L41	SD4101	-116,572.60	-26,176.00					3
					L425	SD42502	-117,928.00	-26,185.74	4
	L413	SD41301	-117,990.00	-26,178.18	L413	SD41302	-117,991.00	-26,186.01	5
	L52	SD5201	-118,020.00	-26,178.35					3
	L120	SD12031	-118,080.00	-26,177.81	L120	SD12032	-118,080.00	-26,186.65	6
	L437	SD43708	-118,170.00	-26,177.50	L437	SD43709	-118,170.00	-26,187.10	7
	L278	SD13	-119,393.20	-26,179.10	L278	SD12	-119,393.20	-26,188.30	8
	L212	SD21223	-119,575.00	-26,180.10	L212	SD21622	-119,575.00	-26,188.80	9
左京城 内	L216	SD21616	-119,700.00	-26,181.19	L216	SD21615	-119,856.00	-26,189.60	10
	L302	SD04	-119,949.50	-26,181.20					本書
	L302	SD03	-119,983.00	-26,181.60					本書

文献1 『向日市報告書』第88集 2011年

文献2 『向日市報告書』第62集 第1分冊 2004年

文献3 『長岡京跡研究所報告書』 2003年

文献4 『向日市報告書』第74集 2006年

文献5 『向日市報告書』第51集 第1分冊 2000年

文献6 『向日市報告書』第18集 1986年

文献7 『向日市報告書』第77集 2008年

文献8 『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年

文献9 『長岡京市センター年報』平成63年度 1990年

文献10 『京都府センター概報』第40冊 1999年

付表6-3 六条大路側溝の座標値一覧

	北 側 溝				南 側 溝				文献
	調査 次数	遺構名	X座標	Y座標	調査 次数	遺構名	X座標	Y座標	
左京城 内	L270	SD213	-119,956.12	-25,771.60					1
					L288	SD212	-119,980.74	-25,756.00	1
	L210	SD34	-119,955.40	-25,820.00	L210	SD38	-119,979.90	-25,820.00	2
	L297	SD29705	-119,954.50	-26,025.00	L297	SD29706	-119,979.30	-26,025.00	2
	L302	SD30202	-119,953.84	-26,183.60	L302	SD01	-119,978.64	-26,175.00	本書
	L390	SD01	-119,953.20	-26,323.00					3
	L557	SD25	-119,952.90	-26,349.30					4
	L541	SD03	-119,952.80	-26,382.00					5
	L564	SD01	-119,952.30	-26,455.60					6
	L269	SD20	-119,952.00	-26,528.00					7
右京城	R886	SD18	-119,949.40	-27,212.00					8

文献1 『京都市研究所報告』第18冊 1998年

文献2 『長岡京市センター資料選』(二) 2013年

文献3 『長岡京市センター年報』平成8年度 1998年

文献4 『長岡京市センター年報』平成24年度 2014年

文献5 『長岡京市センター年報』平成22年度 2012年

文献6 『長岡京市センター年報』平成25年度 2015年

文献7 『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年

文献8 『長岡京市センター年報』平成18年度 2008年



第6-11図 調査区全景（北から）



第6-12図 六条大路北側溝 SD02 全景（西から）



第6-13図 六条大路北側溝 SD02・東二坊坊間西小路東側溝 SD04 合流（南から）



第6-14図 六条大路南側溝 SD01・東二坊坊間西小路東側溝 SD03 全景（北から）



第6-15図 六条大路南側溝 SD01・東二坊坊間西小路東側溝 SD03 全景（西から）



第6-16図 斜行溝 SD05（南東から）



第6-17図 斜行溝 SD05 土師器壺 C 出土状況  
(北東から)



第6-18図 出土遺物-1



第6~19図 出土遺物-2

## 7. 長岡京跡右京第 270 次調査

～長岡京期・平安時代 長岡京跡・開田遺跡、溝・掘立柱建物等出土資料～

調査地	長岡京市開田三丁目 5-5	地区名	7ANKTR-3 地区
調査期間	1987（昭和 62）年 7月 15 日～8月 12 日	調査面積	151m <sup>2</sup>
時期	平安時代・長岡京期	出土遺物	12 箱
立地	緩斜状地 標高 20.1 m		
参考文献	「右京第 270 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 62 年度 1989 年		

### 調査の概要

当調査は共同住宅の建て替えに伴って実施した発掘調査で、長岡京跡右京六条二坊八町にあたるとともに、開田遺跡にも含まれるところである。

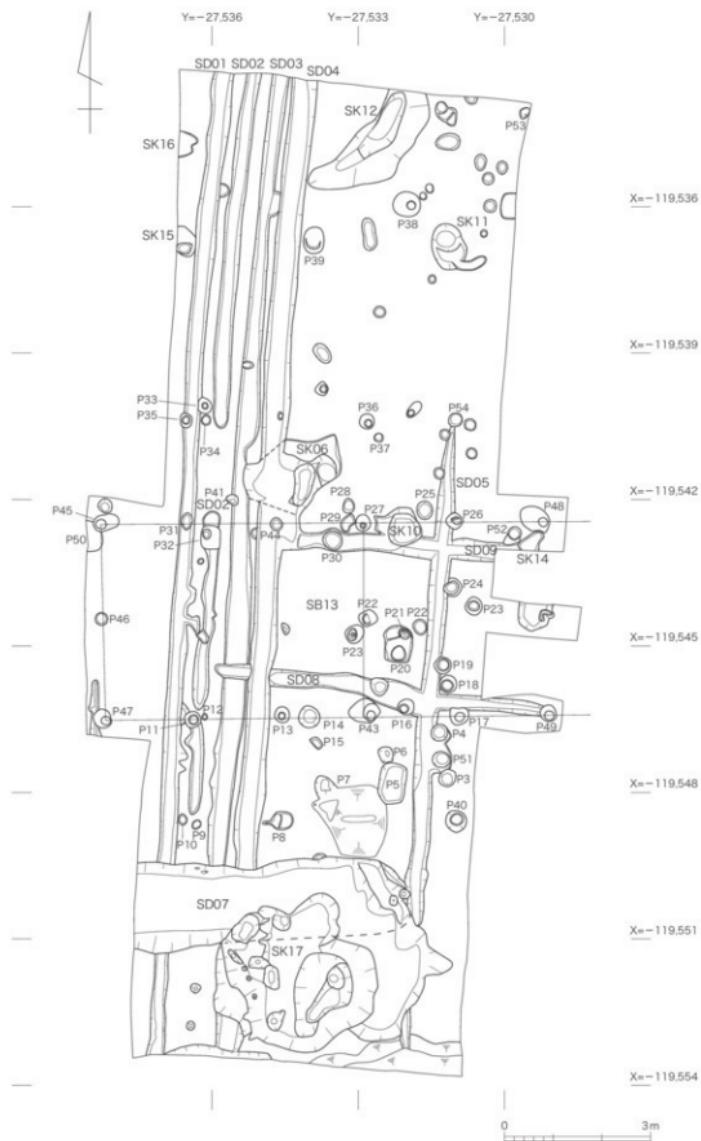
調査地は阪急長岡天神駅の東約 280 m の住宅街にあたり、周辺には個人住宅や集合住宅が建て込んでいるところである。調査地の位置は、旧国土座標・第 VI 座標系の X = -119,543、Y = -27,534 で、地表面の標高は 20.1 m ほどである。

造成土・旧耕作土を 40 ～ 50cm 下げると黄灰色粘質土の地山面となる。遺構は近世の南北溝群（溝 SD01 ～ 05）、平安時代～中世の柱穴、平安時代の掘立柱建物、長岡京期の溝などが地山面に切り合って検出された。

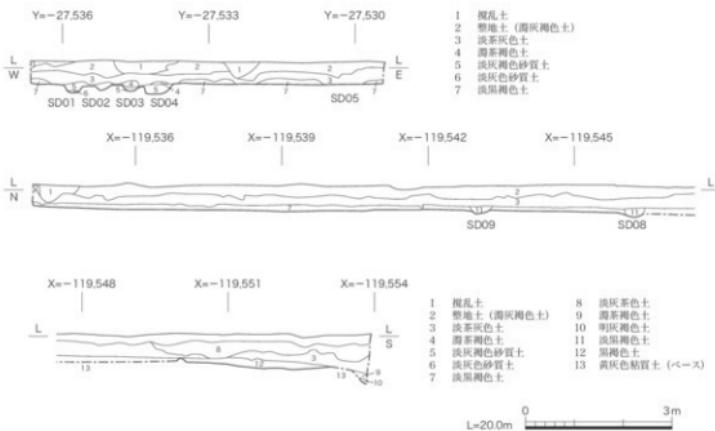
掘立柱建物 SB13 は梁間 2 間 × 柱行 5 間以上の東西棟である。建物方位はほぼ真東西を向いて



第 7-1 図 発掘調査地位置図 (1/5000)



第7-2図 調査区検出遺構図 (1/100)



第7-3図 調査区土層図 (1/100)

いる。柱掘形は30cm前後の円形のものが多い。柱間は梁間1.8m、桁行1.9mで、西より3間目で間仕切りされている。

建物より出土した遺物には、第7-7図28の土師器甕、29の土師器羽釜、32の黒色土器椀があり、これらの遺物から建物の時期は11世紀頃と考えられる。

長岡京期の遺構は土坑SK06、溝SD07が検出された。

土坑SK06(第7-5図)は、長径2.0m、短径1.5mの不定形な平面形で、深さは0.3mの土坑である。溝SD04に切られて半分強の残りである。

土坑SK06から出土した遺物は第7-7図1~8である。土師器甕・高杯、須恵器杯B蓋・杯B・杯A・壺Gなどが出土している。

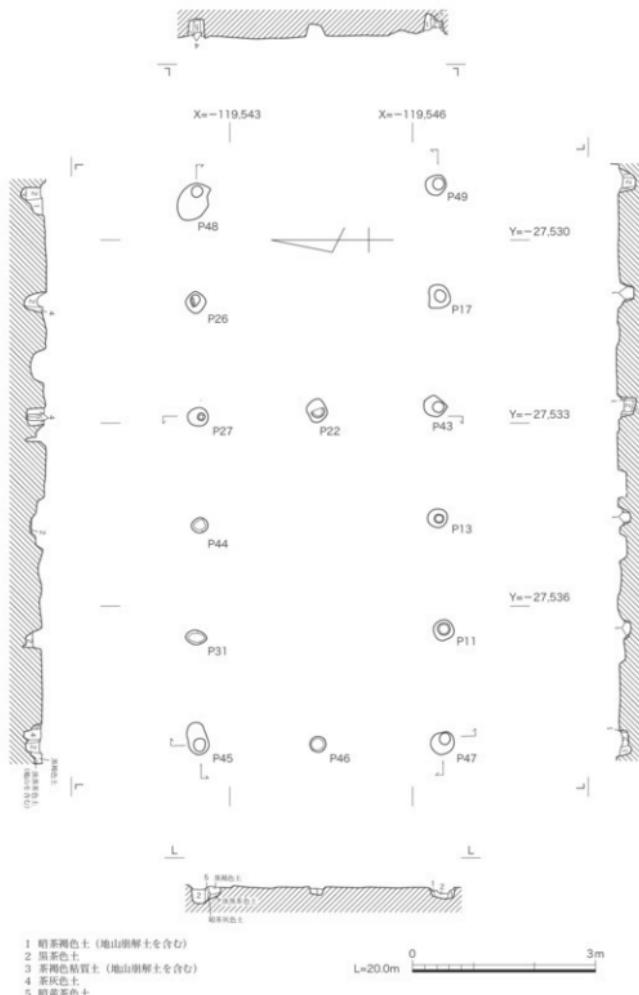
溝SD07は東西方向の溝で、トレンチ東部で途切れている。溝の南部は土坑SK17を切っていることが確認された。溝の規模は幅1.8mで深さは0.5mほどである。溝心の座標はX=-119.550.3である。

溝SD07から出土した遺物は第7-7図9~24である。銭貨(神功開寶)、土師器の椀・皿類、須恵器の杯・蓋類などの供膳形態が出土している。

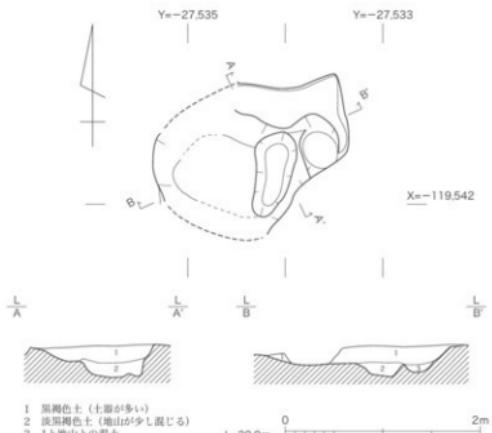
土坑SK17は東西4m強で南北3m強、深さ0.7mの大型土坑であるが、溝SD07とは第7-6図・10層を挟んで近似する層が堆積していることと、10層を除外するとはほぼ同じ深さとなることなどから、当初同じ遺構であったものが掘り直されて溝SD07となつた可能性が考えられる。遺物はほとんど出土していない。

### まとめ

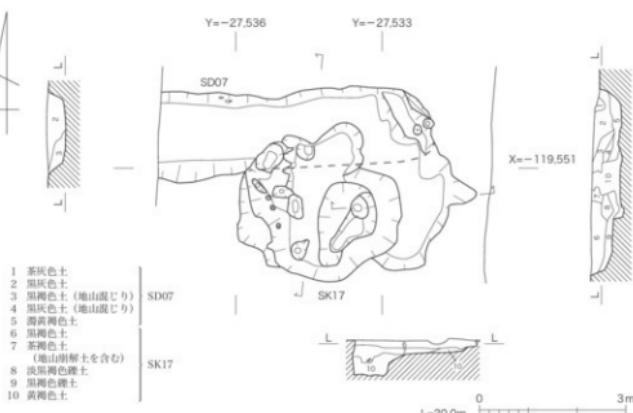
今回の調査では、平安時代の掘立柱建物と柱穴が検出され、平安時代・開田遺跡に関する資料



第7-4図 掘立柱建物SB13実測図(1/80)



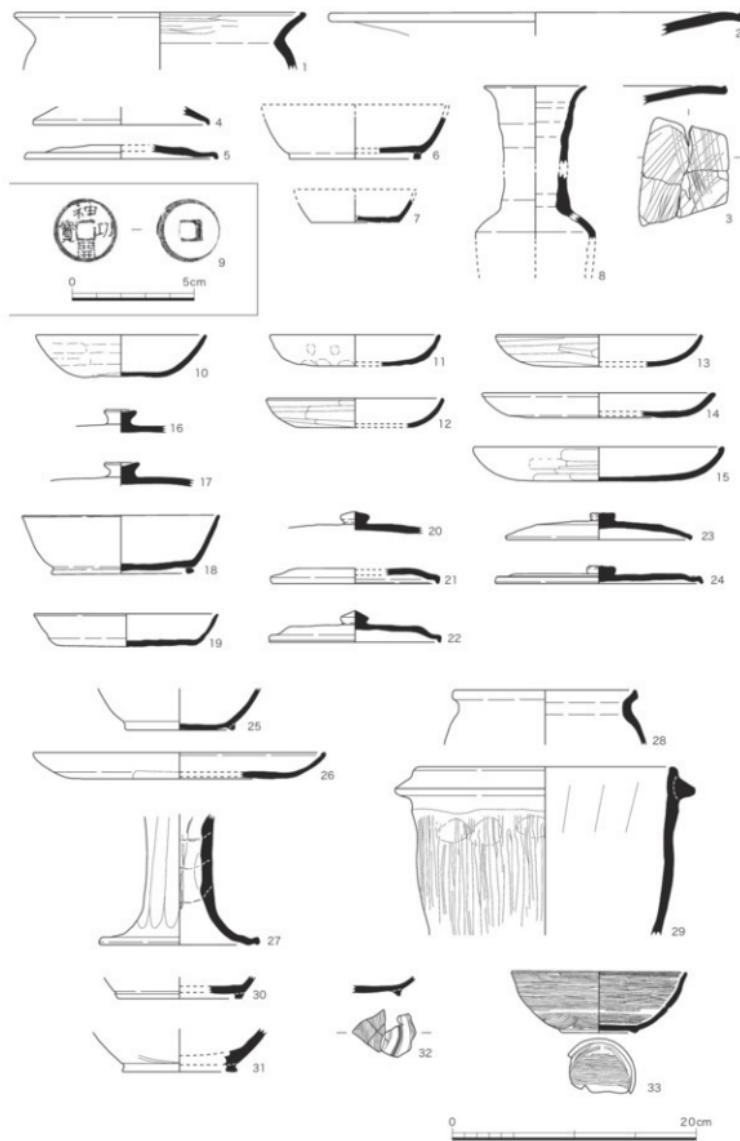
第7-5図 土坑SK06 実測図(1/50)



第7-6図 溝SD07・土坑SK17 実測図(1/100)

が検出された。周辺の調査では右京第529次調査で9世紀の掘立柱建物、井戸などで構成される遺構群が検出されている。また右京第442次調査では10世紀後半頃の柱穴が検出されている。これらの遺構は今回検出された掘立柱建物とは時期を同じくしないが、長岡京廃都後、特に平安時代の当地域の状況を解明する数少ない調査例である。

開田遺跡においては、長岡京五条大路の痕跡が現在まで残存している地域として注目されてき



第7-7図 出土遺物実測図 (1/4・1/2)

たが、この問題を考える上でも平安時代の様相は重要である。

長岡京期については、今回検出された溝 SD07 の性格が問題となる。調査地は長岡京跡右京六条二坊七町に該当するが、調査地南部には六条条間北小路が想定されている。条坊復原によると六条条間北小路北側溝の想定座標は X = -119,551.96 である。<sup>(3)</sup> 今回検出された溝 SD07 は 1.66 m 北での検出遺構となり、近似位置での検出溝である。

溝 SD07 を検証する資料としては右京第 651 次調査で検出された五条大路南側溝がある。<sup>(4)</sup> ここで溝心座標は X = -119,431.5 であり、溝 SD07 との距離は 118.8 m となる。この数値は一町の広さである 40 丈（長岡京造営尺 0.296 m × 400 = 118.4 m）とほぼ同じといえよう。

のことから溝 SD07 が六条条間北小路である可能性は十分考えられる。しかしながら問題点は残る。それは六条条間北小路に関する資料はまだ当資料のみであり、当調査地の隣りの町にあたる西 100 m で実施した右京第 529 次調査地では検出されていないことである。今後周辺での調査によって再検討する必要があろう。

（小田桐 淳）

注 1) 中島博夫「右京第 529 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 8 年度 1998 年

2) 木村泰彦「右京第 442 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 5 年度 1995 年

3) 「長岡京条坊復原図」『向日市センター年報』10 1999 年

4) 小畠佳子「右京第 651 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 11 年度 2001 年

付表 7-1 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	甕	1	24.0	(4.7)	-	黄橙色	内面：口縁部ハケメ、体部ナデ、外面：ヨコナデ、ナデ、体部摩減のため調整不明	SK06 1層	
	高杯	2	34.0	(1.9)	-	赤茶色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SK06 1層	
		3	-	(1.5)	-	橙褐色	内面：ナデ、外面：ミガキ	SK06 1層	
須恵器	蓋	4	14.4	(1.5)	-	灰色	内外面：ロクロナデ（時計回り）	SK06 1層	
	杯 B 蓋	5	15.8	(1.15)	-	青灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘラオコシ（時計回り）	SK06 1層	外面に重ね焼きの痕跡
	杯 B	6	-	(3.5)	10.8	明灰色	内外面：ロクロナデ、外面：貼り付け高台、底部ヘラオコシ（反時計回り）	SK06 1層	内面に墨痕、使用痕
	杯 A	7	-	(1.9)	7.2	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラオコシ（反時計回り）	SK06 1層	
	壺 G	8	8.4	(12.6)	-	淡灰白色	内外面：ロクロナデ（時計回り）	SK06 1層	
錢貨	神功開寶	9	幅 2.65	長 2.65	厚 1.14 ~ 1.47			SD07 B 区 3 層	重量 1.3g

種類	器形	番号	法量(cm)			色調	調整	地区 層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	皿	10	14.0	3.5	-	赤橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：口縁部 ヨコナデ、ケズリ（c手法）	SD07 B 区 3層	
		11	14.0	2.6	-	黄橙色	内面：ナデ、外面：口縁端部ヨコナデ、 不調整（e手法）	SD07 B 区 1層	
		12	14.6	(2.4)	-	黄橙色	内面：ヨコナデ、外面：口縁端部ヨコ ナデ、ケズリ（c手法）	SD07 B 区 3層	
		13	17.0	2.6	-	赤橙色	内面：ヨコナデ、外面：口縁端部ヨコ ナデ、ケズリ（c手法）	SD07 B 区 7層	
		14	19.2	2.0	-	赤橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ、外面：底部 不調整（f手法）	SD07 B 区 6層	
	杯B 蓋	15	20.6	2.8	-	赤橙褐色	内面：ヨコナデ、外面：口縁端部ヨコ ナデ、ケズリ（c手法）	SD07 B 区 3層	
		16	-	(1.85)	-	外面：黄茶色、 内面：赤橙色	外面：ナデ	SD07 B 区 7層	
		17	-	(2.0)	-	赤茶褐色	外面：ナデ	SD07 A 区 7層	
須恵器	杯B	18	16.2	4.85	11.7	青灰色	内外面：ロクロナデ、外面：貼り付け 高台、底部ヘラオシ（反時計回り）	SD07 B 区 6層、トレンチ 南端上層	
		19	15.1	2.7	11.5	暗灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラ オシ後ナデ（時計回り）	SD07 B 区 3層 4層	内面に墨 痕
	杯B 蓋	20	-	(1.8)	-	青灰色	内面：ロクロナデ、外面：天井部ヘラ オシ後ナデ（時計回り）	SD07 B 区 4層	
		21	13.8	(1.25)	-	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘ ラオシ（時計回り）	SD07 B 区 3層 4層	
		22	14.1	2.6	-	青灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘ ラオシ後ナデ（時計回り）	SD07 A 区 3層、B区4 層 1層	内面に墨 痕
		23	15.35	2.25	-	青灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘ ラオシ（時計回り）	SD07 B 区 6層	
		24	17.1	1.45	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘ ラオシ後ナデ（反時計回り）	SD07 A 区 2層	内面に墨 痕
土師器	杯B	25	-	(3.4)	9.0	赤橙色	内外面：調整不明、外面：貼り付け高台、 底部ナデ	A区 1層	
		26	24.0	2.15	-	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面： 底部ヘラケズリ（b手法）		
	高杯	27	-	(10.7)	13.2	黄橙色	内面：絞り痕	A区 6層	
		28	15.2	(4.5)	-	黄灰色	内外面：摩減のため調整不明	SB13 P45 掘形	
	壺	29	21.4	(13.8)	-	黄茶色	内外面：ヨコナデ、内面：板ナデ、ナデ、 外面：ナデ、指頭圧痕、タテハケ	SB13 P26	外面に煤 付着
		30	-	(1.85)	10.2	青灰色	内外面：ロクロナデ、外面：貼り付け 高台、ヘラオシ後ナデ（時計回り）	P41 掘形	
		31	-	(3.55)	9.4	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：貼り付け 高台（時計回り）	SK10 1層	
黒色土器	椀	32	-	(1.6)	-	黒色	内外面：ミガキ、外面：貼り付け高台	SB13 P49 線刻	
		33	14.4	5.0	6.3	黒色	内外面：ミガキ、外面：貼り付け高台	P40 掘形	



第7-8図 遺構検出状況（南東から）



第7-9図 調査地全景（南東から）



第7-10図 挖立柱建物 SB13（北から）



第7-11図 土坑 SK14 断面（西から）



第7-12図 土坑SK14断面(南から)



第7-13図 出土遺物-1



第7-14図 出土遺物-2



第7-15図 出土遺物-3

長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選（五）

平成 27 年 3 月 13 日 発行

編集発行 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電話 075-955-3622

FAX 075-951-0427

印 刷 山代印刷株式会社

〒 602-0062 京都府京都市上京区寺之内通小川西入

宝鏡院東町 588 番地

電話 075-441-8177

FAX 075-441-8179